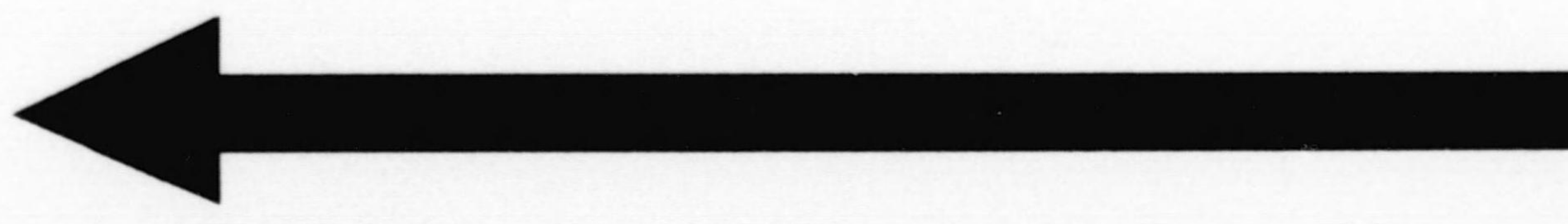
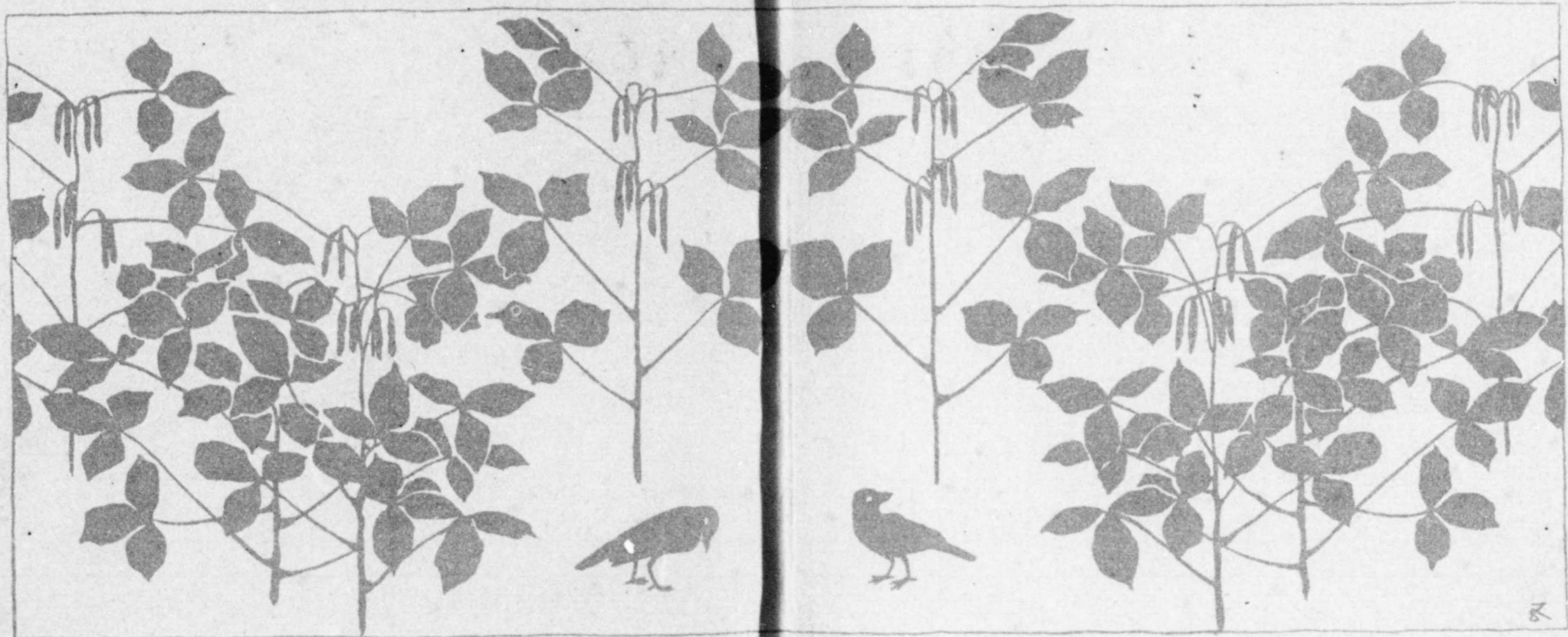




始







謹

曲

集

下卷

911
x27

謠曲集下 目錄

外 一	寢覺	一
	江島	六
	代主	四
	九世戸	三
	逆矛	五
外 二	西王母	三
	道明寺	五
	經政	四
	箴	四

目錄

巴	三	
外 三	嵐山	五
	正尊	三
	卷絹	七
	花月	五
	鐘馗	八
外 四	項羽	五
	橋辨慶	六
	熊坂	五
	小督	三
	野守	九

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。
シヨソソソ

外五

張良……………一五
 羅生門……………一〇
 鐵輪……………三五
 藍染川……………三三
 雲雀山……………一四
 外六
 住吉詣……………一〇
 谷行……………一五
 半部……………一六
 禪師會我……………一五
 車僧……………一六
 外七

外八

吉野天人……………一五
 大佛供養……………一七
 忠信……………一五
 烏帽子折……………一八
 大瓶狸々……………一九
 外八
 鶴龜……………一〇
 和布刈……………一〇
 大社……………一八
 東方朔……………二三
 春榮……………二七
 外九
 第六天……………二六

外十

土蜘蛛……………二三
 舍利……………二七
 小鍛冶……………二四
 石橋……………二九
 外十
 合浦……………二五
 生田敦盛……………二六
 草子洗小町……………二六
 六浦……………二七
 松山鏡……………二六
 外十一
 金札……………二八
 大江山……………二八

外十二

岩船……………二九
 知章……………二九
 俊成忠度……………三〇
 外十二
 戀重荷……………三〇
 砧……………三一
 鷺……………三八
 望月……………三三
 外十三
 七騎落……………三一
 弱法師……………三四
 絃上……………三七

別一

淡路……………三五
 放下僧……………三二
 吉野靜……………三八
 籠太鼓……………三七
 錦戶……………三六

別二

室君……………三四
 碇潛……………三七
 身延……………三五
 枕慈童……………三九
 飛雲……………四〇

別三

放生川……………四〇
 須磨源氏……………四二
 胡蝶……………四七
 松蟲……………四三
 一角仙人……………四九

別四

三笑……………四四
 鳥追舟……………四六
 藤……………四六
 水無月祓……………四五
 歌占……………四五

別五

雨月……………四六
 土車……………四七
 攝待……………四七
 國栖……………四八
 雷電……………四九

別六

繪馬……………五〇
 現在七面……………五〇
 昭君……………五一

附說……………五八—五三〇
 謠曲集上下卷索引……………五三—五八四

延喜の聖主一醒
 開天皇
 延喜の聖主一醒
 開天皇
 延喜の聖主一醒
 開天皇

謠曲集

外一

寢覺

梗
 延喜の御代、信州木曾の寢覺の床に、勅使參向あり、三返の翁
 あらはれて、壽命長久の靈藥を奉り、天女の舞、龍神の化現あ
 る事を作る。めでたき曲なり。三返の翁は浦島太郎なり
 といふ。蓋し浦島が寢覺の床に釣を垂れきといふ俗傳に
 據れるなり。(能膺)

シ テ 老翁(後は三返翁) 前ツレ 男
 後ツレ 天女(謠無し) ワ キ 臣下

三人次第謠「畏き君の勅を受け、畏き君の勅を受け、東の旅に急がん。ワキ詞」そもく、是は延
 喜の聖主に仕へ奉る臣下なり。さても信濃國木曾の郡に、寢覺の床とて在所あり、彼

外一 寢覺

三返の翁—三百歳の人
宣旨—勅命

木曾の麻衣—名産
懸路—棧道

所に三返の翁と申す者、壽命めでたき藥を與ふる山君聞召し及ばせ給ひ、急ぎ見て參れとの宣旨を蒙り、只今信濃國寢覺の里へと急ぎ候。三人道行誦「思ひ立つ、空も重なる雲の袖、空も重なる雲の袖、靡きて歸る雁がねも、山又山を越え過ぎて、行けば程なき旅衣、木曾の御坂も近づくや、嵐に更くる夜半の空、寢覺の床は是かとよ、寢覺の床は是かとよ。ワキ詞「急ぎ候間、是は早寢覺の床に著きて候。此所にて彼の翁を尋ねうするにて候。ツレ、一聲誦「信濃路や、木曾の御坂の春風に、行方も知らぬ花ぞ散る。ツレ誦「霞こめたる谷の戸に、ツレ、誦「世を驚の聲しけし。シテ、サシ誦「所から春立つ山路分け過ぎて、ツレ、誦「探るや薪の尾上の鐘、臙々と聞き馴れて、たどるや老の坂ならん。上歌立ち上る、木曾の麻衣袖しをり、木曾の麻衣袖しをり、賤が家居の業なれば、懸路の橋も馴れくいて、いくへ重なる白雪の、解けて落ち来る谷川の、水も岩根や傳ふらん。水も岩根や傳ふらん。

ワキ詞「如何に是なる老翁に尋ねべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。見奉ればこのあたりにては見馴れ申さぬ御姿なり、若し都よりの御下向にて候か。ワキ詞「實によ

役行者—小角といふ

く見て有る物かな。是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なるが、此所に三返の翁と申す者、壽命めでたき藥を與ふる山君聞召し及ばせ給ひ、急ぎ見て參れとの宣旨なり。彼の老翁が私宅を教へ候へ。シテ詞「さては勅使にて御座候ぞや、あら有難や候。總じて此三返の翁と申すは、生所もあらず出所もなく、ツレ誦「只おのづから其儘にて、寢覺の枕松が根を、シテ詞「宿と定むる翁なれば、定めてこゝに來るべし。ワキ誦「實にくはいはれたりと、岩根の枕寢覺の床に、シテ誦「暫く御待ち候へとよ。ワキ誦「暫し休らふ、シテ誦「其内に、地誦「日も夕暮に程もなく、日も夕暮に程もなく、なるや彌生の空なれば、月も臙にさし出でて、山の端白き松の風、枝を鳴らさぬ木の下に、暫し休らふ旅居かな。暫し休らふ旅居かな。ワキ詞「なほく、寢覺の床の謂委しく御物語候へ。クリ地誦「そもく、この寢覺の床と申すは、役の行者暫く御座をなし給ひて、觀念の眠を覺し給ふ。シテ、サシ誦「然るに彼三返の老翁は、生所も知らず出所もなく、地誦「只おのづから忽然と、現れ出でて寢覺の床に、千年を送る其内に、壽命めでたき藥を服し、三度若やく故により、三返の翁と名づけたり。

昇養一有窮后羿
は夏の代の人養
由基は周の代の
人共に射を能く
す
愛染明王一三目
六臂の像人をして
佛法を愛せし
むる力を有す禪
定智慧を弓矢に
譬ふ

天つ風云々一僧
正暹昭の歌を引
く
海青樂一樂の名
醫王佛一薬師如
來

グセ 或る時翁申すやう、昇養射術を傳へて、其名を雲の上にあけ、されば愛染明王は、定の弓惠の矢にて、悪魔を従へ給ふなり。我は又御薬の、威徳を以て大君の、代を治めんと思ふぞと、勅使に申し上げければ、勅使喜悅の色をなし、汝如何にと宣へば、シテ謡今は何をか包むべき、地謡「我此所に年經たる、三返の翁なるが、目前に來りたり、勅使暫く待ち給へ、夕月の夜もすがら、舞樂を奏し見せ申し、又御薬を與へんと、いふかと見れば老翁は、岩陰に寄ると見えて、行方知らずなりにけり。行方も知らず失せにけり。(中入)

地謡「天つ風、天つ風、雲の通路吹きとちよ、少女の衣色々に、糸竹も音を添へて、波の鼓聲澄むや、海青樂を奏しけり。(天女舞)後シテ「そもく是は醫王佛の化現、無病息災の方便のため、三返の翁假に現れ出でたるなり。地謡「其時老翁樞を開き、其時老翁樞を開き、青天遙に見渡しければ、シテ謡「東南に雲晴れ、西北の風も吹きをさまつて、地謡「花降り異香音樂の響き、舞樂の數々少女の袂、返すくも面白や。

地謡「夜遊の舞樂も時過ぎて、夜遊の舞樂も時過ぎて、有明方の、月も落ちくる折からに、

不思議や川波はけしく荒れて、二龍の姿は現れたり。地謡「兩龍王は川波に浮み、兩龍王は川波に浮み、彼の御薬を捧ぐる氣色、汀に坐してぞ見えたりける。シテ謡「老翁悦びの思をなして、彼客人の御慰みに、神通自在の秘術を現して、夜遊の戯れなし給ふ。

シテ謡「かくて時移り頃去れば、地謡「かくて時移り頃去れば、彼の御薬を君に捧げ、勅使に與へて是までなりと、木會の棧ゆらりと打ち渡り、歸り給へば龍神も、東西に飛行の翔り、波に戯れ巖に上れば、夜もしらくくと明方の空に、夜もしらくくと明方の空に、夢の寢覺は覺めにけり。

江島

梗概

欽明天皇の御代、江島涌出す。依て勅使參向せらる。辨財天女竝に龍神の示現あり。寶珠を捧げ、舞樂を奏す。江島縁起を本として作れる神事能なり。(脇能)

ツテ 五頭龍王(前は漁翁) ツレ 漁夫(後ツレ辨財天) ワキ 勅使

治まる折を得 江の島に掛く
影向一神が姿を現すこと
鳥の海一琵琶湖

ワキ次第誦 治まる折を江の島や、治まる折を江の島や、動かぬ國ぞ久しき。ワキ詞「そもそも是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なり。扱も相摸國江野と云ふ浦に、去んぬる卯月十日あまりに、不思議の奇瑞さまぐあつて、海上に一つの島涌出す。即ち江野になぞらへて是を江の島と號す。島の雲上に天女現れ給ふ。これ辨財天影向の地にて、福壽圓滿の靈地なれば、急ぎ見て參れとの勅に任せ、只今東海道に下向仕り候。三人道行誦「東路も、其方の空に行く雲の、そなたの空に行く雲の、影も涼しき鳩の海、遙けき旅を駿河なる、

島つ島一鶴の枕 詞なれば浮と積
崑崙一唐土にて 神仙の棲む山
蓬萊界一仙郷
徐市一方士をり 徐福ともいふ
驪山一始皇の墓 あり
せいしやう一齊 少にて方士少翁 かといふ
霸陵原一漢文帝 の墓あり

富士の高嶺の月影も、いく山々に移り來し、相摸國に著きにけり。相摸國に著きにけり。ワキ詞「日を重ねて急ぎ候程に、是は早相摸國江の島に著きて候。此浦の者を相待ち、事の由をも窺はばやと存じ候。

ツレ「一聲誦」鳥つ島、浮海松涼し波の上、有明残る朝ほらけ、ツレ誦「波もて立つや夏衣、ツレ、詞「うらぶれ渡る沖つ風。シテ、サシ誦「それ江の島は崑崙の氣をうつし、五城の垣重なほけれど、ツレ、誦「蓬萊界の勢を傳へたる、三壺の形あらたなり。秦皇徐市を疑はば、驪山頂の春の風、なほさがりがてらに渡らめや、漢帝せいしやうを用ひずは、霸陵原の秋の月、心凄くは澄まざらまし、眞に人間の妙奇仙境の秘跡なり。下歌一度も、歩みを運ぶともがらは、上歌三千世界の内にまづ、三千世界の内にまづ、無量福の寶を得、一期生の後に早く、不退轉の位に至る。かよる誓の海山も、猶萬代の末かけて、靡き従ふこの國の、盡きせぬ御代は有難や。盡きせぬ御代は有難や。ワキ詞「我江の島に上り、山海の致景を眺め、事の由をうかどふ所に、海人あまた來れり。

天水紛紜一空と
水との相連なり
て分き難きこと

鷲々一雷聲
せいく一未詳
岩巖一大岩

四天王
持國增長廣目
四大天王

如何に翁、御事は此浦の者か。シテ詞「さん候此浦の者にて候が、毎日此島に上り、山上山下岩窟社々を清め申す者にて候。さて御身は何處よりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なるが、この島涌出の由聞召され、事の子細を悉く尋ね見て參れとの宣旨に任せ、是まで勅使を下さるよなり。委しく子細を申し候へ。シテ詞「さてはかたじけなくも帝よりの勅使にてましますぞや。そもくこの島は欽明天皇十三年卯月十二日戌の刻より、同じく二十三日辰の刻に至るまで、江野南海湖水港の口に雲霞暗く蔽ひて、天水紛紜たり、大地震動する事十日にあまれり。とばかり有りて天女雲上に現れ、童子左右に侍り、もろくの天衆龍神水火雷電、山神鬼魅夜叉羅刹雲上より磐石を下し、海底より塊砂を噴き出す。ツレ謡「鷲々たる雷の光せいくを萬天の間に飛ばし、シテ謡「霹靂帛を裂くが如し、波浪金を湧かすに似たり。ツレ謡「岩巖多く浮め出だし、夜叉鬼神島を作る。シテ詞「或は銅杵を持つて打碎き、ツレ謡「或は鐵杖を持つて裂き破る。シテ詞「又は二つの岩を押合はせ、ツレ謡「又は一つの石を峙てたり。シテ詞「とりく島を作り給へば

四天王一多聞
持國增長廣目の
四天王

天部一辨財天女
のこと

梵天帝釋四天王、上界の天人下界の龍神、ツレ謡「残らすこゝに現れ給ひ、ツレ謡「おのこの是を衛護し給ふ。其後藹雲收りて、海上に一つの島を成せり。即ち江野になぞらへて、江野島と是を申すなり。ワキ謡「謂れを聞けば有難や。即ち是は明君の、直なる御代のしるしを見せて、かよる奇特を拜む事よと、いよく御影を仰ぐなり。詞「さてこの島は天部の影向、又は如何なる御神の、龍鎮守と現れ給ふらん。シテ詞「なかくの事此島に、各諸神まします中にも、龍の口の明神は、天部と夫婦の御神にて、衆生濟度の御方便、あがめても猶餘りあり。ワキ謡「實に有難やかくばかり、深き恵みの海山も、猶萬歳を呼ばふなる、シテ謡「聲か松吹く風の音の、ワキ謡「涼しき巖に寄る波も、シテ謡「治まる國のしるしを見せて、ワキ謡「豊に住める、シテ謡「この時を、上歌地謡「萬代の、始と今日を祈りおき、始と今日を祈り置きて、今行末もこの島の、誓は盡きぬ無量億の、樂みの數々を、受け繼ぐ國ぞ久しき。善神は一切の福を授け、惡神は萬里の禍を拂ふ浦風も、天部の誓なるとかや。頼め猶隔なき、眞如の玉も曇らじ。

堰中一堰は堀なり
廟外垣内の地
翠屏一青山のこ
と
無熱池一香山の
南大雪山の北に
ありといふ大池

隆準一鼻の高き
こと
つなぬき一つら
ぬき

ワキ詞「猶々江の島に於てめでたき子細さまざま有るべし、残さず申し候へ。クリ地謡「そも
そも江の島と云つば、そのめぐれる事三十餘町、その高き事數十餘丈なり。シテ、サシ謡水
は山の影を含み、山は水の心に任せたり。地謡「堰中の砂清淺たり、白雲の破るゝ所に、洞
門開けて翠屏現れたり。岩窟の奥遙かに入つて、峨々たる巖の間より、落ち来る水は
西天の、無熱池の池水なるとかや。シテ謡「禪定無漏の仙人は、地謡「この地を占めて栖とし、
彌陀有縁の教主は、この島に來つて生を導く。シテ謡「二世安樂の此島に、地謡「誰か頼みを
かけざるべき。ツセこととに又、いにしへ武藏相摸の境に、鎌倉海月の間に、深澤といふ湖
あり、彼の湖に大蛇住めり。其身一つにして其頭五つあり、隆準の鼻胡髯の腮、眼に
白日をつなぬき、身に黒雲をまつへり。然れば神武天皇より、垂仁天皇の御宇までは、
十一代の帝祚を経、七百餘歳の年祀を経て、國中に満ちて人を取る。シテ謡「景行天皇の御
宇に至り、地謡「龍悪いよく盛なれば、人皆石窟に隠れ住み、涕哭の聲限なし。時に天部
は龍に向ひ、汝が悪心を翻し、殺生をとどめ、この國の守護神とならば、夫婦の語ら

岐伯一黃帝の代
の名醫
張儀一秦の辯士
下和一楚の人玉
を鑑定する名人
初め疑はれて罪
せらる

ひを我なすべしと、堅く誓約し給へば、龍王も是に應じつと、今より殺害をとどめて、
善心を思ひ龍の口の、明神となり給ひ、國土を守護し給ふなり。
ロンギ地謡「はや時移る夕雲の、はや時移る夕雲の、斯かる神祕も大方の、浦人いかで木綿
四手の、神の告かや有難や。シテ謡「中々なれや大君の、御言畏み勅に今ぞ、應ずるしるし
を顯さん。夜すがらことに待ち給へ。地謡「勅に應ぜんしるしとは、そも老人は誰やらん。
シテ謡「誰とはさても愚なり。我は五頭龍、地謡「今は又、天部の夫婦の神となりし、龍の口
の明神とは、老人を見るべし。今宵の月に天部の御姿、我が姿をも現すべしと、夕波に
立ち紛れつと、失せ給ふこそあらたなれ、失せ給ふこそあらたなれ。(中入)
ワキ謡「岐伯が絶技を先に揚げ、張儀が英聲を後に馳す。是れ聰明勇進辨財天の、地謡「無量
無邊不可思議の功德を、さまざま顯しおはします。天女謡「月も照り添ふ如意の寶珠の、光
を誰か仰がざる。地謡「仰けなほ、仰けなほ、意の如しと聞く時は、天女謡「今この君の、それ
と御影に逢ひに逢ふ、地謡「下和が玉も何ならず、彼の如意寶珠を君に捧げんと、光もかよ

やく御殿の扉、左右に開けて十五童子、天部の御姿現れたり。地謡衆生濟度のその御方便衆生濟度のその御方便も、まづ福壽圓滿の願を叶へ、現壽無比樂後生清淨土、曇らぬ寶珠を君に捧げんと、勅使は是を授け給ひ、舞樂を奏し拍子を揃へ、羽袖を返して舞ひ給ふ。(樂)地謡「天人聖衆菩薩の舞も、天人聖衆菩薩の舞も、かくやと思ひ白波の、立ち來る沖の雲暗がつて、疾風吹き立て逆巻く潮は、五頭龍王の出現かや。

因位の形一原のまゝの姿

劫一極めて長き時をいふ

後シテ謠「我昔は深澤の池に住んで、五頭龍王と顯れ、今は國土の守護神となる、龍の口の明神なり。地謡「聞きしにかはらぬ因位の形、聞きしにかはらぬ因位の形、シテ謠「頭は五頭龍、地謡「胡髯の腮、眼に白日をつなぬき、その身に黒雲をまつへり。苔むす松も野べ伏す巖の、峨々たる上にぞ現れたる。(舞)シテ謠「神佛水波の隔なり。地謡「神佛水波の隔なれば、同一體の、利益もさまざまの辨財天部は威光を現し、明神もろともに百千劫の、齡を守らんと約諾堅き、岩間を傳ひ、涼み取るてふ緑の海に、飛行し給へば、磯うつ波も龍の口の、明神忽ち威を振ひ雲を吹き、嵐にかよやく眼の光は、天地に滿ち滿てり。

其時天部は童子を伴ひ、紫雲の上に顯れ給へば、明神立ち來る黒雲に乗じ、光を放つて島根を廻り、めぐりめぐるや暫しが程は、とりぐ姿を雲中に現し、とりぐ姿を雲中に現すも、實に有難き影向かな。

代主

梗 葛城の明神は事代主神を祭るといふ。大己貴命の御子なり。賀茂明神と御一體なればとて、賀茂の神職葛城へ参詣し、明神の示現にあづかる事を作る。(脇能)

シテ 事代主神(前は老翁) ツレ 男
ワキ 賀茂神職

關の戸さよて秋津洲や、關の戸さよて秋津洲や、道ある御代ぞめでたき。
三人次第謠「是は都賀茂の明神に仕へ申す神職の者なり。又和州葛城の明神は、當社御一體の御事なれども、いまだ参詣申さず候程に、只今和州葛城の明神に参詣仕り候。三人道行謠」四方の國、治まる雲の果までも、治まる雲の果までも、君の御影は明らけき、天つ日影の山の端に、斯かる時代は曇なき、峯も其方か葛城の、賀茂の宮居に著きにけり。賀茂の宮居に著きにけり。

關の戸さよて
世の治まれるこ
と

賀茂の御生一葵
祭の日

塵に交はる云々
一和光同塵のこ
と

シテツレ一雙謠「葛城の、賀茂の神垣時を得て、咲く卯の花の白和幣、ツレ謠「鳴らさぬ枝も夏木立、ツレ、謠「茂り收めて風もなし。シテ、サシ謠「是は當國葛城や、賀茂の社中を清め申す者なり。ツレ、謠「有難や頃は卯月の始とて、賀茂の御生の時既に、夏も來にけり小忌衣の、袖白妙の木綿疊、幣とりぐの神祭、御代を守りの道すぐに、萬歳の末を祈るなり。下歌いざいざ庭を清めん、いざぐ庭を清めん。上歌もとよりも、塵に交はる神心、塵に交はる神心、和光の影はいやましに、榮え行くなり國々も、豊に照らす日の本や、千里萬里も治まれる、誓の海は有難や。誓の海は有難や。

ワキ詞「如何に是なる老人、是は當社始めて参詣の者なり。このあたりは皆故有る名所なるべし。詠めの名所を教へ候へ。シテ詞「さん候、此葛城の賀茂の宮居、都の賀茂と御一體の御事なれば、都の人こそ知ろし召さるべけれ。其上龍田初瀬の紅葉をば、見ねども歌人の知し召すなれば、我等が申すに及ばず。謠「只君萬歳の御守と、當社に祈り申すならでは、また他事も候はず、あらめでたの御神拜やな。ワキ詞「實にく翁の申す如く、我等本

糺下賀茂

七つの道一東海
東山北陸山陰山
陽南海西海

君は舟云々一荷
子王制篇の語

雨つちくれを動
かさず一雨論
比太平之時雨不
破塊

社賀茂の社頭にありながら、當社の事を尋ぬるは、今更なるべき事ならずや。シテ詞「恐れながら此御尋ねこそ、少し不審に候へとよ。賀茂の本社と申さん事、忝くも開闢以來の影向の始め、まづ葛城の賀茂なれば、この宮居こそ取り分きて、賀茂の本社と申すべけれ。ワキ謡「實にくは是は理なり。まづく最初の影向は、この葛城の賀茂の神。シテ謡「其後天下平安城に、現れ給ふ賀茂の神山。ワキ謡「その神の名を糺の竹の、シテ謡「御代も治まり七つの道も、ワキ謡「猶末すぐに、シテ謡「曇なき、上歌地謡「よそまでも、名は葛城の賀茂の神、名は葛城の賀茂の神、御代を守の御威光、普ねしや、普ねしや、四海の波も治まりて、國富民民も豊なる、御影ぞ貴かりける。御影ぞ貴かりける。

クリ地謡「それ君は舟臣は水、水よく船を浮めつよ、臣よく君を仰ぐとかや。シテ、サシ謡「然れば王城の鎮守として、誠に以て御名高き、地謡「其水上は山陰の、賀茂の御手洗いさぎよき、流れの末は久方の、雨つちくれを動かさず、安く樂しむ時とかや。シテ謡「有難しとも中々に、地謡「言葉を以ても述べ難し。クセ然るに葛城や高間の山と申すは、金剛の峯と

胎金兩部一胎藏
界と金剛界と

長階の出御一十
月下の酉の日に
賀茂臨時祭あり
勅使辨人の還立
を主上出御まし
まして歡覽あり
公卿は長階に何
候す
とりくく一酉を
言掛く
しもとゆふ一葛
城の枕詞

翁さび云々一伊
勢物語の歌詞を
引く

して、胎金兩部の、その一法を現し、神も影向なるとかや。西天佛在世よりは、東北の靈峯、是れ大和の金剛山、三國不二の峯として、御代の寶の、山とも是を名づけたり。そもそも葛城の、賀茂の神垣隔てなく、王城の鎮守と現れ、百王守護の神山や、賀茂の祭とて、忝くも大君の、清涼殿や長階の、出御も絶えぬ年々に、卯月のその日の、とりどりの御遊なるとかや。シテ謡「千早振る、賀茂のみあれや夏引の、地謡「糸毛の花車めぐる日の、今日に葵の二葉より、我しめゆひし姫小松の、千代をかけて水鳥の、鴨の羽色やしもと結ぶ、葛城も同じ神山の、一體分身の、御代を守り給ふなり。この御代を守り給ふなり。

ロンギ地謡「實に葛城の神の代の、實に葛城の神の代の、その道すぐに夕霜の、翁はさても誰やらん。シテ謡「誰ともいはん翁さび、人などがめそ我こそは、事代主の翁とて、御代を守り申すなり。地謡「そもや事代主と聞く、その名は如何に。シテ謡「音高し、地謡「事代主と申すこそ、葛城の神の名なれ。いざや神體を現し、旅宿をあがめ申さんとて、葛城や高

間山の、嶺の雲に翔りて、天の戸に入らせ給ひけり、天の戸に入らせ給ひけり。(中入)
 三人上歌謠「心も共に澄む月の、心も共に澄む月の、光さやけき夜神樂の、御聲も同じ松の
 風、更け行く空ぞ靜なる。更け行く空ぞ靜なる。

後シテ謠「あら有難の折からやな。我劫初よりこの山に住んで、王城を守り御代を崇め、

天下泰平の寶の山、葛城の神と現れて、只今こゝに來りたり。あら面白の夜遊やな。

標結ふ云々古
今集の歌

地謠「標結ふ、葛城山に降る雪は、シテ謠「間なく時なく思ほゆるかな。地謠「それは三冬の深

雪の空、シテ謠「是は卯月の卯の花の、地謠「雪を廻らす舞の袖、古き大和舞、拍子を揃へて

面白や。(神舞) ロンギ地謠「あら有難や有難や。天下泰平樂とは、如何なる舞の事やらん。

シテ謠「怨敵の難を遁れて、上下萬民舞ひ遊ぶ。地謠「扱萬秋樂と申すは、シテ謠「兜率天の樂

にて、見佛菩薩舞ひ給ふ。地謠「春立つ空の舞には、シテ謠「春鶯囀を舞ふべし。地謠「秋來る

空の舞には、シテ謠「秋風樂を舞ふとかや。地謠「舞に颯々といふ聲は、樂々と響くなり。い

つも其聲盡きせぬは、此砌なるべしやな。萬歳の四方の國、道ある御代ぞめでたき。道

ある御代ぞめでたき。

九世戸

梗 九世の戸の文殊菩薩靈驗あらたなりとて、會式の砌、朝臣參向あり、龍神天女の奇特に逢ふ由を作る。蓋し文殊の縁起に由りて脚色せるなり。(脇能)

シテ 龍神(前は漁夫) ツレ 男(後ツレ天女) ワキ 臣下

當今一今帝
三人次第謡「風も涼しき旅衣、風も涼しき旅衣、朝立つ道ぞ遙けき。ワキ詞「そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても丹後の國九世の戸は神代の古跡にて、かたじけなくも天竺五臺山の文殊を勸請の地なり。殊に林鐘半彼の會式にて御座候程に、只今參詣仕り候。三人道行謡「丹波路の、末遙々と思ひ立つ、末遙々と思ひ立つ、旅の衣の日も幾日、幾野の道の程遠き、まだふみも見ぬ橋立や、早九世の戸に著きにけり。早九世の戸に著にけり。ワキ詞「日を重ねて急ぎ候程に、是は早九世の戸に著きて候。都にて承り及びて

林鐘一六月

まだふみも見ぬ
一小式部内侍の
歌を引く

天神七代一國常
立尊國狹穂尊豐

候よりも、天の橋立はるくと、誠に妙なる眺めにて候。猶々心靜に詠めばやと存じ候。ツレ謡「浦風も、涼しさ添へて追風とや、波路遙に出づるなり。ツレ謡「海士の見る目も勇みある、ツレ謡「眺め妙なる氣色かな。シテ、サン謡「所から曇らぬ空も與謝の海の、天の橋立遙々と、ツレ謡「陰踏む道に行きかふ人も、今日の祭の時をへて、夏水無月の半行く、舟の渡りの隙もなき、貴賤群集ぞ有難き。下歌「世渡る業は惜しめども、いざや歩みを運ばん。上歌「神の代の昔語を思出の、昔語を思出の、月日曇らぬ天つ神、地神二代を數へ來て、こよ九世の戸の名も高き、大聖文殊を勸請の、御影あらたに捧ぐなる、法の燈曇なく、照す誓は頼もしや。照す誓は頼もしや。

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ねべき事の候、シテ謡「此方の事にて候か何事を御尋ね候ぞ。ワキ詞「是は都より始めて參詣の者なり。まづこの所を九世の戸と名づけ初めにし其謂れを、委しく語り給ふべし。シテ謡「我等賤しき漁人なれば、いかでか語り申すべき。さりながら、まづ九世の戸と名づけし事、かたじけなくも天神七代地神二代の御神、此國に天降

野尊泥土煮沙
土煮尊大戸道大
口間邊尊面足惶
根尊伊味諾伊味
册尊
地神二代天照
大神忍穗耳尊
獅子の渡り一獅
子は文殊の乗物
なれば云ふ

きこう一地久の
訛かといふ
三世覺母一過去
現在未來の三世

り、こよにて天竺五臺山の、文殊を勸請し給へば、天の七代地の二代を、是れ九世の戸と名づけしなり。ツレ謡「されば菩薩の像體も、是れ帝釋の御作とかや。シテ謡「その後龍宮に入り給ひ、法を弘めて程もなく、又この島に上り給ふ。ツレ謡「即ち獅子の渡とて、今に絶えせぬ跡留めて、シテ謡「龍神御燈を捧ぐれば、ツレ謡「天より天人天降り。ツレ謡「天の燈火龍神の御燈、この松が枝に光を竝べ、渴仰の時節今宵なり、有難かりける時節なり。ツレ謡「さては神代の昔より、今に絶えせぬこの松に、捧ぐる御燈を目のあたり、拜まん事ぞ有難き。シテ謡「なかくの事御覽ぜよ、出でくる月も曇なき。上歌地謡「天の橋立光添ふ。天の橋立光添ふ、都の人も浦人も、語れば思ふ事なくて、四方の眺も面白や。松風も音しけく、立ちくる波も白妙の、月澄み昇る氣色かな。ツレ謡「月澄み昇る氣色かな。ツレ謡「それ地神二代の御神はじめて、こよに天降り、末世の衆生濟度のために、靈像を勸請し給へり。シテ、サシ謡「されば此地開闢の昔、地謡「早神國と荒金の、きょうの祭品々の、衆生濟度の方、生死の相を助けんとて、シテ謡「三世覺母の大聖文殊を、地謡「この島

に互りて悟の母
となる意

有頂一天のこと

に安置し給ひけり。ツレ謡「この橋立を作らんと、約諾ありしその頃は、神の代いまだ遠からず、雲霧虚空に満ちて、常闇の如くなりしかば、各、神火を燈して、日夜に土を運びて、同じく松を植ゑ給ふ、その燈火のあまりを、かしこに置かせ給ひしより、火置の島とて、是も故ある神所なり。シテ謡「かくて神々集りて、地謡「天竺五臺山の文殊を勸請し給へば、上は有頂の雲を分け、下は下界の龍神、音楽さまざまの花降り、御燈を捧げ奉る、その影向の有様、語るも愚なりけり。ロンギ地謡「實に有難き神の代の、實に有難き神の代の、昔語も今の世に、残る燈火曇なき、御影を松の木陰かな。シテ謡「短夜の、空も更け行く浦風の、音を静めて待ち給へ、必ず御燈顯れん。地謡「不思議やさてもかくばかり、委しく語る浦人の、其名をのり給へや。シテ謡「今は何をか包むべき、我は知らずやこの寺の、地謡「大聖文殊の御前なる、さいしやう老人は我なり。御身信心清淨の、心を感じ來りたりと、いひ捨てよその姿、松の木陰に失せにけり。松の木陰に失せにけり。(中入)

日月燈明佛一日
月の光を燈明と
して捧ぐる佛

天女謡「久方の、雲井に渡る橋立は、天つ御空の御階かな。地謡「月も更け行く天の原、月も更け行く天の原、紫雲棚引き異香薫じ、天つ少女の雲の羽袖、光も妙なる御燈を捧げ、松の梢に天降り、天降る。かよりければ龍宮より、捧ぐる御燈の光、海上に浮んで見えたるよそほひ、あらたなりける出現かな。
後シテ謡「本光普き燈火の、龍宮の内裏を照らすなり。地謡「そらには日月燈明佛、空には日月燈明佛、シテ謡「又下界には龍神の燈火、地謡「潮にゆられ浮き沈めども、光はいとどかかやき明りて、天地の兩燈一つになりあひ、九世の戸の明方明々たり。(舞)シテ謡「本より龍神は飛行自在に、地謡「本より龍神は飛行自在に、通力遍滿の奇特を見せんと、平地に波瀾を起しつと、海山虚空に飛び翔つて、嵐を蹴立て雨を起して、吹き曇りく震動すれども、御燈の光は明かに、なほ澄み昇るや天つ少女の、姿も雲居に入らせ給へば、又龍神は波を蹴立て、逆巻く潮の廻ると共に、逆巻く潮の廻ると共に、引かれて波にぞ入りにける。

逆矛

逆矛

梗概

朝臣、逆矛を納めたる龍田社へ參詣したるに、瀧祭の神現れ給ひて、當社の縁起を語り、矛の徳を示されし事を作る。上卷龍田と合せ見るべし。(脇能)

シテ 瀧祭の祭(前は老翁) ツレ 男(後ツレ天女)
ワキ 臣下

大和にも織る唐錦、即ち大和錦に大和國の意を含めそれを裁つといひかけて龍田の序詞とす
井手の下紐、末かけての序詞、これ井手の下帯ともいひて男女の一度別れて再會するを云ふ大和物語の故事

ワキ 次第謡「大和にも織る唐錦、大和にも織る唐錦、龍田の神に參らん。ワキ詞「そもく、是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州龍田の明神は、靈神にて御座候程に、此度君に御暇を申し、只今龍田に參詣仕り候。三人道行謡「國々の、末は七つの都路を、末は七つの都路を、夜深く出でて淀舟や、立つ旅衣、遙々と、猶雲遠き山城の、井手の下紐末かけし、跡も昔に奈良坂や、龍田の山に著きにけり。龍田の山に著きにけり。
シテ、ツレ一聲謡「龍田川、錦織り掛く神無月、色づく秋の梢かな。ツレ謡「紅葉の色も時めきて、

神南備の一拾遺集の歌未句水の濁れる

瀧祭一龍田明神は伊勢の瀧祭の神と同體なりと云ふ

寶山一龍田山のこと

寶の御矛一諸冊二神の國土を經營し給ひし天環矛の事

ツレ、錦を張れる氣色かな。シテ、サシ鱒是は當社龍田の里に、住みて久しき者なるが、ツレ、鱒農職ながら昔より、神前に仕へ奉り、名におふ龍田の神垣や、宮路を通ひいつとなく、頼む願も浅からず、恵を千代と祈るなり。下歌頃は長月廿日あまり、紅葉も徒に、只闇の夜の錦なり。上歌神南備の、御室の岸や崩るらん、御室の岸や崩るらん、龍田の川の水の色に、濁るとも隔てじな、塵に交はる神慮、直に御陰ももみち葉の、こよは常磐の色はえて、誓も絶えぬ瀧祭、いたどく神の手向かな、いたどく神の手向かな。

ワキ詞「如何に是なる火の光について尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「是は此所始めて一見の者なり。寶山への道しるべして給はり候へ。シテ詞「やすき間の御事、是こそ夜祭に參る者にて候へ。御道しるべ申し候べし。此方へ御出で候へ。シテ詞「あら嬉ややがて參らうするにて候。シテ詞「なうく是こそ寶山にて候へ。ワキ詞「承り及びたるより神さび殊勝にこそ候へ。又日本第一の寶の御矛を納めしは、この御山の事にて候か。シテ詞「なかくの事此所の御事にて候。ワキ詞「さらばこの山の謂れを御物語り

候へ。シテ詞「委しく語つて聞かせ申し候べし。

クリ地謠「そもく瀧祭の御神とは、即ち當社の御事なり。昔天祖の詔、未あきらかなる御國とかや。シテ、サシ鱒「こよに第七代に當つて現れ給ふを、伊弉諾伊弉册と號す。地謠「時に國常立伊弉諾に託して宣はく、豐蘆原千百五種の國あり。汝よく知るべしとて、即ち天の御矛を授け給ふ。クセ伊弉諾伊弉册は、天祖の御教、直なる道をあらためんと、天の浮橋に、二神たよすみ給ひて、此御矛を海中に、さし下し給ひしより、御矛を改めて、天の逆矛と名づけそめ、國富み民を治め得て、二神の始より、今の代までの寶なり。其後國土治りて、御世平かになりしかば、瀧祭の明神、此御矛を預りて、所も普ねしや、この御山に納めて、寶の山と號すなり。シテ、鱒「そもく御矛の主たりし、地謠「名も潔き瀧祭の、神の社は何くぞと、問へば名を得し龍田山、紅葉の八葉も、即ち銚の刃先より、照らす日影や紅の、光さし下す矛の露、天地すなほなる事も、こよこそ寶身は知らず國の寶の山高み、よくく禮し給へや。

紅葉の八葉一八つに尖りたるをいふ

榊葉一神樂歌

ロンギ地謠實にや龍田の神の名の、實にや龍田の神の名の、寶の御矛同じくは、所を分きて見せ給へ。シテ謠「むつかしの旅人や、影恥しき龍田山の、紅葉衣の千早振、神の祭早めんと、地謠「颯々の鈴の聲、ていとうと打つ波の、鼓も同じ瀧祭の、神は我なりと、木綿四手を靡かし、榊葉をうたひ夜に入りて、月の夜聲もすみやかに、入ると見えて失せにけり、分け入ると見えて失せけり。(中人)

古鳥蘇一樂の名

ウキ上歌謠「御山の、柞の紅葉かたしきて、柞の紅葉かたしきて、こよに假寝の枕より、音樂聞え花降りて、異香薫する不思議さよ、異香薫する不思議さよ。地謠「樂に引かれて、古鳥蘇の、舞の袖こそゆるぐなれ。(天女舞)後シテ謠「そもく是は、天の御矛を守護し奉る、瀧祭の神、和光に出でて龍田の神、地謠「あるひは天つ御空の御矛、シテ謠「又は寶山俱利迦羅御嶽、地謠「戴きまつれや、シテ謠「驚かし奉れや瀧祭。地謠「柏手響く山の雲霧、晴れ行く日の光の如くに、天の御矛は顯れたり。

龍田御神に假託
大日覺王如來

シテ謠「そもく大日本國といつば神國たり。神は本覺真如の都を出でて、和光同塵の御

大日覺王如來
龍田御神に假託

形 尤も佛法流布の國たるべしやな、有難や。地謠「南無や歸命頂禮、大日覺王如來、シテ謠「昔伊弉諾伊弉册の尊、この御矛を携へて、天の浮橋を踏み渡り給ひ、地謠「即ち御矛をさし下し、即ち御矛をさし下し給ひ、青海原を、かき分けく探り給へば、矛のしただり凝り固まつて國となれり。シテ謠「まづ淡路島、地謠「紀の國伊勢志摩筑紫四國、總じて八つの國となつて、大八洲の國と名付け、天地人の三才となる事も、その矛の徳なりあら有難や、(舞)シテ謠「扱國々は荒島なれば、地謠「扱國々は荒島なれば、さながら嶮しき蘆原なりしを、矛の手風、はやととなつて、蘆原をなぎ拂ひ、引き捨て置けば山となりぬ。足引の山といひ、土はさながら石かねなりしを、矛の刃先にあたり碎けば、平かなるをあらがねの土といひ、其外東西南北十方を治め、悪魔を退け豊蘆原の、國治りて、御矛を守りの俱利迦羅明王、この寶山に納め奉り、毎日めぐるや日の本の、寶の山に龍田の神は、寶の山に龍田の神は、御矛を守りの神體なり。

足引の山枕
詞 ちがねの土

外二

西王母

梗 西王母といふ仙女天降りて、三千年に一たび實るといふ桃實を國王に捧げ奉る事を作る。御代をことほぐ意を寓したるめでたき曲なり。出典は漢武内傳(脇能)

シテ 西王母(前は女) ツレ 侍女
ワキ 王 ワキツレ 大臣二人

三皇五帝一諸説異同あり鄭樵の通志には太昊伏羲氏炎帝神農氏黃帝軒轅氏を三皇となし帝少昊帝顓頊帝嚳帝堯帝舜を五帝となす
北辰の拱する

(狂言口開り)ワキ、サシ謡有難や三皇五帝の昔より、今この御代に至るまで、かよる聖主のためしはなし。地謡、その御威光は日の如く、ワキツレ謡、その御心は海の如くに、地謡、豊に廣き御恵、ワキ謡、天に輝き地に満ちて、地謡、北辰の拱する数々の、北辰の拱する数々の、満天に廻る星の如く、百官卿相雲客や、千戸萬戸の旗を靡かし、鉾を横たへ、四方の門邊

論語に北辰居其所衆星共之
喜見城一帝釋天の居所
桃李言はず一史記李廣傳の贊の語

靈山會場一釋迦如來の説法せし所但下自ら蹊をなす

にむらがりて、市をなし、金銀珠玉光を交へ、光明赫奕として、日夜の勝負見えざりけり。かよるためしは喜見城、その樂みも如何ならん。その樂みも如何ならん。シテ、一聲謡、桃李もの言はず、下おのづから市をなし、貴賤交はり隙もなし。シテ、サシ謡、面白や四季折々の時を得て、草木國土おのづから、ツレ謡、皆これ真如の花の色香、妙なる法の三つの心、潤ふ時や至りけん、三千年に咲く、花心の、をり知る春のかざしとかや。下歌、いざや君に捧げん。いざく君にさよけん。上歌、すべらぎの、その御心は普くて、その御心は普くて、隙行く駒の法の道、千里の外まで上もなき、道にいたりて明けき、靈山會場の法の場、廣き教の眞ある、君々たれば誰とても、勇みある世の心かな。勇みある世の心かな。

シテ謡、如何に奏聞申すべき事の候。ワキ謡、奏聞とは如何なるものぞ。シテ謡、是は三千年に花咲き實なる桃花なるが、今この御代に至り花咲く事、たゞこの君の御威徳なれば、仰ぎて捧げ参らせ候。ワキ謡、そも三千年に花咲くとは、如何さま是は聞き及びし、その西王母

三千年に拾遺集の歌末句ありにけるかな

の園の桃そのか、シテ謠なかくにそれとも今は物いはじ、ワキ謠さればこそそれぞ殊更名におふ花の、シテ謠桃李言はず、ワキ謠春いくばくの年月を、シテ謠送り迎へて、ワキ謠この春は、地謠三千年に、なるてふ桃の今年より、なるてふ桃の今年より。花咲く春に逢ふ事も、只これ君の四方の恵、あつき國土の千々の種、桃花の色ぞ妙なる。

花のみ一實に身を掛く

理王—仙人の名
迦陵頻伽—天上
極樂の島

ロンギ地謠さては不思議や久堅の、天つ少女の目のあたり、姿を見るぞ不思議なる。シテ謠疑ひの、心な置きそ露の間に、宿るか袖の月の影、雲の上までその恵、普き色にうつりきぬ。地謠うつろふ物は世の中の、人の心の花ならぬ、シテ謠身は天上の、地謠樂みに、明けぬ暮れぬと送り迎ふ、年は経れど限もなき、身の程も隔なく、眞は我こそ西王母の、分身よまづ歸りて、花のみをも顯はさんと、天にぞ上りける。天にぞ上り給ひける。(中入)上歌ワキ謠糸竹呂律の聲々に、糸竹呂律の聲々に、調をなして音樂の聲すみ渡る天つ風、雲の通路心せよ。雲の通路心せよ。地謠面白や、面白やかよる天仙理王の、來臨なれば數々の、孔雀鳳凰迦陵頻伽、飛び廻り聲々に、立ち舞ふや袖の羽風、天つ空の衣ならん。天

曲水の宴—三月
上巳の御遊

の衣なるらん。シテ謠いろくの捧物の、中に妙に見えたるは、西王母の其姿、光庭宇をかよやかし、黃錦の御衣を著し、シテ謠劍を腰に提げ、地謠劍を腰に提げ、眞纓の冠を著、玉觴に盛れる桃を、侍女が手より取りかはし、シテ謠君に捧ぐる桃實の、地謠花の盃取りあへず。(天女舞)花も酔へるや盃の、花も酔へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや、御溝の水に、戯れ戯ると手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥春風に和しつと、雲路に移れば、王母も伴ひ攀ち上る、王母も伴ひ攀ち上るや天路の、行方も知らずなりにける。

道明寺

梗 尊性といふ聖、善光寺に籠りて靈夢を受け、河内の道明寺に參詣す。白太夫神及び天女出現して、天滿宮の神徳を語り、舞樂を奏する事を作る。(脇能)

シテ 白太夫神(前は宮人) ツレ 天女(前は宮人)
ワキ 尊性 ワキツレ 從僧二人

善き光ぞと善光寺の名に因む
土師寺—道明寺の一名

ワキ、ワキ次第謠「善き光ぞと名を聞くや、善き光ぞと名を聞くや、佛の御寺なるらん。ワキ詞「かやうに候者は、相摸國田代と申す所に、尊性と申す者にて候。我善光寺の如來に一七日參籠申して候へば、あらたに御靈夢を蒙りて候程に、是より河内國土師寺へ參らばやと思ひ候。ツレ二人道行謠「捨てよ早、久かりつる世の中を、久かりつる世の中を、又思ひ立つ旅衣、昨日の山を跡に見て、猶行く方は白雲の、海も見えたる西の空、夕日隠れの霧間より、流れも是や河内なる、土師の里にも著きにけり。土師の里にも著きにけり。」

土師—紅葉の權と掛く

天滿神—管公の神號
宮寺—道明寺は十一面觀音を本尊として天滿宮を祀る故に宮を兼ねたる寺の意
十かへり—百年の十返り千年のこと

シテ、ツレ「壁謠」長月の、色も梢の秋を得て、照るや紅葉の土師の里、ツレ謠「猶晴れ残る音とてや、シテ、ツレ謠」松風ひとり時雨るらん。シテ、サシ謠「これに出たる老人は、この里名も土師寺の、佛神に仕へ申す者なり。シテ、ツレ謠」有難や利生はさまざま、多けれども、わきて誓も影高き、天滿神の宮寺に、歩みを運ぶ御值遇、實に身を知れば心なき、我等がためは頼もしや。下歌いざや歩を運ばん。いざや歩を運ばん。上歌神さぶる、松は十かへり千代の秋」松は十かへり千代の秋、霜を重ねて下草の、露の身ながらながらへて、神に仕へ奉る、宮路久しき瑞籬の、深き誓は有難や。深き誓は有難や。

ワキ詞「如何に是なる宮人に申すべきことの候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞」是は善光寺の如來の御夢想により、遙々當寺に參りて候。寺中の人に逢ひ申し、御夢想の様を語り申したく候。シテ詞「不思議なる事を承り候ものかな、まづ御夢想の様を此老人に御物語り候へ。某承つて寺中の人々へ廣め申し候べし。ワキ詞「あら嬉しや候。さらば委しく申し候べし、寺中の人々に御廣め候へ。シテ詞「心得申し候。ワキ詞」是は

香の衣—香染とて淡紅に黄色を帯びたる色の衣
七社—日吉山王の七社
五部の大乗經—華嚴大集般若法華涅槃の五部の經

相摸國田代と申す所に、尊性と申す聖にて候が、我念佛往生の志有るにより、此度信濃國善光寺へ参り、一七日參籠申す處に、如來御厨子の御戸を開き香の衣に香の袈裟かけ給ひたる老僧の、あらたなる御聲にて、汝念佛往生の志眞に懇なり、然らば五畿内河内の國土師寺は、天神の御在所なり、彼の所に神明を始め奉り、七社の神々を勸請申されたり、又天神は一切衆生現當二世のために、五部の大乗經を書き供養して埋まれたり、其軸より木櫛樹の木生ひ出でたり、其木の實を取り數珠とし、念佛百萬遍申さば、往生疑ひあるまじきと承つて夢覺めぬ、なんほう有難き御夢想候ぞ。シテ詞「かゝる有難き御事こそ候はね。やがて寺中の人々に觸れ申し候べし。まづ只今仰せられ候ふ木櫛樹を見せ申し候べし。此方へ御出で候へ。ワヤ詞「さらばやがて御供申し候べし。シテ詞「是に神明を始め奉り、七社の神々をいはひ申され候、又此方なるは天神にて御座候。あれに見えたるこそ、只今御物語り候木櫛樹にて候。よくく御拜み候へ。ワヤ詞「有難や神も佛も同一體とは申せども、天神同意の御結縁今始めて承り候。ツレ謠う

昔在靈山云々—南岳大師の語

後五—佛滅後五百年を五返りせる最後の五百年
西都—太宰府の意

君が住む—管公筑紫に下らるるをりの歌末句拾遺集にはかへりみしはや、大鏡にはかへりみし哉とあり

たての聖の仰やな。今に始めぬ天神の、彌陀一體の御值遇、天神と申すに其御本地、救世觀音にてましまさずや。ワヤ謠「實にくは是は理なり。昔在靈山名法華、シテ謠「今在西方名阿彌陀、ワヤ謠「娑婆示現觀世音、シテ謠「三世利益同一體。ワヤ謠「その外神や、シテ謠「佛とは、上歌地謠「只是れ水波の隔てにて、神佛一如なる寺の名の、道明らかに曇らぬ神の宮寺ぞ尊き。有難しく、實に神力も佛説も、同じ和光の影に來て、拜むぞ尊かりける、拜むぞ尊かりける。

クリ地謠「それ佛の昔神の今、後五の時代に至るまで、神も濁世に應じ給ひて、暫く西都に移り給ふ。シテ、サシ謠「如月下の五日にして、都を出でさ給ひせつよ、地謠「此土師の里に旅宿あつて、様々の御神物をとどめ、末代値遇の御結縁、今に絶ゆることなし。シテ謠「かくても留まらぬ道のべの、地謠「草葉の露もしをるよばかり。クセ君が住む、宿の梢を行くくも、隠るよまでに、かへり見ぞするとの御ながめ、さこそと知るぞかたじけなき。さてもいつしかに、ならはせ給はぬ旅の空、名におふ心筑紫とて、天さかる鄙の國に、住ま

あたりは云々
菅公宰府にての
詩に都府樓看
五色觀音寺唯
聽鐘聲
離家三四月落
涙百千行萬事皆
如夢時々期彼
蒼一菅公彼地
にての詠彼蒼を
期すとは運を天
に任する意

白太夫一天神の
攝社に祭る、も
とは菅公在世の
時睡しかりし伊
勢の神主度會春
彦の體

はせ給ひしかば、あたりは都府樓の瓦、觀音寺の鐘の聲、明暮に響く折々は、都の春秋
を、思召し出でぬ時はなし。シテ謡家をはなれて三四月、地謡落つる涙は百千行、萬事は
皆夢の如し、より、彼蒼を期すといふ、その御心の至りにや、昨日は北闕に悲しみを
被むる士たり、今日は西都に恥を清むる屍たりと、御神感あらたに、生きての恨み死し
ての悦び、普しや天満、陽感ぞめでたかりける。
ロンギ地謡「實に有難や草も木も、實に有難や草も木も、皆成佛の木の實まで、玉を連ぬる光
かな。シテ謡枯れたる木にだにも、誓の花は咲くぞかし。ましてや面前木樵樹、花咲き實
なる御覽ぜよ。地謡「實にや花咲き實なるなる、梢の色もあらたにて、シテ謡「法を稱ふる理
を、地謡「思の玉の、シテ謡「おのづから、地謡「あの梢の木の實こそ、この數珠の御法なれ、
必ず授け申さんとて、歸ると見れば立ち止りて、我は天神の御使、名をば誰とか白太夫
の、神と申す翁草の、霜曇りしてけりや。霜曇りに失せにけり。(中入)
地謡「久堅の、天の岩戸の神遊び、今思ひ出も面白や。(天女舞)地謡「舞樂の役々とりぐに、

毎一酒盃の如き
物にて拍子をう
つ樂器

韓神一神樂歌の
一ツ
笏拍子一笏を二
ツに割りたる物
拍子をうつつに用
ゐる

七徳一樂名

舞樂の役々とりぐに、琵琶琴和琴笛竹の、夜は更け行けども任の役者、などや遅きぞ
白太夫、急いで出でよと待ち給ふ。

後シテ謡「月もかよやく宮寺の、常の燈明々たり。天女謡「如何に白太夫の神、七社の御前
に韓神催馬樂、うたふや缶笏拍子の、役とは知らずや白太夫。シテ謡「仰せは重く候へど
も、既に名にだに白太夫が、星霜積る老が身の、謡役をば免し給ふべし。天女謡「いやとよ
その役定りたり、謡急いで役をなすべきなり。シテ謡「さては辭すとも叶ふまじ。謡さてそ
の役は、天女謡「韓神催馬樂、シテ謡「庭火の影や、天女謡「朱の玉垣、地謡「かよやけるその中に、
かよやけるその中に、白太夫が小忌の袖より、取るや笏拍子とうくと、打つも寄る
も老の波の、雪の白太夫が缶の、笏拍子は面白や。(樂)シテ謡「只今かなづる舞歌の曲、
地謡「只今かなづる舞歌の曲、七徳雙調七拍子、膝を屈して佛を敬ひ、さす腕には魔縁を
拂ひ、をさむる手には壽福を招き、千秋樂には民を養ひ、萬歲樂には命を延ぶる、法の
筵を敷妙の、枕は袂、上は尊き木樵樹の、梢に翔りて降るや一味の雨風を、そよぎて枝

百八煩惱の多
き數をいふ數珠
の玉の數を之に
象どる

枝より、木の實を振り落して、彼尊性に與へつゝ、これこそ思の玉を貫く、數は百八煩惱の、數は百八煩惱を、かたどる數珠の、道明寺の鐘、鼓に神樂の夢は覺めにけり。

經政

梗概

但馬守平經政は經盛の子也。琵琶の上手にて、仁和寺の守覺法親王より、青山といふ琵琶をたまはりて秘藏せしが、都落の時之を返上して、其身は討死せり。此曲は經政追善のため管絃講を催されしに、經政の靈現れ出づる事を作る。

(二番目)

シテ 平經政 ワキ 僧都行慶

仁和寺—仁和年中光孝天皇の建立し給ひし寺宇多法皇入り給ひしかば御室の名あり
童形—元服以前管絃講—音樂を催して法事を營むこと
役者—富屋琵琶等夫々の役

ワキ詞 是は仁和寺御室に仕へ申す、僧都行慶にて候。さても平家の一門但馬守經政は、いまだ童形の時より、君御寵愛なめならず候、然るに今度西海の合戦に討たれ給ひて候。又青山と申す御琵琶は、經政存生の時より預け下されて候、彼の御琵琶を佛前にする置き、管絃講にて弔ひ申せとの御事にて候ほどに、役者をあつめ候。サン誦實にや一樹の陰に宿り、一河の流れを汲む事も、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや多年の御値遇、恵を深くかけまくも、忝くも宮中にて、法事をなして夜もすがら、平の經政成等正覺と、

弔ひ給ふ有難さよ。地謡「ことに又、かの青山と云ふ琵琶を、かの青山と云ふ琵琶を、亡者のために手向けつよ、同じく糸竹の、聲も佛事をなし添へて、日々夜々の法の門、貴賤の道も普しや。貴賤の道も普しや。」

風吹枯木晴天
雨月照平砂夏
夜霜白樂天の
詩句朗詠集に見ゆ

シテサシ謡「風枯木を吹けば晴天の雨、月平沙を照らせば夏の夜の、霜の起居も安からで、假に見えつる草の陰、露の身ながら消え残る、妄執の縁こそつたなけれ。」

ワキ謡「不思議やな早深更になるまよに、夜の燈火かすかなる、光の内に人影の、有るか無きかに見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。シテ詞「我經政が幽靈なるが、御弔ひの有難さに、是まで現れ來りたり。ワキ謡「そも經政の幽靈と、答ふるかたを見んとすれば、又消えく」と形もなくして、シテ謡「聲は幽かに絶えのこつて、ワキ謡「まさしく見えつる人影の、シテ謡「有るかと思れば、ワキ謡「又見えもせで、シテ謡「有るか、ワキ謡「無きかに、シテ謡「かけろふの、地謡「幻の、常なき身として經政の、常なき身として經政の、もとの浮世に歸り來て、それとは名のれどもその主の、形は見えぬ妄執の、生をこそ隔つれども、我は人を見る

吳竹の云々一經
政仁和寺の宮に
御暇乞に詣りし
れしに答へて

「吳竹の笥の水
はかはれども向
住み飽かぬ宮の
内か」とよめ
面をさらす一名
を知らるること

ものを、實にや吳竹の、笥の水はかはるとも、住み飽かざりし宮の内、幻に参りたり。夢幻に参りたり。

ワキ詞「不思議やな經政の幽靈形は消え聲は残つて、猶も詞をかはしけるぞや。謡よし夢なりとも現なりとも、法事の功力成就して、亡者に言葉をかはす事よ。あら不思議の事やな。シテ詞「我若年の昔より宮の内に入り、世上に面をさらす事も、偏に君の御恩徳なり。謡中にも手向け下さると、青山の御琵琶、娑婆にての御許されを蒙り、常は手馴れし四つの緒に、下歌地謡「今も引かるよ心故、聞きしに似たる撓音の、是ぞ正しく、妙音の誓なるべし。上歌されば彼の經政は、されば彼の經政は、いまだ若年の昔より、外には仁義禮智信の、五常を守りつよ、内には又花鳥風月、詩歌管絃を専とし、春秋を松陰の、草の露水のあはれ世の、心に洩るよ花もなし。心に洩るよ花もなし。ワキ詞「亡者のためには何よりも、娑婆にて手馴れし青山の琵琶、おのく樂器を調へて、謡糸竹の手向をすむれば、シテ詞「亡者も立ちより燈火の影に、人には見えぬ者ながら、

心に洩るよ花
經政風懐に入ら
ぬ花もなし

大絃云々白氏文集琵琶行の語第一第二云々同集五絃彈の句一聲鳳管秋驚秦之雲一朗詠集の句

衣笠山一仁和寺の北にあり

手向の琵琶を調ふれば、ワヤ謠「時しも頃は夜半樂、眠を覺ますをりふしに、シテ詞不思議や晴れたる空かき曇り、俄に降りくる雨の音、ワヤ謠しきりに草木を拂ひよつ、時の調子も如何ならん。シテ詞いや雨にてはなかりけり。あれ御覽せよ雲の端の、地謠「月に雙の岡の松の、葉風は吹き落ちて、村雨の如くにおとづれたり。おもしろや折からなりけり、大絃は嘈々として村雨の如しさて、小絃は切々として、私語に異ならず。クセ第一第二の絃は、索々として秋の風、松を拂つて疎韻落つ。第三第四の絃は、冷々として夜の鶴の子を思うて籠の内に鳴く、鶏も心して、夜遊の別れとどめよ。シテ謠「一聲の鳳管は、地謠「秋秦嶺の雲を動かせば、鳳凰も是にめでて、梧竹に飛び下りて、翅を連ねて舞遊べば、律呂の聲々に、心聲に發す、聲あやをなす事も、昔を返す舞の袖、衣笠山も近かりき、おもしろの夜遊や、あらおもしろの夜遊や。あら名残惜しの夜遊やな。シテ詞「あら恨めしやたましく閻浮の夜遊に歸り、心をのぶるをりふしに、謠又曠恚の起る恨めしや。ワヤ謠「さきに見えつる人影の、なほ顯はるよは經政か。シテ詞「あら恥かしや我

背燭共憐深夜月一白樂天の詩句

紅波一血のこと

姿はや人々に見えけるぞや。謠あの燈火を消し給へとよ。地謠「燈火を背けては、燈火を背けては、共にあはれむ深夜の月をも、手に取るや帝釋修羅の、戦ひは火を散らして、曠恚の猛火は雨となつて、身にかよれば、拂ふ劔は他を惱まし、我と身を切る、紅波はかへつて猛火となれば、身を焼く苦患はづかしや、人には見えじものを、あの燈火を消さんとて、其身は愚人夏の蟲の、火を消さんと飛び入りて、嵐と共に燈火を吹き消して、暗まぎれより、魄靈は失せにけり。魄靈の影は失せにけり。

籠

梗 概

攝津の國生田の森に籠の梅とて名木あり。之は元暦元年
生田の森の戦に籠頼の軍なる梶原景季、その一枝を折りて
籠にさし、功名を得し名残なり。旅僧其跡を訪れ、夢の内に
景季の幽靈に逢ひて、軍物語を聴く事を作る。祝言能とし
て用ゐる。(二番目)

シテ 景季(前は男) ワキ 僧 ワキツレ 從僧

ワキ、ワキ次第論 春を心のしるべにて、春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ。ワキ詞「是は西國方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、此度都に上り洛陽一見と志し候。道行三人誦、旅心、筑紫の海の船出して、筑紫の海の船出して、八重の潮路を遙々と、分けし方の雲の波、煙も見えし松原の、里の名問へば須磨の浦、生田の川に著きにけり。生田の川に著きにけり。シテ次第論 來る年の矢の生田川、來る年の矢の生田川、流れて早き月日かな。飛花落

飛花落 葉云々

無常も亦悟り次第にて常住なりとの意
無非中道 悟るに非ず迷ふに非ざる人
夢の直路 直路は通路

籠の梅 生田神社の境内に之を傳ふ

葉の無常は又、常住不滅の榮をなし、一色一香の縁生は、無非中道の眼に應ず。人間個個、縁生の觀念、猶以て到り難し。あら定めなの身命やな。下歌人間有爲の轉變は、眼子の中に顯れて、閻浮に歸る妄執の、閻浮に歸る妄執の、其生死の海なれや、生田の川の幾世まで、夢の巷に迷ふらん。よしとても身の行くへ、定めありとても終には、夢の直路に歸らん。夢の直路に歸らん。

ワキ詞「如何に申すべき事の候。是なる梅は名木にて候か。シテ詞「さん候。是は籠の梅と申し候。ワキ詞「あら面白や籠の梅とは、いつの代よりの名木にて候ぞ。シテ詞「いや名木程の事は候はねども、只私に申しならばしたる異名にて候。ワキ詞「よし、私に名附たる異名なりとも、委く御物語候へ。シテ詞「そも、此生田の森は、平家十萬餘騎の追手なりしに、源氏の方に梶原平三景時、同じき源太景季、色ことなる梅花の有りしを、一枝折つて籠にさす。この花すなはち笠印となりて、氣色あらはに著く、功名人に勝れしかば、景季かへつてこの花を禮し、誦すなはち八幡の神木と敬せしより此方、名將の古跡の花なれ

ばとて、箴の梅とは申すなり。ワヤ謡「實にや名將の古跡と云ひ名木と云ひ、名残盡きせぬ年々に、シテ謡「降るは程なき春雨の、古きに歸る名を聞けば、ワヤ謡「その景季の盛りなりし、シテ謡「若木の花の白眞弓、ワヤ謡「箴の梅の、シテ謡「今までも、上歌地謡「名を留めし、主は花の景季の、主は花の景季の、末の世かけて生田川の、身を捨ててこそ、名は久けれ武士の、やたけ心の花に引く、弓筆の名こそ妙なれや。弓筆の名こそ妙なれ。

室山一源行家平家と戦ひし地
水島一源義仲平家と戦ひし地

とより一明石の門といふ語をか
く續く

クリ地謡「さるほどに平家は去年播磨の室山、備中の水島二箇度の合戦に打ち勝つて、山陽道南海道、あはせて十四箇國の兵、都合十萬餘騎、津の國一の谷にぞ籠りける。シテ、サン謡「東は生田の森、西は一の谷を限つてその間三里が程は、滿ちくたり。地謡「浦々には數千艘の船を浮め、陸には赤旗いくらも立てならべ、春風に靡き天に翻る有様、猛火雲を焼くかと思えたり。シテ謡「總じてこの城の前は海後は山、地謡「左は須磨右は明石の、とよりかくより行きかふ舟の、共音の千鳥も聲々なり。クセ「時しも如月、上旬の空の事なれば、須磨の若木の櫻も、まだ咲きかぬる薄雪の、さえかへる波こよも

生田のものづから一
生田の小野といふ語をもて續く
一華開天下春
大集經の語
魚鱗鶴翼一軍陣の法

天の鳥船一舟の古名

夕草の一夕月のとあるに從ふべきか
鶯宿梅一上巻東北を見よ

とに、生田のおのづから盛りを得て、かつ色見する梅が枝、一花開けては天下の春よと、軍の門出を祝ふ、心の花もさきがけぬ。さる程に身方の勢、六萬餘騎を二手に分けて、範頼義經の追手搦手の、海山かけて須磨の浦、四方を圍みて押し寄する。シテ謡「魚鱗鶴翼もかくばかり、地謡「後の山松にむれるるは、残りの雪の白妙に、ねぐらを立たん眞鶴の翼を連ぬるその氣色、雲にたぐへて夥し。浦には海人様々の、漁夫の船影數見えて、漁たく火もかけろふや、嵐も波も須磨の浦、野にも山にも漕ぎ寄する、兵船はさながら、天の鳥船もかくやらん。ロンギ地謡「はや夕ばえの梅の花、月になり行く假枕、一夜の宿を貸し給へ。シテ謡「我は宿りも白雪の、花の主と思召さば、下臥に待ち給へ。地謡「花の主と思へとは、御身如何なる人やらん。シテ謡「今は何をか包むべき、我は此世にじき影の、地謡「跡弔はれんと夕草の、シテ謡「その景季が幽霊なり。地謡「御身他生の縁ありて、一樹の陰の花の縁に、鶯宿梅の木の本に、宿らせ給へ我は又、世を鶯のねぐらは、この花よとて失せにけり。この花よ

うは玉の云々
古今集小町の歌
に「いとせめて
戀しき時はうは
玉の夜の衣を返
してぞ寝る」と
あるを要を見る
縁に引く
涿鹿一黃帝蚩尤
と戦ひし地

とてぞ失せにける。(中入)

ワキ上歌謡「うは玉の、夜の衣を返しつよ、夜の衣を返しつよ、更け行くまよに生田川、水音も澄む夜もすがら、花の木陰に臥しにけり。花の木陰に臥しにけり。

後シテ一覽謡「魂は陽に歸り魄は陰に残る。執心却來の修羅の妄執、去つて生田の名にしおへり。地謡「血は涿鹿の河となり、シテ謡「紅波楯を流しつよ、地謡「白刃骨を砕く苦しみ、月を

も日をも手に取る影かや、長夜のやみく〜と眼もくらみ、心も亂るゝ修羅道の苦しみ、御覽ぜよ。

ワキ謡「不思議やなそのさまいまだ若武者の、胡籙に梅花の枝をさし、さも華やかに見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。シテ謡「今は何をか包むべき、是は源太景季、他生の縁の一樹の陰に、夢中の對面向顔をなす、御身貴き人なれば、法味を得んと魄靈の、魂に移りて來りたり、跡弔ひ給へといはんとすれば、又暎恚の敵の責、あれ御覽ぜよ御聖。

ワキ謡「實にく〜見れば恐ろしや、劍は雨と降りかよつて、シテ謡「天地をかへす如くにて、

ワキ謡「山も震動、シテ謡「海も鳴り、ワキ謡「雷火も亂れ、シテ謡「惡風の、地謡「紅烟の旗を靡かし、紅烟の旗を靡かして、閻浮に歸る生田川の、波を立て水を返し、山里海川も、皆修羅道の巷となりぬ。こは如何にあさましや。

みやびたる一節
寵たる

大童さばけ髪
をかぶりたるこ
と

花は根に千載
集に「花は根に
鳥は古巢に歸る
也春のとまりを
知る人ぞなき」

シテ謡「暫く心を静めて見れば、地謡「心を静めて見れば、所は生田なりけり。時も昔の春の、梅の花盛りなり。一枝手折りて籠にさせば、もとよりみやびたる若武者に、相逢ふ若木の花鬘、懸くれば籠の花も源太も、我さきがけんさきがけんとの、心の花も梅も、散りかよつて面白や。敵の兵之を見て、あつばれ敵よ遁すなとて、八騎が中に取り籠めらるれば、シテ謡「胃も打ち落されて、地謡「大童の姿となつて、シテ謡「郎等三騎に後を合はせ、地謡「向ふ者をば、シテ謡「拜み打ち、地謡「又廻り合へば、シテ謡「車斬、地謡「蜘蛛手掛繩十文字、鶴翼飛行の秘術を盡すと見えつる内に、夢覺めて、しら〜と夜も明くれば、是までなりや旅人よ、暇申して花は根に、鳥は古巢に歸る夢の、鳥は古巢に歸るなり。よく用ひて給ひ給へ。

巴さもろ

梗概

木曾の山里より出でたる僧、江州粟津に到りて、木曾義仲の跡を弔ふに、巴御前の幽霊現れて、ありし世の軍物語をなす事を作る。(二番目)

シテ 巴(前は里女) ワキ 僧

麻裳よい一著るといふ意にて木曾の枕詞とす
鳩の海一琵琶湖のこと

ワキ次第謡「行けば深山も麻裳よい、行けば深山も麻裳よい、木曾路の旅に出でうよ。詞是は木曾の山家より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、此度思立ち都に上り候。道行謡旅衣、木曾の御坂を遙々と、木曾の御坂を遙々と、思立つ日も美濃尾張、定めぬ宿の暮毎に、夜を重ねつゝ日を添へて、行けば程なく近江路や、鳩の海とは是かとよ。鳩の海とは是かとよ。詞 急ぎ候程に、江州粟津の原とやらんに著きて候。この所に暫く休らはばやと思ひ候。

シテ、サシ謡「おもしろや、鳩の浦波静なる、粟津の原の松陰に、神を齋ふや政事、實に神感

行教和尚一清和の朝大安寺の僧

誓を示し一國家鑑護のため鑑座あること

も頼もしや。ワキ謡「不思議やな是なる女性の神に参り、涙を流し給ふ事、返すくも不審にこそ候へ。シテ謡「御僧は、自が事を仰せ候か。ワキ謡「さん候、神に参り涙を流し給ふ事を不審申して候。シテ謡「おろかと不審し給ふや。傳へ聞く行教和尚は、字佐八幡に詣で給ひ、一首の歌に曰く、謡「何事のおはしますとは知らねども、詞「忝さに涙こぼると、かやうに詠じ給ひしかば、神もあはれと思召されけん、御衣の袂に御影をうつし、それより都男山に誓を示し給ひ、謡「國土安全を守り給ふ。おろかと不審し給ふぞや。ワキ謡「やさしやな女性なれどもこの里の、都に近き住ひとて、名にし負ひたるやさしさよ。シテ謡「さてく御僧の住みたまふ、在所は何處の國やらん。ワキ謡「是は信濃國木曾の山家の者にて候。シテ謡「木曾の山家の人ならば、粟津が原の神の御名を、問はずは如何で知り給ふべき。是こそ御身の住み給ふ、木曾義仲の御在所、同じく神と齋はれ給ふ、拜み給へや旅人よ。ワキ謡「不思議やさては義仲の、神と現れこの所に、いまし給ふは有難さよと、神前に向ひ手を合はせ、地謡「古の、是こそ君よ名は今も、是こそ君よ名は今も、

はつか草の葉
といふより續く
はのかの意

直道一人間は非
常の草木と異な
りて直接に經文
を讀き得るを以
て云ふ

有明月の義仲の、佛と現じ神となり、世を守り給へる、誓ぞ有難かりける。旅人も一樹の陰、他生の縁と思召し、この松が根に旅居し、夜もすがら經を讀誦して、五衰を慰め給ふべし。有難き値遇かな。實に有難き値遇かな。さる程に、暮れて行く日も山の端に、入相の鐘の音の、浦わの波に響きつゝ、いづれも物すごきをりふしに、我も亡者の來りたり。其名をいづれとも知らずはこの里人に、問はせ給へと夕暮の、草のはつかに入りけり。草のはつかに入りけり。(中入)
ワヤ上歌謡 露を片敷く草枕、露を片敷く草枕、日も暮れ夜にもなりしかば、粟津が原の哀れ世の、なき影いざや弔はん。なき影いざや弔はん。後シテ一壁謡 落花空しきを知る、流水心無うしておのづから、澄める心はたらちねの、地謡 罪も報いも因果の苦しみ、今は浮まん御法の功力に、草木國土も成佛なれば、況んや生ある直道の弔ひ、彼はいづれも頼もしや。頼もしやあら有難や。
ワヤ謡 不思議やな粟津が原の草枕を、見れば有りつる女性なるが、甲冑を帶する不思議

粟津の汀一粟に
泡を掛く

信濃を出て一治
承四年のこと
礪波山一加賀越
前の境
俱利伽羅一同山
の南の谷
志保一加賀能登
の境
猶し一なををし
と謠ふ名をしか
とも云ふ
運槻弓一盡を槻
に掛く
願縁一偶然なら
ぬ縁

さよ。シテ詞「なかくに巴と言ひし女武者、女とて御最期に、召しそせざりしその恨み、ワヤ謡 執心残つて今までも、シテ謡 君邊に仕へ申せども、ワヤ謡 恨みはなほも、シテ謡 荒磯海の、地謡 粟津の汀にて、波の討死末までも、御供申すべかりしを、女とて御最期に、捨てられ参らせし恨めしや。身は恩のため、命は義による理、誰か白眞弓取の身の、最期に臨んで、功名を惜まぬ者やある。クセさても義仲の、信濃を出でさせ給ひしは、五萬餘騎の御勢、鏝を竝べ攻め上る。礪波山や俱利伽羅、志保の合戦に於ても、分捕高名の其數、誰に面を越され、誰に劣る振舞の、なき世がたりに、猶し思ふ心かな。シテ謡 されども時刻の到来、地謡 運槻弓の引く方も、渚に寄する粟津野の、草の露霜と消え給ふ、所はこよぞ御僧達、同所の人なれば、願縁に訪はせたまへや。ロンギさてこの原の合戦にて、討たれ給ひし義仲の、最期を語りおはしませ。シテ謡 頃は正月の空なれば、地謡 雪はむら消えに残るを、たゞ通路と汀をさして、駒をしるべに落ち給ふが、薄氷の深田に駈け込み、弓手も馬手も燈は沈んで、下り立たん使りもなくて、手綱にすがつて鞭を打

乗替一副馬

てども、引く方も渚の濱なり、前後を忘れて控へたまへり。こは如何にあさましや。か
かりし處に、自ら駆けよせて見奉れば、重手は負ひ給ひぬ、乗替に召させ参らせ、この
松原に御供し、はや御自害候へ、巴もともと申せば、其時義仲の仰せには、汝は女なり、
忍ぶ便も有るべし、是なる守小袖を、木會に届けよこの旨を、背かば主従、三世の契り
絶えはて、永く不興とのたまへば、巴はともかくも、涙にむせぶばかりなり。

枕をたぐんで一
枕を並べて驚る
ること

地謡「かくて御前を立ち上り、見れば敵の大勢、あれは巴か女武者、餘すな漏らすなど、
敵手繁くかよれば、今は引くとも遁るまじ、いで一軍うれしやと、巴少しも騒がず、わ
ざと敵を近くなさんと、長刀を引きそばめ、少し恐るよけしきなれば、敵は得たりと切
つて懸かれば、長刀柄ながくおつ取りのべて、四方を拂ふ八方拂ひ、一所に當るを木の
葉返し、嵐も落つるや花の瀧波、枕をたぐんで戦ひければ、皆一方に切り立てられて、
跡も遙に見えざりけり。跡も遙に見えざりけり。

シテ謡「今は是までなりと、地謡「立歸り我君を、見奉れば痛はしや、はや御自害候ひて、

上帯一鏡の上に
結ぶ帯

此松が根に伏し給ひ、御枕のほどに御小袖、肌を守を置き給ふを、巴泣くく賜はりて、
死骸に御暇申しつと、行けども悲や行きやらぬ、君の名残を如何にせん、とは思もへど
くれぐれの、御遺言の悲さに、粟津の汀に立ち寄り、上帯切り、物具心靜に脱ぎ置き、
梨打烏帽子同じく、かしこに脱ぎ捨て、御小袖を引きかづき、其際までの佩添の小太刀
を、衣に引き隠し、所はこよぞ近江なる、信樂笠を木會の里に、涙と巴はただひとり、
落ち行きしうしろめたさの、執心を弔ひて給ひ給へ。執心を弔ひて給ひ給へ。

信樂笠一信樂と
いふ地の名産の
笠を着て世を忍
ぶ意

外三

嵐山

梗概

嵐山は吉野山の櫻を移したるなり。その春景色を見て参れとの仰せ畏みて、勅使参向あり。こゝに木守勝手神並びに一體分身の藏王権現の顯れ給ふ事を作る。以て神木の來歴を説き、御代を祝ふ意をよせたり。(脇能)

前シテ翁 ツレ 木守神 ツレ 勝手神 ワキ 勅使
後シテ 藏王権現

吉野の花の種と
りし一龜山天皇
の時吉野の櫻を
移植す
千本一一目千本
のこと
圓満十里一都の
こと

ワキ次第「吉野の花の種とりし、吉野の花の種とりし、嵐の山に急がん。ワキ詞「抑、是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州吉野の千本の櫻は、聞召し及ばれたる名花なれども、圓満十里の外なれば、花見の御幸かなひ給はず、さるにより千本の櫻を嵐山にうつしおかれて候間、この春の花を見て参れとの宣旨を蒙り、只今嵐山へと急ぎ候。道行「三人、都

花は雲かと一古
今集の序に春の
朝吉野山の櫻は
人丸が心には雲
かとのみなむ覺
えけるとあり

には、けにも嵐の山櫻、けにも嵐の山櫻、千本の種はそれぞとて、尋ねて今ぞ三吉野の、花は雲かと詠めける、その歌人の名残ぞと、よそ目になれば猶しもの、詠め妙なるけしきかな。詠め妙なるけしきかな。ワキ詞「急ぎ候程に、是ははや嵐山に著きて候。心靜に花を詠めうするにて候。

シテ、ツレ一聲謡「花守の、住むや嵐の山櫻、雲も上なき梢かな。ツレ謡「千本に咲ける種なれや、シテ、ツレ謡「春も久きけしきかな。シテ、サン謡「是はこの嵐山の花を守る、夫婦の者にて候なり。シテ、ツレ謡「夫れ圓満十里の外なれば、花見の御幸なきまよに、名におふ吉野の山櫻、千本の花の種とりて、この嵐山に植ゑ置かれ、後の世までの例とかや。是とても君の恵かな。下歌けに頼もしや御影山、治まる御代の春の空、上歌さも妙なれや九重の、さも妙なれや九重の、内外に通ふ花車、轆も西にめぐる日の、影ゆく雲の嵐山、戸無瀬に落つる白波も、散るかと思ゆる花の瀧、盛久き氣色かな。盛久き氣色かな。ワキ詞「不思議やな是なる老人を見れば、花に向ひ渴仰のけしき見えたり。御ことは如何な

戸無瀬一
大井川
の早瀬

外三 嵐山

木守も水神にて水分と書きてみくまりと稱へ後みこもりと亂り略してこもりといふに至れり
勝手木守と共に吉野に鎮坐せる神
さしもこそ新千載集の歌下句花の所といかてなりけん
笙の岩屋吉野山の奥
夏箕の川吉野川の上流

る人やらん。シテ詞「さん候 是は嵐山の花守にて候。又嵐山の千本の櫻は、皆神木にて候程に、花に向ひ湯仰申し候。ワキ詞「そも嵐山の千本の櫻の、神木たるべき謂れは如何にシテ詞「けに御不審は御道理。名におふ吉野の千本の櫻を、うつし置かれし其故に、謠人こそ知らね折々は、木守勝手の神ともに、この花に影向なるものを。ワキ詞「けにやさしもこそ厭ふ憂き名の嵐山、詞「取りわき花の名所とは、何とて定め置きけるぞ。シテ詞「それこそ猶も神慮なれ。名におふ花の奇特をも、顯はさんとの御恵、シテ、ツレ詞「けに頼もしや御影山、靡き治まる三吉野の、神風あらばおのづから、名こそ嵐の山なりとも、下歌地謠「花はよも散らじ、風にも勝手木守とて、夫婦の神は我ぞかし。音高や嵐山、人にな知らせ給ひそ。上歌笙の岩屋の松風は、笙の岩屋の松風は、實相の花ざかり、開くる法の聲たて、今は嵐の山櫻、夏箕の川の水清く、眞如の月の澄める世に、五濁の濁ありとも、流れは大井川、其水上はよも盡きじ。いざく花を守らうよ。いざく花を守らうよ。春の風は空に満ちて、春の風は空に満ちて、庭前の木を切るとも、神風にて吹きかへさば、妄

神遊—神樂のこと

青根が峯—吉野の内
小倉山—嵐山の北
龜山—小倉山の南

藏王權現—忿怒の相にて右手に獨鈷を持ち右足を揚ぐる

想の雲も晴れぬべし。千本の山櫻、長閑き嵐の山風は、吹くとも枝は鳴らさじ。此日もすでに呉竹の、夜の間を待たせ給ふべし。明日も三吉野の山櫻、立ちくる雲に打乗りて、夕陽残る西山や、南の方に行きにけり。南の方に行きにけり。
地謠「三吉野の、三吉野の、千本の花の種殖るて、嵐山あらたなる、神遊ぞめでたき。この神遊ぞめでたき。ツレ二人謠「色々の、地謠「色々の、花こそ交れ白雪の、子守勝手の、恵なれや松の色、ツレ二人謠「青根が峯ことに、地謠「青根が峯ことに、小倉山も見えたり。向ひは嵯峨の原、下は大井川の、岩根に波かよる、龜山も見えたり。萬代と、萬代と、囃せ囃せ神遊、千早ふる。(中ノ舞)地謠「神樂の鼓聲澄て、神樂の鼓聲澄みて、羅綾の袂を翻し、翻す舞樂の祕曲も度重なりて、感應肝に銘する折から、不思議や南の方より吹きくる風の、異香薫じて瑞雲たなびき、金色の光輝きわたるは、藏王權現の來現かや。
地謠「和光利物の御姿、和光利物の御姿、シテ謠「我本覺の都を出でて、分段同語の塵に交はり、地謠「金胎兩部の一足をひつさけ、シテ謠「惡業の衆生の苦患を助け、地謠「さて又虚空に

青蓮のまなじり
一開かざる蓮の
葉を目尻の形容
とす
金の峰—金峯山
こと

御手を上げては、シテ「誦」忽ち苦海の煩惱を拂ひ、地誦「惡魔降伏の青蓮のまなじりに、光明を放つて國土を照らし、衆生を守る誓を顯はし、子守勝手藏王權現、同體異名の姿を見せて、おのく嵐の山に攀ちのほり、花に戯れ梢に翔つて、さながらこよも金の峰の、光も輝く千本の櫻、光も輝く千本の櫻の、榮ゆく春こそ久けれ、

正尊

梗 概

土佐坊正尊、實は昌俊なるを謡曲に替へて作れるなり。頼朝の内命を受けて、義經を討ちに上京せしを、義經の方より夙に見抜かれ、その館に呼ばれて起誓をなす。されど遂に攻込みければ、辨慶昌俊と組打ちて之を捕ふる事を作る。
(四番目)

シテ 土佐坊正尊 ツレ 光景
ツレ 源義經 同 江田源三 同 熊井太郎
子方 靜 ワキ 辨慶

「ワキ詞」是は西塔の武藏坊辨慶にて候。扱も我君判官殿は、鎌倉殿より大名十人付け申されて候へども、内々御中不和になり給ふにより、心を合せて一人づつ皆くだりはて候。扱も去年の正月木曾義仲を追討せしより此方、度々平家を攻め落し、この春亡ほしはて候。一天を鎮め四海を澄ます勸賞行はるべき處に、渡邊にて梶原が逆鱗の意見を承

西塔—叡山三塔
の—
去年—元暦元年
此春—文治元年

上洛—上京

違例—不快

引し給はざりし遺恨により、我が君を讒奏申し、御兄弟の御中不和になり給ひて候。又鎌倉より土佐正尊と申す者、昨日都へ上りて候が、是は我が君を狙ひ申さんためと聞召され、急ぎ召連て参れとの御説にて候程に、只今土佐が旅宿へと急ぎ候。如何に案内申し候。判官殿より御使に武藏が参じて候。正尊はこの屋の内に御入り候か。シテ詞「武藏殿かやあら珍しや。まづ此方へ御入り候へ。ワキ詞「承り候。先以て御上りめでたう候。是は君よりの御使にて候。上洛のよし聞召し及ばれ、何とて御伺候は候はぬぞ、鎌倉殿の御意も聞召されたく候間、急いで御参りあれとの御事にて候。シテ詞「さん候。宿願の子細候ひて、熊野参詣のためにふと罷り上りて候。昨日京著仕り候へども、路次より違例仕り散々の事にて候程に、今まで遅なはり申して候。ワキ詞「委細承り候。仰せはさる事なれども、只今御供申せとの御事にて候。シテ詞「畏つては候へども、今少し養生を加へ、必ず伺候申し候べし。ワキ詞「いやく片時も早く國の御事をば聞召されたく思召せば、只々御供申さんと、シテ詞「是非をいはせぬ武藏殿に、ワキ詞「さしも剛なる、シテ詞「土佐

百にはあらず—古今集の歌に「最上川上れば下る稻舟のいなにはあらず此月ばかり」上句は序詞なり
あらずしごと—豫期せる事

和僧—和はわぬしわどのなどのわにて汝の意

坊も、上歌地謡否にはあらず稻舟の、否にはあらず稻舟の、上れば下る事もいさ、あらずしごととも徒に、なるともよしや露の身の、消えて名のみを残さばや、消えて名のみを残さばや。

ワキ詞「如何に申し上げ候。土佐正尊を召連れて参り候。判官詞「此方へと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。此方へ参られ候へ。判官詞「如何に土佐坊珍しや。さて何のために上りて有るぞ。鎌倉殿より御文はなきか。シテ詞「さん候。さしたる御事も御座なく候間、御文は参らず候。詞に申せと候ひしは、都に別の子細なく候事、偏に御渡り候故と思召し候。かまへてよく守護させ給へとこそ御説候ひつれ。判官詞「よもさは有らじ。義經討ちに上りたる御使とこそ覺えたれ。ワキ詞「御説の如く、大名どもをさし上せられ候はど、宇治瀬田の橋をも引き、都鄙の騒ぎとなつては悪しかりなんと思召し、土佐坊上つて物詣するやうにて、たばかり討ち申せとこそ仰せ付けられ候ひつらめ。和僧に於ては此法師、手なみの程を見すべきなり。シテ詞「あら勿體なや。たとひ人の讒言により、君こそ仰せ出さるよとも、

物いひさがなき
事一謠言の入る

緩怠一異心の意
に用ゐる
紀證文一誓約書

辨慶にこそは渡
しけれ一御前に
於て讀みたりけ
りとも作る

上は云々一神明
一誓ふ言
五道一餓鬼畜生
修羅天上人間の
五界
泰山府君一閻魔
王の子にて人の
魂魄を司る
熊野三所一本宮

さすがに武略の武藏殿、さは有るまじきと申されてこそ、御兄弟の御中に、物いひさがなき事あるまじけれ。まづ静まつて事のわけを、委しく聞き給へ武藏坊。是は御説にて候へども、何によつて只今さる御事の候べき。いさよか宿願の事の候間、熊野參詣のために罷り上りて候。判官詞「梶原が讒奏により、義經を鎌倉へも入れられず、道より追ひ歸されし事は如何に。シテ詞「その事は如何御座候やらん、身に於ては全く緩怠あらざる趣、起證文に書き表し、謠、只今御目に懸くべしと、上歌地謠「當座の席を遁れんと、當座の席を遁れんと、土佐は聞ゆる文者にて、自筆に是を書き付け、辨慶にこそは渡しけれ。シテ謠「敬つて申す起證文の事。上は梵天帝釋四大天王、閻魔法王五道の冥官泰山府君、下界の地には、伊勢天照大神を始め奉り、伊豆箱根富士淺間、熊野三所金峯山、王城の鎮守、稻荷、祇園、加茂、貴船、八幡、三所、松尾、平野、總じて日本國の大小の神祇冥道、請じ驚かし奉る。殊には氏の神、全く正尊討手に罷り上る事なし、この事、偽是あらばこの誓言の御罰を中り、來世は阿鼻に、墮罪せられんものなり。仍つて起證文かくの如

新宮那智
阿真一地獄の名
讀み上げたるは
云々一讀み上げ
たりとも作る

君が代は云々一
後拾遺集の歌

著背長一鏡のこ
と

し、文治元年九月日、正尊と讀み上げたるは、身の毛もよだちて書いたりけり。地謠「もとより虚言とは思へども、文を揮うて書いたる、器用を感じ思召し、御盃を下さるよ。折節御前に、磯の禪師が娘に、静と云へる白拍子、今様を諡ひつよ、御酌に立ちて花葛かよる姿ぞ類なき、舞の袖。(中ノ舞)靜謠「君が代は、千代に一度ある塵の、地謠「白雲かよる山となるまで。山となるまで、山となるまで、靜謠「變らぬ契を頼む中の、地謠「變らぬ契を頼む中の、隔てぬ心は神ぞ知るらん、よくく申せと靜に諫められ、土佐坊御前を罷り歸れば、君も御寢所に入らせ給へば、各退出申しけり。(中入)ワキ詞「如何に申し上げ候。只今土佐が宿所を見せに遣はし候處に、幕の内には矢を負ひ弓を張り、兵ども皆武具をし、只今打つ立つ氣色見えて、更に物詣の氣色は見えぬよし申し候。判官詞「元より覺悟の前なれば、何程の事のあるべきぞと、ワキ詞「其まよがて御座を立ち、靜謠「靜は著背長參らす。地謠「義經之を召されつよ、義經之を召されつよ、御佩刀を取つて静々と、中門の廊に出で給ひ、門を開かせ諸共に、寄せ來る勢を待ち給ふ。

寄せ来る勢を待ち給ふ。

御腹めされよ
切腹あれかしと
なり

立衆一盤詰白波と、よそにや聞かんわたづみの、深き心はある物を。シテ詞「その時正尊駒しづしづと打ち寄せて、大音上げて名のるやう、誰そもくは是は鎌倉殿の御使、土佐正尊とは我が事なり。詞九郎大夫判官殿の、討手の大將たまはつたり。とうく御腹めされよと、大音上げてぞ呼ばはりける。地謡味方の勢は之を見て、味方の勢は之を見て、あの土佐坊を討ち取らんと、我もくと進む中に、江田の源三熊井太郎、辨慶を先として、門外に切つて出づれば、寄手の兵渡り合ひ、喚き叫んで戦うたり。

打物一刀

ワヤ詞「其時辨慶表に進み、如何に土佐坊確に聞け。さても書きつる虚起證の、罰を忽ち與ふべし。いざ一太刀と呼ばはれば、光景詞「大將討たせて叶はじと、好む打物ひつさけて、辨慶を目懸けてかよりければ、ワヤ詞「天晴器量の人體かな。さて汝は誰そと尋ねれば、光景詞「物その物にあらねども、正尊が内に名を得たる、誰陸奥の國の住人に、姊和の平次光景なりと、大音上げてぞ名のりける。」

宗徒の一重立ち
たる

引立ちけるを
通ぐるを云ふ

ワヤ詞「實にゆよしくも名のるものかな。さては汝は土佐が郎等、我には不足の者なれども、誰志をば報ぜんと、地謡「長刀やがて取直し、長刀やがて取直し、無慙や汝手に懸けん」と、込む長刀を打ち拂ひ、受け流せば又取直し、ちやうと打てばはつたと合はせ、重ねて打つに打ち込まれて、何かはたまらん唐竹割に、二つになつてぞ失せにける。正尊これを見るよりも、正尊これを見るよりも、宗徒の郎等數輩討たせて、今は叶はじと馬より下り立ち、亂れ入るを、義經打物取直し給ひ、隙間を有らせず戦ひ給へば、静も諸共に切り拂ひ切り拂ふ。正尊叶はじと引立ちけるを、辨慶追つ詰め戦ひけるが、押し並べむすと組み、えいやと投伏せ、大勢取り込め繩うち懸けて、喜び勇み囚人を引かせ、御門の内にぞ入り給ふ。

巻絹

梗
勅使國々より集められし巻絹を熊野權現に納めんとて出立つ。こゝに都よりの男巻絹持參の儀遅なはりたれば縛しめらる。然るに此男熊野に著きて音無の天神へ詣で歌一首を詠めり、それを天神納受し給ひ、神子にのりうつりて縛の繩を解かしめ給ふ事を作る。歌の徳を叙べし曲也。

概

シテ 神子 ツレ 男 ワキ 勅使

巻絹一疋の巻きたるなり
ワキ詞「そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり」さて我が君あらたなる靈夢を蒙り給ひ、千疋の巻絹を三熊野に納め申せとの宣旨に任せ、國々より巻絹を集め候。さる間都より參るべき巻絹遅なはり候。參りて候はど神前に納めばやと存じ候。
ツレ次第謡「今を始めの旅衣、今を始めの旅衣、紀の路にいざや急がん。ヤン都の手振りなりとても、旅は心の安かるべきか、殊更是は王土の命、重荷をかくる南の國、聞くだに

手振り風俗

麻裳よい「き」の枕詞

遠き千里の濱邊、山は昔路のさかしきを、いつかは越えん旅の道、休らふ間もなき心かな。下歌是とても、君の恵によも洩れじ。上歌麻裳よい、紀の關越えて遙々と、紀の關越えて遙々と、山又山を其處としも、分けつゝ行けば是ぞこの、今ぞ始めて三熊野の、御山に早く著きにけり。御山に早く著きにけり。詞急ぎ候程に、三熊野に著きて候。先々音無の天神へ參らばやと思ひ候。や、冬梅の匂ひの聞え候、何くにか候らん。實に是なる梅にて候。この梅を見て何となく思ひ連ねて候。南無天滿天神、心中の願をかなへて給はり候へと、地謡神に祈りの言の葉を、心の内に手向けつゝ、急ぎ參りて、先づ君に仕へ申さん。
ツレ詞「いかに案内申し候。都より巻絹を持ちて參りて候。ワキ詞何とて遅なはりたるぞそのために日數を定め參る中に、謡汝一人おろかなる、地謡その身の科は遁れじと、その身の科は遁れじと、やがて縛めあらけなき、苦しみをを見せて目のあたり、罪の報いを知らせけり。罪の報いを知らせけり。

なう〜云々
天満宮の神靈神
子に憑きて宣ふ
詞

御注連の繩一縛
りたることを此
く譬へていふ
岩代の松一萬葉
集に「岩代の清
松が枝を引結び
まさきくあらば
又かへり見ん」

シテ詞「なう〜その下人をば何と縛め給ふぞ。その者は昨日音無の天神にて、一首の歌をよみ我に手向けし者なれば、納受あれば神慮、少し涼しき三熱の、苦みを免る、それのみか、謠人倫心なし、詞その繩解けとこそ。謠解けや手櫛の亂髪、地謡「解けや手櫛の亂髪」の、神は受けずや御注連の繩の、引き立て解かんとこの手を見れば、心強くも岩代の松の、何とか結びし情なや。ワキ詞「是はさて何と申したる御事にて候ぞ。シテ詞「この者は音無の天神にて、一首の歌をよみ我に手向けし者なれば、とく〜繩を解き給へ。ワキ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。かほど賤しき者の歌などよむべき事思ひもよらず。如何様にも疑はしき神慮かと存じ候よ。シテ詞「猶も神慮を、偽とや。さあらば彼者昨日我に手向けし言の葉の、上の句を彼に問ひ給へ。我又下の句をばつどくべし。ワキ詞「此上はとかく申すに及ばず。如何に汝誠に歌をよみたらば、その上の句を申すべし。ツレ謡「今心も染みてかくばかり。おとなしにかつ咲きそむる梅の花、シテ詞「ほはざりせば誰か知

正直捨方便一正
直を主として方
便を捨つる意

總持一陀羅尼と
て梵語のまゝに
唱ふる經文
三難一地獄畜生
餓鬼三道の苦し
み
靈山の云々一
「靈山の釋迦の
御前に契りてし
眞如くちせずあ
ひ見つる哉」
伽毘羅衛に云々
一「伽毘羅衛に
共に契りしかひ
ありて文殊の御
顔あひみつるか
な」右二首の歌
の事草紙にあ
り

るべきと、謠よみしは疑ひなきものを。地謡「もとより正直捨方便の、誓曇らぬ神心、直なる故にかくばかり、納受あれば今は早、疑はせ給はで歌人を、ゆるさせ給ふべし。または心中に隠し歌も、神の通力と知るなれば、實に疑ひの仇心、打ち解け此繩を、疾く疾く免し給へや。

クリ地謡「それ神は人の敬ふによつて威を増し、人は神の加護によれり。シテ、サシ謡「されば樂しむ世に逢ふ事、これ又總持の義によれり。地謡「言葉少うして理を含み、三難耳絶えて寂念閑、靜の床の上には、眠り遙に眼を去る。クセこれによつて、本有の靈光、忽ちに照らし、自性の月漸く雲收れり。一首を詠すれば、よろづの悪念を遠ざかり、天を得れば清く、地を得れば安し。あらかじめ、唯一實相、唯一金剛とは説かずや。シテ謡「されば天竺の、地謡「婆羅門僧正は、行基菩薩の御手を取り、靈山の釋迦の御許に契りて、眞如朽ちせず逢ひ見つと、詠歌あれば御返歌に、伽毘羅衛に、契りし事のかひありて、文殊の御顔を、拜むなりと、互に佛々を顯すも、和歌の徳にあらずや。また神は出雲八

重垣、片そぎの寒き世のためし、言はずとも傳へ聞きつべし。神のしめゆふ糸櫻の、風の解けとぞ思はるよ。

ワヤ詞「さあらば祝詞を参らせられ候ひて、神を上げ申され候へ。シテ謠「謹上再拜、そもく當山は、法性國の異、金剛山の靈光、この地に飛んで靈地となり、今の大峰これなり。地謠「されば御嶽は金剛界の曼荼羅、シテ謠「華藏世界、熊野は胎藏界、地謠「密嚴淨土有難や。(神樂) 地謠「不思議や祝詞の神子物狂ひ、不思議や祝詞の神子物狂ひの、さもあらたなる飛行を出して、神がたりするこそ恐しけれ。シテ謠「證誠殿は阿彌陀如來、地謠「十惡を導き、シテ謠「五逆を憐む。地謠「なかの御前は。シテ謠「藥師如來。地謠「藥となつて、シテ謠「二世を助く。地謠「一萬文殊、シテ謠「三世の覺母たり。地謠「十萬普賢、シテ謠「滿山護法、地謠「數々の神々、彼覲につくもがみの、御幣も亂れて空に飛ぶ鳥の、翔りくへて地に又踊り、珠數を揉み袖を振り、高足下足の舞の手を盡し、是までなりや、神は上らせ給ふと云ひ捨つる、聲の内より狂ひ覺めて、又本性にぞなりにける。

片そぎの住吉の神詠として「夜や寒き衣や薄き片そぎのゆきあひのまより霜やあくらん」
神をあげ神靈を天に歸すこと
大峰—金峯山
華藏世界—極樂密嚴淨土—同

花月

梗概

花月といふ者、幼少の時、天狗に奪ひ去られて、今は清水のあたりにはかなき歌舞をなしてさすらへたり。こゝにその父なる法師廻りあふ事を作る。(四番目)

シテ花月　ワヤ　旅僧　狂言　清水門前の者

ワヤ次第謠「風に任する浮雲の、風に任する浮雲の、とまりはいづくなるらん。詞是は筑紫彦山の麓に住居する僧にて候。我俗にて候ひし時、子を一人もちて候を、七歳と申しよ春の頃、いづくともなく失ひて候程に、これを出離の縁と思ひ、かやうの姿と爲りて諸國を修行仕り候。道行謠「生れぬ先の身を知れば、生れぬ先の身を知れば、憐れむべき親もなし。親のなければ我が爲に、心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず、野に臥し山にとまる身の、是ぞ誠の住家なる、是ぞ誠の住家なる。詞急ぎ候程に、これははや花の都に著きて候。先づ承り及びたる清水に参り、花をも詠めばやと思ひ候。

彦山—豊前豊後筑前に亘れる山
俗—出家せざりし時
出離—出家のこと

定めて云々此詞の前にワキと狂言方との間に問答ありワキ何か面白き見物はなきかと問ひ狂言方花月の曲舞を舞ふ事を話す

香象一華嚴宗の祖師香象大師

雲居寺一普願園社の南に在りし寺

狂言詞「定めて今日は清水へ御参りなき事はあるまじく候。御供申し彼人に見せ申し候べし。

シテ詞「抑 是は花月と申す者なり。ある人我が名を尋ねしに答へていはく、月は常住にし、て云ふに及ばず、さて花の字はと問へば、春は花夏は瓜、秋は菓冬は火。因果の果をば末期まで、一句のためにのこすといへば、人これを聞いて、地謡「さては末世の香象なり」とて、天下に隠れもなき、花月と我を申すなり。狂言詞「何とて今までは遅く御出で候ぞ。シテ詞「さん候 今までは雲居寺に候ひしが、花に心を引く弓の、春の遊びの友達と、中たがはじとて参りたり。狂言詞「さらばいつもの如く小歌を謡ひて御遊び候へ。シテ謡「こしかたより。地謡「今の世までも絶えせぬものは、戀といへる曲者。實に戀は曲者、曲者かな。身はさらくくく、さらくくさらに戀こそ寝られね。

狂言詞「あれ御覽候へ 鶯が花を散らし候よ。シテ詞「實にくく 鶯が花を散らし候よ。某射て落し候はん。狂言詞「急いであそばし候へ。シテ詞「鶯の花踏み散らす細脛を、大長刀もあ

養由一周の代司の名人

大口一袴の類

さればにや云々一上巻田村の曲に同じ文句あり

らばこそ、花月が身に敵のなれば、太刀刀は持たず、弓は的射んがため、又かよる落花狼藉の小鳥をも、射て落さんがためぞかし。異國の養由は、百歩に柳の葉を垂れて、百に百矢を射るに外さず。我は又花の梢の鶯を、射て落さんと思ふ心は、その養由にも劣るまじ。謡 あら面白や。地謡「それは柳これは櫻、それは鴈がねこれは鶯、それは養由これは花月、名こそ替はるとも、弓に隔てはよもあらじ。いで物見せん 鶯とて、履いたる足駄を踏脱いで、大口のそばを高く取り、狩衣の袖をうつつ肩ぬいで、花の木陰に狙ひ寄つて、よつぴきひやうと、射ばやと思へども、佛の戒め給ふ、殺生戒をば破るまじ。

狂言詞「言語道斷面白き事を仰せられ候。また人の御所望にて候。當寺の謂れを曲舞に作りて御謠ひ候由を聞召して候、一節御謠ひ候へとの御所望にて候。シテ詞「やすき事謡うて聞かせ申さうするにて候。サシ謡さればにや大慈大悲の春の花、地謡「十悪の里に香しく、三十三身の秋の月、五濁の水に影清し。クセ 抑 この寺は、坂の上の田村丸、大同二年の

御所變一化現のこと
千手一千手観音

春の頃、草創ありしこの方、今も音羽山、嶺の下枝の滴りに、濁るともなき清水の、流れを誰か汲まざらん。ある時この瀧の水、五色に見えて落ちければ、それを怪しめ山に入り、その水上を尋ぬるに、金朱泉の岩の洞の、水の流に埋もれて、名は青柳の朽木あり。その木より光さし、異香四方に薫すれば、シテ謡「さては疑ふ處なく、地謡楊柳観音の、御所變にてましますかと、皆人手を合せ、猶もその奇特を、知らせ給へと申せば、朽木の柳は緑をなし、櫻にあらぬ老木まで、皆白妙に花咲きけり。さてこそ千手の誓には、枯れたる木にも花咲くと、今の世までも申すなり。

ワキ詞「あら不思議や。是なる花月をよく見候へば、某が俗にて失ひし子にて候は如何に。名につて逢はどやと思ひ候。如何に花月に申すべき事の候。シテ謡「何事にて候ぞ。ワキ詞「御身は何くの人のて渡り候ぞ。シテ謡「是は筑紫の者にて候。ワキ詞「さて何故かやうに諸國を御廻り候ぞ。シテ謡「我七つの年彦山に登り候ひしが、天狗に捕られてかやうに諸國を廻り候。ワキ詞「さては疑ふ處もなし。是こそ父の左衛門よ見忘れてあるか。狂言詞「なうな

鬼が城一大江山
平野の峯一比良山
山上一吉野山

う御僧は何事を仰せられ候ぞ。ワキ詞「さん候この花月は某が俗にて失ひし子にて候程に、さてかやうに申し候。狂言詞「筋無き事を承り候。まづくそなたへ御のき候へ。いかに花月へ申し候。いつものやうに八撥を御うち候ひて、皆人に御見せ候へ。シテ謡「さて我筑紫彦山に登り、地謡「七つの年天狗に、地謡「とられて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ。とられて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山、深き思ひを四王寺、讃岐には松山、降り積む雪の白嶺、さて伯耆には大山、さて伯耆には大山、丹後丹波の境なる、鬼が城と聞きしは、天狗よりも恐ろしや。さて京近き山、さて京近き山々、愛宕の山の太郎坊、平野の峰の次郎坊、名高き比叡の大嶽に、少し心のすみしこそ、月の横川の流れなれ。日頃はよそにのみ、見てや止みなんと眺めしに、葛城や高間の山、山上大峰釋迦の嶽、富士の高嶺にあがりつゝ、雲に起き臥す時もあり、かやうに狂ひめぐりて、心みだるよこのさくら、さらくくくと、磨つては謠ひ舞うては數へ、山々嶺々里々を、めぐりくつてあの僧に、逢ひ奉るうれしさよ。

今よりこのさよら、さつと捨てよさ候はど、あれなる御僧に、連れ参らせて佛道、連れ参らせて佛道の、修行に出づるぞうれしかりける。出づるぞうれしかりける。

鍾 馗

鍾 馗

梗 上卷に收めたる皇帝に似たる曲なり。即ち鍾馗の靈現れ出でて、國土を守護せんとの誓を叙ぶる事を作る。(五番目)

シテ 鍾馗 ワキ 旅人

ワキ詞「是は唐終南山の籠に住居する者にて候。さても我奏聞申すべき事の候間、只今帝都に起き候。道行誦終南山を立ち出でて、終南山を立ちいでて、野草の露を分け行けば、遠村に煙満ち、人屋しるき眺望の、海路遙に過ぐれば、釣の小舟もかへる波、寄る程もなき眺かな。寄る程もなき眺かな。」

シテ詞「なうくあれなる旅人に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「我昔誓願の子細あるにより、悪鬼をほし國土を守らんとの誓あり。君賢人をなしたまはど、宮中に現じ奇瑞をなすべきとの、この事を奏してたび給へ。ワキ詞「是は不思議の御事かな。さて

君賢人をなし給はど賢人を用ひ給はどの意

進士一任官の試験に合格せる者

さて御身は如何なる人ぞ。シテ誦「今は何をか包むべき。我は鍾馗と云へる進士なるが、及第の砌に亡ぜし、その執心を翻へし、後世に猶望あり。ワヤ詞「實にく〜鍾馗の御事は、世に隠れなき進士なるが、その亡心にてましますか。シテ誦「なかく〜なりと夕暮の、ワヤ誦「物冷しき、シテ誦「折柄に、上歌地誦「草蟲露に聲しをれ、草蟲露に聲しをれ、尋ぬるに形なく、老松既に風絶えて、問へども松は答へず。實にや何事も、思ひ絶えなん色も香も、終には添はぬ花紅葉、いつをいつとか定めん。いつをかいつと定めん。クセ一「生は風の前の雲、夢の間に散じ易く、三界は水の上の泡、光の前に消えんとす。綺欄殿の内には、有爲の悲みを告げ、翡翠の帳のうちには、有漏の願力有りとかや。榮花は是春の花、昨日は盛なれども、今日は衰ふわんりきの、秋の光朝に増じ、夕に減すとか。春去り秋來つて、花散じ葉落つ。時移り氣色變じて、樂み既に去つて、悲びはやく來れり。シテ誦「朝顔の、花の上なる露よりも、地誦「はかなき物はかけろふの、有るか無きかの心地して、世を秋風の打聲き、群れ居る田鶴の音を鳴きて、四手の田長の一聲も、誰が黄泉路をか

有爲一有爲轉變のこと
有漏一煩惱

四手の田長一時鳥のこと

浄藏浄眼一妙莊殿王の二子にして大神力福徳智慧あり父を念ふ事深く神變を現して父王の心を淨く信解せしむといふ

七多羅樹一貝多ともいふ木高さ四十九尺ありといふそれを七つ重ねたる高さなり

知らすらん。あはれなりける人界を、いつかは離れ果つべき。一「
ワヤ詞「是は不思議の御事かな。急ぎ帝都に赴きつよ、委しく奏聞申すべし。暫く待たせ給へとよ。シテ詞「とても見みえし夢の中、誠の姿を顯はさんと、ワヤ誦「いふより早く、シテ誦「氣色變りて、地誦「傳へ聞く佛在世の、傳へ聞く佛在世の、淨藏浄眼の如くに、その高さ七多羅樹、虚空に上りては座せしめ、地に入つては火焰を放して、水を踏むこと陸地の如くに、さら〜と走り去つて、形はさながら山彦の、形はさながら山彦の、聲ばかりして失せにけり。聲ばかりして失せにけり。(中入)
ワヤ上歌誦「昔の席に法をのべ、昔の席に法をのべ、さも冷しき山陰の、嵐と共に聲立てよ、この妙經を讀誦する。この妙經を讀誦する。
後シテ誦「鬼神に横道なしといふに、なんぞみだりに騒がしく。汝知らずや我が心、國土を守る誓あり。地誦「寶劍光冷しく、日月影おろそかに、松嵐梢を拂ふが如く、惡鬼の亂れ恐れ去つて、實にも鐘馗の精靈たり。

ロンギ地謡「有難の御事や。そも君道を守らん、其誓願の御誓。如何なる謂れなるらん。
 シテ謡「鍾馗及第の、鍾馗及第の砌にて、我と亡ぜし悪心を、翻へす一念、發起菩提心な
 るべし。地謡「實に誠ある誓とて、國土をしづめわきて實に、シテ謡「禁裏雲井の樓閣の、
 地謡「こよやかしこに遍満し。シテ謡「あるひは玉殿、地謡「廊下の下、御階の下までも、御階
 の下までも、劔をひそめて忍びくくに、求むれば案の如く、鬼神は通力失せ、顯はれ出
 づれば忽ちに、すだくりに切り放して、まのあたりなるその勢、只此劔の威光となつ
 て、天に輝き地に遍く、治まる國土となる事、治まる國土となる事も、實に有難き誓か
 な。實に有難き誓かな。

外四

項羽

梗概

草刈男、烏江の渡頭に便船に乗る。船頭男に美人草を所望す。それより話題は虞美人の事より漢楚の合戦に及ぶ。船頭は我こそ項羽なりと名のる。やがて項羽の幽霊、虞美人諸共に現れ出でて、最後の合戦の状を見する事を作る。
 (五番目)

シテ 項羽(前は船頭) ツレ 虞氏 ワキ 草刈

ワキ次第謡「詠め暮して花に又、詠め暮して花に又、宿かる草を尋ねん。詞是は烏江の野邊の草刈にて候。今日も草を刈り只今家路に歸り候。下歌謡「野邊は錦の小萩原、刈萱交る烏江野に、草刈るをのこ心なく、草刈るをのこ心なく、花を刈るとや思草、家づとなれば色々の、草花の数を刈り持ちて、歸れば跡は秋暮れて、枯野にすだく蟲の音も、花を

烏江—今の安徽省和州の東北にあり

蒼苔路滑僧歸
寺紅葉聲乾鹿在
林一盞庭筠の
詩
荻の穂一穂に帆
を言掛く

露刈り込めて
露のかくれるま
ま刈り取れる意

惜しむか心あれ。花を惜しむか心あれ。詞便船を待ち向へ越さうするにて候。

シテ、サシ誦「蒼苔路滑にして僧寺に歸り、紅葉聲乾いて牡鹿鳴くなる夕ま暮、心も澄める面白さよ。一聲秋毎に、野分を船の追風にて、地誦「荻の穂かくる露の玉。

ワキ詞「なうくその船に乗らうするにて候。シテ詞「あう召され候へ。さて船賃は候。ワキ詞「我等如きの者の船賃參らせたる事はなく候。シテ詞「船賃なくばこの舟に叶ひ候まじ。

ワキ詞「さらば上の瀬へ廻らうするにて候。シテ詞「なうく道理は申しつ船に召され候へ。ワキ誦「乗りおくれじと草刈は、もとの渚に立ち寄れば、シテ誦「とく乗り給へとさし寄する。

上歌地誦「露刈り込めて秋草の、露刈り込めて秋草の、葉毎に影宿る、月をや舟に乗せつらん。天の川、たな渡りして七夕の、たな渡りして七夕の、年に一夜は心せよ。秋風吹けば波の音、湊に近き海士小舟、水音なしに行く船の、水馴棹をさうよや。水馴棹をさうよよ。

シテ詞「船が著いて候御上り候へ。ワキ詞「御船恐れて候。シテ詞「さて船賃は候。ワキ詞「又船賃と

美人草と申して
是より虞氏の
事を云ひ項羽の
身の上に及ぶ

さても云々是
より虞楚の軍談
に入る

仰せられ候よ。その爲にこそ向ひにて申し定めて候に、何とて聊爾なる事をば承り候ぞ。シテ詞「いや船賃と申せばとて、別の子細にても候はごこそ。それ程多き草花をなど一本賜はり候はぬぞ。ワキ詞「あら優しや。何れにても召され候へ。シテ詞「さらばこの花を賜はらうするにて候。ワキ詞「不思議やな是程多き草花の中に、何とてその花をば選つて召され候ぞ。シテ詞「さん候。是は美人草と申して、故有る花にて候。ワキ詞「あら面白や美人草とは、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ詞「是は項羽の後虞氏と申しし人の、身を投げ空しくなり給ひしを、取り上げ土中に築き込め候へば、その塚より生ひ出でたる草なればとて、さて美人草とは申し候。ワキ詞「さらば項羽高祖の戦の様を、御存じ候はご、そと御物語り候へ。シテ詞「さらば語つて聞かせ申し候へし。

物言さても項羽高祖の戦七十餘度に及ぶといへども、始めは項羽打勝ち給ひ、一度も高祖の利なかりしに、ある時項羽の兵心變りし、却つて項羽を狭めつよ、四面に鬨の聲をあぐれば、虞氏は思ひに堪へかねて、いかどはせんと伏し給ふ。又望雲騅と云ふ馬

般若の船一佛の
智慧にて凡夫を
救ふこと

昔は云々一昔は
衆今今は衰へた
る態を叙ぶ
爛體一たじれた
る肉體

は、一日に千里を駆くる名馬なれども、主の運命盡きぬれば、膝を折つて一足も行かず。その時項羽はちつとも騒がず、馬よりしづくとおり立つて、如何に呂馬童、我が首取つて高祖に捧げ、諺名を揚げよやと呼ばはれども、地謡「呂馬童は恐れて近つかず。不覺なる者の心かな、是見よ後の世に語り傳へよと、言ひあへず、劔を抜いてあへなくも、我と我が首を掻き落し、呂馬童に與へそのまよ、この原の露と消えにけり。望雲騷は膝を折り、黄なる涙を流せば、さのみ語れば我が心、昔に歸る身の果、今は包まじ我こそは、項羽が幽霊現れたり、跡弔ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。(中入問語)ワヤ上歌謡様々に、弔ふ法の聲立てよ、弔ふ法の聲立てよ、波に浮寝の夜となく、晝とも分かぬ弔ひの、般若の船のおのづから、その纜をとく法の、心を静め聲をあけ、一切有情、殺害三界不墮惡趣。

後シテ謡「昔は月卿雲客打圍み、今は樵歌野田の月、爛體霧深し、古松下の陰。地謡「苦紛紛として舊銘を埋む。シテ謡紫の雲間よこぎる出立は、地謡「天つ少女の調かな。おのお

曠恚一怒なり火
焰に喩ふ

の伎樂を奏しつよ、おのく、伎樂を奏しつよ、夢の黄楊櫛弾く琴琵琶の、四面に關の聲を上げれば、又執心の攻め來るぞや、あら苦しの苦患やな。ッレ謡「虞氏は思ひに堪へかねて、地謡「虞氏は思ひに堪へかね給ひて、高樓に登りて、落つるはさながら涙の雨の、身を投げ空くなり給へば、(舞動)シテ謡「項羽は虞氏が別れと我が身の、地謡「成り行く草葉の露諸共に、消え果てし悲さ、思ひ出づれば、劔も鉞も皆投げ捨てよ、身を焼くばかりに口惜しかりし、夢物語ぞ哀れなる。シテ謡「あはれ苦しき曠恚の焰、地謡「あはれ苦しき曠恚の焰の、立上りつよ身方を見れば、高祖に屬して寄せ來る波の、荒き聲々聞けば腹立ち、いで物見せんと自ら駈け出で、敵を近づけ取つては投げ捨て、又は引き伏せ捻首とりづくに、恐しかりける勢なれども、「運盡きぬれば烏江の野邊の、土中の塵とぞなりにける。

橋辨慶

梗
辨慶、五條の天神へ詣づる途中、五條の大橋にて牛若に廻り會ひ、彼は薙刀、此は太刀にて、各力を盡して闘ふに、牛若の神變不思議の早業には辨慶つひに敵すべくもなく、かくて互に名のり出でて、主従の契約をなす。この事義經記に基くと思はる。但し義經記には、場所を橋畔とせずして、天神の築土の邊とす。(四番目)

概

シテ 辨慶 トモ 從者 子方 牛若

丑の時午前二時頃 満參一宿願の日 數滿つること

シテ詞「是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の子細有つて、五條の天神へ、丑の時詣を仕り候。今日滿參にて候程に、只今參らばやと存じ候。如何に誰か有る。トモ詞「御前に候。シテ詞「五條の天神へ參らうするにて有るぞ、其分心得候へ。トモ詞「畏つて候。又申すべき事の候。昨日五條の橋を通り候所に、十二三ばかりなる幼き者、小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候。先々今夜の御物詣は、思召

し御止まりあれかしと存じ候。シテ詞「言語道斷の事を申す者かな。たとへば天魔鬼神なりとも、大勢には叶ふまじ、おつ取りこめて討たざらん。トモ詞「おつ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元に寄せ付けず、シテ詞「手近く寄れば、トモ詞「目にも、シテ詞「見えす、地謡「神變奇特不思議なる、神變奇特不思議なる、化生の者に寄せ合せ、かしこ御身討たすらん。都廣しと申せども、是程の者あらじ。實に奇特なる者かな。

シテ詞「さあらば今夜は思ひ止まらうするにて有るぞ。いや辨慶程の者の、聞き通はは無念なり。今夜夜更けば橋に行き、化生の者を平けん、と、上歌地謡「夕べ程なく暮方の、夕べ程なく暮方の、雲の氣色も引きかへて、風凄しく更くる夜を、遅しとこそは待ち居たれ。遅しとこそは待ち居たれ。(中入)

牛若一聲謡「さても牛若は母の仰せの重ければ、詞「明けなば寺へ上るべし、今宵ばかりの名残なれば、五條の橋に立ち出でて、川波添へてたちまちに、月の光を待つべしと、一聲謡「夕波の、氣色はそれか夜嵐の、夕程なき秋の風、上歌地謡「面白の氣色やな、面白の氣色やな、

たちまちに川波の立つことより立待つ意にかけ立待の月(十

七夜)を思はしむ
夕顔の花の色―
源氏物語の趣を
思浮べしむ

そごろ浮き立つ我が心、波も玉散る白露の、夕顔の花の色、五條の橋の橋板を、とどろとどろと踏み鳴らし、音も静に更くる夜に、通る人をぞ待ち居たる。通る人をぞ待ち居たる。

草摺長―大鎧の
状をいふ

「既にこの夜も明方の、三塔の鐘も杉間の雲の、光り輝やく月の夜に、著たる鎧は黒革の、緘しに緘せる大鎧、草摺長に著なしつよ、もとより好む大長刀、真中取つて打ちかつぎ、ゆらりくと出でたる有様、如何なる天魔鬼神なりとも、面を向くべきやうあらじと、我が身ながらも物頼もしうて、手に立つ敵の戀しさよ。

女の姿なり―薄
衣をかづきたれ
ば云ふ

牛若「川風も早更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すこけに休らへば、シテ詞「辨慶かくともしら波の、立ち寄り渡る橋板を、さもあらよかに踏み鳴らせば、牛若「牛若彼を見るよりも、すはやうれしや、人來るぞと、薄衣猶も引被き、かたはらに寄り添ひたらずめば、シテ詞「辨慶彼を見付けつよ、(立廻)言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり。我は出家の事なれば、思ひわづらひ過ぎて行く。シテ詞「牛若彼をなぶつて見んと、行きちが

小姓―小童

ひさまに長刀の、柄元をはつしと蹴上ぐれば、シテ詞「すは痴者よ物見せんと、地謡「長刀やがて取り直し、長刀やがて取り直し、いで物見せん手竝の程と、斬つてかよれば、牛若は、少しも騒がすつつ立ち直つて、薄衣引きのけつよ、静々と太刀抜き放つて、つつ支へたる長刀の、鋒に太刀打ち合はせ、つめつ開いつ戦ひしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るとぞ見えしが、たよみ重ねて打つ太刀に、さしもの辨慶合はせ兼ねて、橋桁を二三間、しさつて肝をぞ消したりける。あら物々しあれ程の、あら物々しあれ程の、小姓一人を斬ればとて、手竝にいかで洩らすべきと、長刀柄長くおつ取りのべて、走りかよつてちやうと切れば、そむけて右に飛びちがふ。取り直して裾を薙ぎ拂へば、跳りあがつて足もためず、ちうを拂へば頭を地に付け、ちどに戦ふ大長刀、打ち落されて力なく、組まんと寄れば切り拂ふ、すがらんとするも便なし。せん方なくて辨慶は、希代なる少人かなとて、呆れ果てぞ立つたりける。

ロンギ地謡「不思議や御身誰なれば、まだいとけなき姿にて、かほどけなけにましますぞ。

九條の御所―牛若の宿所なり御所とは實は常らず

委しく名のりおはしませ。牛若うしわか、今は何をか包むべき、我は源牛若みなもせうしわか。地誦ちじゆ、義朝よしともの御子おんこか。牛若うしわか誦じゆさて汝は、地誦ちじゆ西塔さいたふの武藏辨慶むさしべんけいなり。互たがひに名のり合あひ、互たがひに名のり合あひ、降参かうさん申まうさん御免ごめんあれ、少人せうじんの御事ごんじ、我は出家しゆつげ、位くらゐも氏うぢも健氣けんけいさも、よき主しゆなれば頼たのむなり。鹿か忽こつにや思召おほしめすらんさりながら。是又また三世さんぜの奇縁きえんの始はじめ、今いまより後のちは主従しゆじゆぞと、契約けいやく堅かたく申まうしつと、薄衣被うすぎぬかづかせ奉たてまつり、辨慶べんけいも長刀ながなた打ちかついで、九條くじゆの御所ごしよへぞ参まうりける。

熊坂

梗 熊坂長範はもと加賀の出といふ。名高き盜賊にて、美濃の青野が原にて強盜をなす。折まから金賣吉次、牛若丸を伴たなひて奥へ下る。長範之を狙めひて奪掠だつりやくせんとし、手下の者共を集めて夜討よちうをせしに、皆々牛若に撃うたれ、長範亦命いのちを殞なす。此曲は、長範の幽靈現れて、旅僧りよそうに往昔の物語ものがたりをなす事ことを作る。前まへシテを僧形そうがたとせるは、張範ちやうはん廿一歳にじゅういちさいの時法師ときほうしになれりと傳つたふればなり。(五番目)

シテ 熊坂長範(前は僧) ワキ 僧

ワキ次第しだい誦じゆ、憂うれしとは言ひて捨すつる身の、憂うれしとは言ひて捨すつる身の、ゆくへいつとか定さだむらん。詞ことば是は都方みやこがたより出でたる僧そうにて候。我われいまだ東國とうこくを見ず候程ほどに、只今ただいま思おもひ立ち東國とうこく修行しゆぎやうと志こころざし候。道行だうぎやう誦じゆ山越やまこえて、近江路あふみぢなれや湖みづうみの、近江路あふみぢなれや湖みづうみの、粟津あはづの森もりも見え渡る、瀬田せたの長橋ながはしうち過ぎて、野路のぢ篠原しのはらに夜よをこめて、朝立あしたつ道みちの露つゆ深ふかき、名な

青野が原—美濃
赤坂—同

こそ青野が原ながら、色づく色か赤坂の、里も暮れ行く日影かな。里も暮れ行く日影かな。

シテ詞「なうくあれなる御僧に申すべき事の候。ワヤ詞「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。シテ詞「今日はさる者の命日にて候弔ひて給はり候へ。ワヤ詞「それこそ出家の望なれ。さりながら誰と志して回向申すべき。シテ詞「たとひその名は申さずとも、あれに見えたる一木の松の、少し此方の茅原こそ、只今申す古墳なれ。往復ならねば申すなり。ワヤ詞「あら何ともなや、誰と名を知らで回向は如何ならん。シテ詞「よしそれとても苦しからず。法界衆生平等利益。ワヤ詞「出離生死を、シテ詞「離れよとの、地謡「御弔ひを身に受けば、御弔ひを身に受けば、たとひその名は名のらずとも、受け喜ばよ、それこそ主よ有難や。回向は草木國土まで漏らさじなれば分きてその、主にと心あてなくとも、さてこそ回向なれ、浮までは如何あるべき。シテ詞「さらばこなたへ御入り候へ。愚僧が庵室の候に一夜を明して御通り候へ。ワヤ詞「さらばかう参らうするにて候。如何に申し候、持佛堂に参り勤めを

往復—こゝは往生の意

柱杖—禪僧の持物

垂井青墓—共に美濃の地名

多門—毘沙門天六度—布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つ

始めうずると存じ候處に、安置し給ふべき繪像木像の形もなく、一壁には大長刀、柱杖にあらざる鐵の棒、そのほか兵具をひつしと立て置かれ候は、何と申したる御事にて候ぞ。シテ詞「さん候この僧は、未だ初發心の者にて候が、御覽候如くこのあたりは、垂井青墓赤坂とて、その里々は多けれど、間々の道すがら、青野が原の草高く、青墓小安の森しければ、晝ともいはす雨の内には、山賊夜盜の盗人ら、高荷を落し里通ひの、下女やはしたの者までも、打ち剥ぎとられ泣き叫ぶ、さやうの時はこの僧も、例の長刀ひつさけつよ、こよをば愚僧に任せよと、呼ばはりかくれば實には又、一度はさもなき時もあり、さやうの時はこの所の、便にもなるものぞかした、喜びあへば然るべしと思ふばかりの心なり。なんほうあさましき世を捨者の所存候ぞ。地謡「殊勝なき手柄、地謡「似あはぬ僧の腕立、さこそをかしと思すらん。さりながら佛も、彌陀の利劍や愛染は、方便の弓に矢を矧け、多聞は鉾を横たへて、悪魔を降伏し、災難を拂ひ給へり。シテ詞「されば愛著慈悲心は、地謡「達多が五逆に勝れ、方便の殺生は、菩薩の六度に勝れりとか。これ

眠藏—寢所

を見彼を聞き、他を是非知らぬ身の行くへ、迷ふも悟るも心ぞや、されば心の師とはなり、心を師とせざれと、古き詞に知られたり。かやうの物語、申さば夜も明けなまし。お休みあれや御僧達、我もまどろまんさらばと眠藏に、入るよと見えつるが、形も失せて庵室も、草むらとなりて松陰に、夜を明したる不思議さよ。夜を明したる不思議さよ。(中入)

ワキ上歌謡「一夜臥す、男鹿の角の束の間も、男鹿の角の束の間も、寝られん物か秋風の、松の下臥夜もすがら、聲佛事をやなしぬらん。聲佛事をやなしぬらん。後シテ謡「東南に風立つて西北に雲静ならず、夕闇の夜風烈しき山陰に、地謡「桐木の間やさわぐらん。シテ謡「有明頃かいつしかに、地謡「月は出でても朧夜なるべし、切り入れ攻めよと前後を下知し、弓手や馬手に心を配つて、人の寶を奪ひし惡逆、娑婆の執心、これ御覽せよあさましや。

ワキ「熊坂の長範にてましますか、その時の有様御物語り候へ。シテ謡「さて三條の吉次

與力—加勢

磨針—近江にある様の名

引場—退却の場所

目の内—眼光

信高として、黄金を商なふ商人あつて、毎年數駄の寶を集めて、高荷を作つて奥へ下る、調あつばれ之を取らばやと、與力の人數は誰々ぞ。ワキ謡「さて國々より集りし、中に取りても誰が有りしぞ。シテ謡「河内の覺紹、調「磨針太郎兄弟は、面討には並びなし。ワキ謡「さて又都のその内に、多き中にも誰が有りしぞ。シテ「三條の衛門壬生の小猿。ワキ謡「火ともしの上手分切には、シテ謡「是等には上はよも越さじ。ワキ謡「さて北國には越前の、シテ謡「麻生の松若三國の九郎、ワキ謡「加賀の國には熊坂の、シテ謡「此長範を始として、究竟の手柄の痴者等、七十人は與力して、ワキ謡「吉次が通る道すがら、野にも山にも宿泊に、目付を附けて之を見す。シテ謡「この赤坂の宿に著く、こゝこそ究竟の所なれ、引場も四方に道多し、見れば宵より遊君する、數百のあそび時をうつす。ワキ謡「夜も更け行けば吉次兄弟、前後も知らず臥したりしに、シテ謡「十六七の小男の、目の内人に勝れたるが、障子の透間物合の、そよともするを心にかけて、ワキ謡「少しも臥さでありけるを、シテ謡「牛若殿とは夢にも知らず、ワキ謡「運の盡きぬる盗人等、シテ謡「機嫌はよきぞ、ワキ謡「はや、シテ謡「入れと、地謡「い

行疫神一改訂本
に此字を充つ通
解には陽厄神か
といへり拾葉抄
には右いづれを
も載せたり

しようやー拾葉
抄に枝葉やとし
通解もそれに従
へり寶生流諸本
に笑止やとせる
をよしとす
供養一亡者への
甲ひ

ふこそ程も久けれ、言ふこそ程も久けれ。皆我先にと松明を、投げ込みくみだれ入る、勢は行疫神も、面を向くべきやうぞなき。然れども牛若子、少し恐るる氣色なく、小太刀を抜いて渡り合ひ、獅子奮迅虎亂入、飛鳥の翔の手を碎き、攻め戦へばこらへず、表に進む十三人、同じ枕に切り伏せられ、其外手負ひ太刀を捨て、具足を奪はれはふく逃けて、命ばかりを遁るもあり。熊坂いふやう、此者どもを手の下に、討つは如何さま鬼神か、人間にてはよもあらず、盗も命のありてこそ、あらしようや引かんとて、長刀杖につき、うしろめたくも引きけるが、シテ鬮熊坂思ふやう、地鬮熊坂思ふやう、ものくしその冠者が、切るといふともさぞ有らん。熊坂秘術を振ふならば、如何なる天魔鬼神なりとも、中につかんで微塵になし、討たれたるものどもの、いで供養に報せんとして、道より取つて返し、例の長刀引きそばめ、折妻戸を小楯に取つて、彼の小男をねらひけり。牛若子は御覽じて、太刀抜きそばめ物あひを、少し隔てよ待ち給ふ。熊坂も長刀かまへ、互にかゝるを待ちけるが、いらつて熊坂左足を踏み、鐵壁も徹れと突く長刀を、

はつしと打つて弓手へ越せば、追つ懸け透かさすこむ長刀に、ひらりと乗れば刃向になり、しさつて引けば馬手へ越すを、おつ取り直してちやうと切れば、宙にて結ぶをほどく手に、却つて拂へば飛びあがつて、そのまゝ見えす形も失せて、こよやかしこと尋ぬる處に、思ひもよらぬうしろより、具足の透間をちやうと切れば、こは如何にあの冠者に、切らるゝ事の腹立さよと、いへども天命の、運の極めぞ無念なる。

地鬮「打物わざにて叶ふまじ、打物わざにて叶ふまじ、手取にせんとて長刀投げ捨て、大手をひろけて、こよの面廊かしの詰りに、追つかけて追つ詰め取らんとすれども、陽炎稲妻水の月かや、姿は見れども手に取られず。シテ鬮次第々々に重手は負ひぬ。地鬮次第次第に重手は負ひぬ、猛き心、力も弱り弱り行きて、シテ鬮此松が根の、地鬮苔の露霜と消えし昔の物語、末の世助けたび給へと、ゆふつけも告げ渡る、夜も白々と赤坂の、松陰に隠れけり。松陰にこそは隠れけれ。

重手一重傷

ゆふつけーゆふ
つけ鳥は鷲のこ
と

小督

梗

小督の局は少納言信西の孫、櫻町中納言成範卿の女也。高倉帝の寵を受けしが、清盛に忌まれて嵯峨野の奥に隠る。高倉正の大弼仲國、仲秋明月の夜、御使として小督の許を尋ね行きて對面し、直に返事を受取り立別る。砌酒宴ありて一さしの舞をかなで、後駒に跨りて歸る都の空の名残、ゆかりりけるさまを脚色す。(四番目)

概

シテ 源仲國 ツレ 小督の局

トモ 侍女 ワキ 勅使

相國—太政大臣のこと清盛をさす
夜の大殿—御寢殿
南殿—紫宸殿

ワキ詞「これは高倉の院に仕へ奉る臣下なり。さても小督の局と申して、君の御寵愛の御座候。中宮は又まさしき相國の御息女なれば、世の憚りを思召しけるか、小督の局暮に失せ給ひて候。君の御歎き限なし。晝は夜の大殿に入り給ひ、夜は又南殿の床に明かさせ給ひ候處に、小督の局の御行方、嵯峨野のかたに御座候由聞召し及ばれ、急ぎ彈正の

寮—左馬寮右馬寮とて買の馬を養ひ置く役所
秋の夜の—源氏物語の歌末句時の間もみん

大弼仲國をめして、小督の局の御行方を、尋ねて參れとの宣旨に任せ、只今仲國が私宅へと急ぎ候。いかに仲國の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「是は宣旨にて候。さて小督の局の御行方、嵯峨野の方に御座候由聞召し及ばせ給ひ、急ぎ尋ね出でこの御書を與へよとの宣旨にて候。シテ詞「宣旨畏つて承り候。さて嵯峨にては如何やうなる處とか申し候。ワキ詞「嵯峨にては只片折戸したる所とこそ聞召されて候へ。シテ詞「左様の賤が屋には片折戸と申す物の候。今夜は八月十五夜にて候間、琴彈き給はぬことあらじ。小督の局の御調をば、よく聞き知りて候間、御心安く思召せと、謹しく申し上げければ、ワキ詞「この由奏聞申しければ、御感の餘忝くも、寮の御馬を賜はるなり。シテ詞「時の面目畏つて、地誦「やがて出づるや秋の夜の、やがて出づるや秋の夜の、月毛の駒よ心して、雲井に翔れ時の間も、急ぐ心の行方かな。急ぐ心の行方かな。(申入)
ツレ、サン誦「けにや一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、みなこれ他生の縁ぞかし。ツレ、トモ誦「あからさまなる事ながら、馴れて程ふる軒の草、しのぶたよりに賤の女の、目

あづから一自らに緒を掛く
何をかくねる一
拗ること
人に語るな一古
今集遍照の歌に
名にめてて折
れるばかりぞ女
郎花我ちちにし
と人に語るな一
牡鹿なく此山里
一通解に源氏物
語に「牡鹿なく
秋の山里いかな
らん小秋が露の
かゝる夕暮」と
ある歌の句を引
けるにやとある
よりも後葉集の
牡鹿鳴く此山
里の嵯峨なれば
悲しかりけり秋
の夕暮」を證歌
となすべし嵯峨に
なるとはしこの
意の
掛くといふ語を
法輪一寺の名

に觸れなるよ世の習ひ、飽かぬは人の心かな。下歌地謡「いざゞさらば琴の音に、立てよ
もしのぶこの思ひ、せめてや暫し慰むと、地歌せめてや暫し慰むと、かきなす琴のおのづ
から、秋風にたぐへば、なく蟲の聲も悲みの、秋や恨むる戀や憂き、何をかくねる女郎
花、我も浮世のさかの身ぞ、人に語るな、この有様も恥かしや。
シテ一覽「あら面白のをりからやな。三五夜中の新月の色、二千里の外も遠からぬ、歎慮か
しこき勅を受けて、心も勇む駒の足なみ、夜の歩みぞ心せよ。牡鹿なく、この山里とな
がめける、地謡「嵯峨野の方の秋の空、さこそ心も澄みわたる、片折戸をしるべにて、名
月に鞭を舉げて、駒を早め急がん。シテ「賤が家居の假なれど、地謡「若しやと思ひ此處彼
處に、駒を駈寄せ駈寄せて、控へく聞けども、琴彈く人は無かりけり。月にやあくが
れ出で給ふと、法輪に參れば、琴こそ聞え來にけれ、峯の嵐か松風か、それかあらぬか、
尋ぬる人の琴の音が、樂は何ぞと聞きたれば、夫を想ひて戀ふる名の、想夫戀なるぞ嬉
しき。シテ詞「疑ひもなき小督の局の御調にて候。やがて案内を申さうするにて候。如何に

人目づつみ一包
みに堤を掛く

嵯峨の山一後撰
集の歌「嵯峨の
山御幸絶えにし
芥川の千代の古
道あととありけ
り」

この戸開けさせ給へ。ツレ「誰そや門に人音のするは。心得て聞き候へ。トモ「中々にと
かく忍ばよ悪しかりなんと、まづこの樞を押開く。シテ詞「門さよれては叶ふまじと樞をお
さへ、誦是は宣旨の御使、仲國これまで参りたり。其由申し給ふべし。ツレ「現なやかよ
る卑しき賤が屋に、何の宣旨の候べき、門違へにてましますか。シテ詞「いや如何に包ませ
給ふとも、人目づつみも洩れ出づる、誦袖の涙の玉琴の、調は隠れなきものを。ツレ「馴れし
に恥かしや仲國は、殿上の御遊の折々は、シテ「笛仕れと召し出だされて、ツレ「馴れし
雲井の月も變らず、シテ「人を訪ひ來てあひにあふ、その糸竹の夜の聲、地謡「ひそか
に傳へ申せとの、勅詔をば何とさは、隔て給ふや中垣の、葎が下によしさらば、今宵
は片敷の、袖ふれて月に明かさん。上歌「所を知るも嵯峨の山、所を知るも嵯峨の山、御
幸絶えにし跡ながら、千代の古道たどり來し、ゆくへも君の惠ぞと、深き情の色香をも、
知る人のみぞ花鳥の、音にだに立てよ東屋の、あるじはいさ知らず、調は隠れよもあら
じ。

身に白玉のものを
づから玉の緒
を含めて次の存
へてに續く
漢王云々一眞武
帝と李夫人との
こと

トモ詞「仲國御目に懸らざらんほどは歸るまじきとて、あの柴垣の本に露にしをれて御入り候。謠勅説と申し痛はしさいひ、何とか忍ばせ給ふべき、こなたへや入れ参らせ候はん。ツレ詞「けにくく我もさやうには思へども、謠餘りの事の心亂れに、身の置所も知らねども、さらばこなたへと申し候へ。トモ詞「さらば此方へ御入り候へ。シテ詞「畏つて候勅説に任せ是まで参りて候。さてもかやうにならせ給ひて後は、玉體衰へ歎慮なやましく見えさせ給ひて候。せめての御事に御行方を尋ねて参れとの宣旨を蒙り、辱くも御書を賜はつて是まで持ちて参りて候。謠恐れながら直の御返事を賜はりて、奏し申し候はん。ツレ謠もとよりも辱かりし御惠、及びなき身の行方までも、頼む心の水蒸の跡さへ深き御情、地謠變らぬ影は雲井より、猶残る身の露の世を、憚りの心にも、訪ふこそ涙なりけれ。ツレ「けにや訪はれてぞ、身に白玉のおのづから、存へて憂き年月も、嬉しかりける住まひかな。ツレ「ザン謠「たとへを知るも數ならぬ、身には及ばぬ事なれども、地謠妹背の道は隔てなき、かの漢王のその昔、甘泉殿の夜の思ひ、たへぬ心や胸の火の、

唐帝云々一玄宗
皇帝と楊貴妃の
こと

煙に残る面影も、ツレ謠見しは程なき哀の色、地謠なかくなりし契かな。唐帝の古へも、驪山宮の私語、洩れし始めを尋ぬるに、あだなる露の淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、忘れぬ夢を訪ふ嵐の風の傳まで身にしめる、心なりけり。ツレ謠「人の國まで訪ひの、地謠哀を知れば常ならで、なき世を思ひの數々に、餘りわりなき戀心、身を碎きてもいやましの、戀慕の亂れなるとかや。是はさすがに同じ世の、頼みも有明の、月の都の外までも、歎慮にかよる御惠、いと畏き勅なれば、宿はと問はれて、無しとはいかが答へん。

勅なれば一勅
なればいと畏
し露の宿はと問
はばいかと答へ
ん」の古歌を引
く

こがらしに一源
氏物語帯木巻の
歌

ロンギ、シテ謠「是までなりやさらばとて、直の御返事たまはり、御暇申し立ち出づる。ツレ謠「月に訪ふ、宿りは假の露の世に、これや限の御使、思出の名残ぞと、慕ひて落つる涙かな。地謠「涙もよしや星合の、今は稀なる中なりと、ツレ謠「終に逢ふ瀬は、地謠「程あらし、迎への舟車の、やがてこそ参らめと、いへど名残の心とて、シテ謠「酒宴をなして糸竹の、地謠「聲すみわたる月夜かな。シテ謠「月夜よし。(男舞)ツカこがらしに、吹きあはすめる笛の音

うれしさを一古今集に「嬉しさを何に包まん唐衣袂ゆたかにたてといはましを」

を、地謡「ひきとどむべき言の葉もなし、言の葉もなし。シテ謡「言の葉もなき君の御心、地謡「われらが身までも物思ひに、立ち舞ふべくもあらぬ心、今は却りてうれしさを、何に包まん唐衣ゆたかに、袖打合せ御暇申し、急ぐ心も勇める駒に、ゆらりと打乗り、歸る姿のあとほるぐと、小督は見送り仲國は、都へとてこそ歸りけれ。

野守

梗 概

野守の鏡といふは、奥儀抄袖中抄など歌學の書に傳ふる所兩説ある事は、この曲中に「野を守りける鬼の持ちし鏡なれば」とも又は野守が影をうつせば、水をも野守の鏡といふともあるが如し。この曲はかゝる歌學上の故事を本として作り、初に野守の翁を出し、後に鬼神の鏡を現す。(五番目)

シテ 鬼神(前は野守翁) ワキ 山伏

鹿島―春日と同體の神
春日野の―古今集に「春日野の

ワキ次第謡「苔に露けき袂にや、苔に露けき袂にや、衣の玉を含むらん。詞是は出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。我大峰葛城に參らず候程に、此度和州へと急ぎ候。道行謡「の程の、宿鹿島野の草枕、宿鹿島野の草枕、子に臥し寅に起き馴れし、床の眠も今更に、假寝の月の影共に、西へ行くへか足引の、大和國に著きにけり。大和國に著きにけり。詞急ぎ候程に、和州春日の里に著きて候。人を待ちてこのあたりの名所をも尋ねばやと

飛火の野守出て見よ今幾日ありて若菜つみてん

五重唯識一唯識は經文の名五重捨遺留純諸攝未歸本諸隱劣願勝諸遣相攝性識宮寺一興福寺

存じ候。

シテ一雙誦春日野の、飛火の野守出て見れば、今幾程ぞ若菜摘む。サン是に出でたる老人は、此春日野に年を経て、山にも通ひ里にも行く、野守の翁にて候なり。有難や慈悲萬行の春の色、三笠の山に長閑にて、五重唯識の秋の風、春日の里に音づれて、眞に誓も直なるや、神のまに／＼行き歸り、運ぶ歩みも積る老の、榮行く御影仰ぐなり。下歌唐土までも聞えある、この宮寺の名ぞ高き。上誦昔仲鷹が、昔仲鷹が、我が日の本を思ひやり、天の原、ふりさけ見ると詠めける、三笠の山陰の月かも。夫は明州の月なれや、こよは奈良の都の、春日長閑けき氣色かな。春日長閑けき氣色かな。

ワヤ詞「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「何事を御尋ね候ぞ。ワヤ詞「御身は此所の人か。シテ詞「さん候。是はこの春日野の野守にて候。ワヤ詞「野守にてましまさば、是により有りけなる水の候は名の有る水にて候か。シテ詞「是こそ野守の鏡と申す水にて候へ。ワヤ詞「あら面白や野守の鏡とは、何と申したる事にて候ぞ。シテ詞「我等如きの野守、朝夕影

箸鷹一鶴をも訓むはいたかとも云ふ

を寫し申すにより、野守の鏡と申し候。又誠の野守の鏡とは、昔鬼神の持ちたる鏡とこそ承り及びて候へ。ワヤ詞「何とて鬼神の持ちたる鏡をば、野守の鏡とは申し候ぞ。シテ詞「昔この野に住みける鬼の有りが、晝は人となりてこの野を守り、夜は鬼となつて是なる塚に住みけるとなり。されば野を守りける鬼の持ちし鏡なればとて、野守の鏡とは申し候。ワヤ詞「謂を聞けば面白や。さてはこの野に住みける鬼の、持ちしを野守の鏡とも云ひ、シテ詞「又は野守が影を寫せば、水をも野守の鏡と云ふ事、ワヤ詞「兩説何れも謂れあり。シテ誦「野守がその名は昔も今も、ワヤ誦「かはらざりけり。シテ誦「御覽せよ、上歌地誦「立寄れば、實にも野守の水鏡、實にも野守の水鏡、影を寫していと猶、老の波は眞清水の、あはれ實に見しまよの、昔の我ぞ戀しき。實にや慕ひても、かひあらばこそ古への、野守の鏡得し事も、年古き世の例かや、年古き世の例かや。

ワヤ詞「如何に申すべき事の候。箸鷹の野守の鏡とよまれたるも、この水に付きての事に候か。シテ詞「さん候。この水に付きてのいはれにて候。語つて聞かせ申し候ふべし。

木居一木に止ま
れること
蒼鷹の云々一
古今集の歌

ワキ詞「さらば御物語り候へ。シテ詞「昔この野に御狩の有りしに、御鷹を失ひ給ひ、彼方此方を御尋ね有りしに、一人の野守参り合ふ。翁は御鷹の行くへや知りて有りけるぞと問ひ給へば、彼の翁申すやう、さん候是なる水の底にこそ、御鷹の候へと申せば、何しに御鷹の水の底に在るべきぞと、狩人ばつと寄り見れば、諸實にも正しく水底に、地謡「あるよと見えて白斑の鷹、あるよと見えて白斑の鷹、よくく見れば木の下、水に映れる影なりけるぞや。鷹は木居に在りけるぞ、さてこそ蒼鷹の、さてこそ蒼鷹の、野守の鏡得てしがな、思ひ思はず、よそながら見んと詠みしも、この鷹を寫す故なり。眞に賢き時代とて、御狩も茂き春日野の、飛火の野守出で合ひて、歡應にかよる身ながら、老の思出の世語を、申せば進む涙かな。申せば進む涙かな。ロンギ地謡「實にや昔の物語、聞くにつけても眞の、野守の鏡見せ給へ。シテ詞「思ひよらずの御事や。それは鬼神の鏡なれば、如何にして見すべき。地謡「さてや鏡の有所、聞かまほしきに春日野の、シテ詞「野守と云ふも我なれば、地謡「鏡はなどか、シテ詞「持たざらんと

地謡「疑はせ給ふかや。鬼の持ちたる鏡ならば、見ては恐れやし給はん。眞の鏡を見ん事は、叶ふ眞白の鷹を見し、水鏡を見給へとて、塚の内に入りにけり。塚の内にぞ入りにける。(中入)

ワキ詞「かよる奇特に逢ふ事も、是れ行徳の故なりと、思ふ心を便にて、鬼神の住みける塚の前にて、肝膽を碎き祈りけり。我年行の功を積める、その法力の眞あらば、鬼神の明鏡現して、我に奇特を見せ給へや、南無歸依佛。

後シテ詞「有難や天地を動かし鬼神を感ぜしめ、地謡「土砂山河草木も、シテ詞「一佛成道の法味に引かれて、地謡「鬼神に横道曇なく、野守の鏡は現れたり。

ワキ詞「恐しや打火かどやく鏡の面に、寫る鬼神の眼の光、面を向くべき様ぞなき。シテ詞「恐れ給はど歸らんと、鬼神は塚に入らんとす、ワキ詞「暫く鬼神待ち給へ、夜はまだ深き後夜の鐘、シテ詞「時は虎臥す野守の鏡、ワキ詞「法味にうつり給へとて、シテ詞「重ねて數珠を、ワキ詞「押揉んで、地謡「台嶺の雲を凌ぎ、台嶺の雲を凌ぎ、年行の功を積む事、一千餘箇

年行一年々の修行

台嶺一比叡山を
支那の天台山に
比して云ふ

一矜伽羅以下
不動明王に屬す
る童子

日、しばく身命を惜しまず、採菓汲水に隙を得ず、一矜伽羅二制多伽、三に俱梨伽羅
七八大金剛童子、ワキ謠「東方、(勸)シテ謠「東方降三世明王もこの鏡にうつり、地謠又は南
西北方を寫せば、シテ謠「八面玲瓏と明かに、地謠「天を寫せば、シテ謠「非想非々想天まで隈
なく、地謠さて又大地をかどみ見れば、シテ謠「先地獄道、地謠「先は地獄の有様を現す、一
面八丈の淨玻璃の鏡となつて、罪の輕重罪人の呵責、打つや鐵杖の數々、悉く見えた
り、さてこそ鬼神に横道を正す、明鏡の寶なれ、すはや地獄に歸るぞとて、大地をか
つぱと踏鳴らし、大地をかつぱと踏破つて、奈落の底にぞ入りにける。

代五

外五

張良

梗概

漢の高祖の名臣張良嘗て下邳の土橋に一老人に會ひ、その
落せる履を拾ひ取りて與へし縁により、兵法を授けられた
る史談を脚色す。(五番目)

シテ 黄石公(前は老人) ワキ 張良

公程一公務の意

ワキ詞「是は漢の高祖の臣下張良とは我が事なり。われ公程に隙なき身なれども、或る夜
不思議の夢を見る。是より下邳と言ふ所に土橋あり、かの土橋に何となく休らふ所に、一
人の老翁馬上にて行き逢ふ。かの者左の杵を落し、某に取つて履かせよといふ。何者
なれば我にむかひ、かく言ふらんと思ひつれども、かれが氣色只者ならず、その上老い
たるを貴み親と思ひ、杵を取つて履かせて候。その時彼の者申すやう、汝誠の志あ

外五 張良

五更―午前四時頃

杉の門―杉に遇ぎを掛く

り、今日より五日に當らん日こゝに來れ、兵法の大事を傳ふべきよし申して夢さめぬ。やうく日を考へ候へば、今日五日に相當り候程に、只今下邳の土橋へと急ぎ候。道行詠五更の天も明け行けば、五更の天も明け行けば、時や遅きと行く程に、道は遙に山の端も、白み渡れる川波や、下邳の土橋に著きにけり。下邳の土橋に著きにけり。

シテ謡、あら遅なほりやいかに張良、年老いたる者と契り置きし、その言の葉もはや違ひぬ、詞我は先刻よりこゝに來り、曉鐘をかぞへ待ちつるに、謡はやその時刻も杉の門、上歌地謡待つかひもなしはやかへれ。待つかひもなしはや歸れ。汝誠の志、あらば今日より五日に、當らんその日夜深く來らば我もまたこゝに、かならず出で逢ひ、約束の如く傳へん。後れ給ふな張良と、怒をなして老翁は、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。

ワキ詞「言語道斷 以ての外の機嫌にて候は如何に。又我ながら斯くの如く、ゆくへも知らぬ御事に、かやうに恐れ従ふ事、その故なきには似たれども、大事を傳へて末世に遺し、

瑤臺霜滿一聲之
玄鶴唳天巴峽
秋深五夜之猿叫
月一朗詠集の
句

謡 兵法の師といはれんと、地謡 思ふ心を見ん爲と、思ふ心を見ん爲と、知れば歸るも恨みなし、又こそこゝに來らめと、勇みをなして歸りけり。勇みをなして歸りけり。(中入)

ワキ一聲謡 瑤臺霜滿てり、一聲の玄鶴空に鳴く、巴峽秋深し、五夜の哀猿月に叫ぶ、物冷しき山路かな。地謡 有明の、月も隈なき深更に、月も隈なき深更に、山の峽より見渡せば、所は下邳の川波に、渡せる橋におく霜の、白きをみれば今朝はまだ、渡りし人の跡もなし。嬉しや今は早、思ふ願ひも滿つ潮の、曉かけてはるかに、夜馬に鞭うつ人影の、駒をはやむる氣色あり。

後シテ謡 抑 是は、黄石公と云ふ老人なり。詞こゝに漢の高祖の臣下張良と云ふ者、ただ公程を見て君臣を重んじ、義を全うして心 詞 猛く、賢才人に越え、器量すぐれ、地謡 國を治め民をあはれむ 志、シテ謡 天道に通じて忽ちに、地謡 諸佛も感應まのあたり、シテ謡 大事を傳へて高祖につかへ、地謡 敵を平らけ味方を勇め、天下を治めん 謀、汝に傳へんと、駒を速めて來り給ふを、張良遙に見奉れば、ありしにかはれる石公の粧

ひ、眼の光りもあたりを拂ひ、姿もかやく威勢に恐れて、橋本にかしこまり待ち居たり。

いしくも一いみ
じくもに同じ

シテ詞「いかに張良、いしくも早く来るものかな、近づき給へ物言はん。ワキ詞「その時張良立上り、衣冠正しく引繕ろひ、土橋を遙かに上り行けば、シテ謡「あつぱれ器量の諸人體かなと、思ひながらも今一度、諸心を見んと石公は、地謡「履いたる沓を馬上より、履いたる沓を馬上より、遙かの川に落し給へば、張良「續いて飛んでおり、流るゝ沓を取らんとすれども、所は下邳の巖石いはほに、足もたまらず早き瀬の、矢を射る如く落ちくる水に、浮きぬ沈みぬ流るゝ沓を、取るべき様こそなかりけれ。

面もふらざ一傍
見もふらざ

地謡「不思議や川浪立返り、不思議や川浪立返り、俄に河霧立ち暗がつて、浪間に出づる蛇體の勢、紅の舌をふりたてふりたて、張良「目をかけてかよりけるが、流るゝ沓をおつとり上げて、面もふらさかとりけり。(龍神働)ワキ謡「張良「騒がず劍を抜き持ち、地謡「張良「さわがず劍を抜き持ち、蛇體にかよれば、大蛇は劍の光に恐れ、持ちたる沓

彼の一卷一兵法
の書

を差出せば、沓をおつ取り劍を收め、又川岸にえいやと上り、さて彼沓を取り出し、石公に履かせ奉れば、シテ謡「石公馬より靜に下り立ち、地謡「石公馬より靜におりたち、さるにても汝、善哉々と、彼の一卷を取り出だし、張良「に與へ給ひしかば、即ち披き悉く拜見し、祕曲口傳を残さず傳へ、また彼大蛇は觀音の再誕、汝が心を見んためなれば、今より後は守護神となるべしと、大蛇は雲居に攀ち上れば、石公「遙の高山に上り、金色の光を虚空に放し、忽ち姿を黄石と現し、残し給ふぞ有難き。

黄石と現し一黃
石公一卷の書を
張良に與へ今よ
り十三年後に我
を濟北の穀城山
下に見るべし黃
石は即ち我なり
とて去れる故事
による

羅生門

梗 概

此曲一名綱といふ。頼光の家臣渡邊綱雨夜の物語の折から、羅生門に鬼棲めりと聞き、さらば討取らんとて出で向ひ、門の石壇にあがりて、しるしの札を立て歸らんとする砌に、鬼神あらはれ、互に格闘せしが、遂に鬼神は腕を切り落され、虚空に遁げ去れりといふ事を作る。(五番目)

シテ	鬼神	ワキ	渡邊綱	ツレ	源頼光
ツレ	平井保昌	ツレ	碓井貞光	ツレ	卜部季武
ツレ	坂田公時				

源の頼光一満仲の子
四海安危照掌
中百王理亂懸

四人次第「治まる花の都」とて、風も音せぬ春へかな。頼光「是は源の頼光とは我が事なり。さても丹州大江山の鬼神を従へしより此方、貞光季武綱公時、この人々と日夜朝暮參會申し候。殊更此程は、晴間も見えぬ春雨にて候程に、酒を勧めばやと存じ候ふ。ヤシ謡有難や四海の安危は掌の中に照らし、百王の理亂は心の中に懸け

心中白氏文集の句

たり。四人上歌謡「曇無き、君の御影は久方の、君の御影は久方の、空ものどけき春雨の、音も靜に都路の、七つの道も末すぐに、八洲の浪も音せぬ、九重の春ぞ久しき、九重の春ぞ久しき。

つくんと云々
新古今集の歌

頼光「いかに面々、さしたる興も候はねども、この春雨の昨日今日、晴間も見えぬつれづれに、謡今日も暮れぬと告げ渡る、聲も寂しき入相の鐘。上歌地謡「つくんと、春のながめの寂しきは、春のながめの淋しきは、しのぶに傳ふ、軒の玉水音凄く、獨ながむる夕まぐれ、伴なひ語らふ諸人に、御酒をすよめて盃を、とりぐなれや梓弓、彌猛心の一つなる、つはものの交り、頼みある中の酒宴かな。クセ思ふ心のそこひなく、只うちとけてつれぐと、降り暮らしたる宵の雨、これぞ雨夜の物語。頼光「しなぐ言葉の花も咲き、地謡「匂ひも深き紅に、面もめでて人心、隔てぬ中の戯れは、面白や諸共に、近く居寄りて語らん。

頼光「餘り寂しき夜にて候程に、皆々近う寄つて御物語り候へ。ワキ「畏つて候。仰せに

羅生門一雨朱雀
通にあり内裏外
郭の總門

土も木も云々
上卷田村を見よ

野心一こくは異
存の意

て候程に、皆々近う御参り候へ。頼光詞「いかに申し候。此程珍しき事はなく候か。保昌詞」さ
ん候。此頃不思議なる事を申し候、九條の羅生門に鬼神の住んで、暮るれば人の通らぬ
由を申し候。ワヤ詞「いかに保昌筋なきことな宜ひそ。さすがに羅生門は、都の南門ならず
や、土も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼の宿と定めんと聞く時は、たとひ鬼神の
住めばとて住ますべきにもあらず、かよる龜忽なる事を仰せ候ぞ。保昌詞」さては某詐を
申すと思召し候か。この事世上に隠れなければ申すなり。まこと不審に思召さば、今夜
にてもあれ彼の門に御出であつて、誠か偽か御覽候へ。ワヤ詞「さては某参るまじき者
と思召され候か、其儀にて候はど、今夜彼の門に行き、誠か偽かを見候べし。しるし
を賜はり候へ。ワヤ上歌謡」満座のともがら一同に、是は無益とさよへけり。ワヤ詞「いや保昌に
對し野心は無けれども、一つは君の御爲なれば、誦しるしを給べと申しけり。頼光詞」けに
けに綱が申すごとく、一つは君の御爲なれば、しるしを立て歸るべしと、誦札を取り
出で給ひければ、ワヤ上歌謡「綱はしるしを賜はりて、地誦「綱はしるしを賜はりて、御前を立

重代一祖先傳來
の意

つて出でけるが、立ち歸り方々は、人の心を陸奥の、安達が原にあらねども、こもれる
鬼を従へずは、二度又人に、面を向くる事あらじ、是までなりや梓弓、引きはかへさじ
武士の、やたけ心ぞ恐ろしき。やたけ心ぞ恐ろしき。(中入)
ワヤ一聲誦「さては渡邊の綱は、只かりそのの口論により、鬼神の姿を見んために、物の具
取つて肩に掛け、同じ毛の兜の緒をしめ、重代の太刀を佩き、地誦「たけなる馬に打乗つ
て、舍人をもつれず只一騎、宿所を出でて二條大宮を、南がしらに歩ませけり。春雨の、
音も頻りに更くる夜の、春雨の音も頻りに更くる夜の、鐘も聞ゆる曉に、東寺の前
を打過ぎて、九條おもてに打つて出で、羅生門を見渡せば、物冷しく雨落ちて、俄に吹
き來る風の音に、駒も進まず高嘶し、身振してこそ立つたりけれ。その時馬を乗り放
し、そのとき馬を乗り放し、羅生門の石壇に上り、しるしの札を取り出だし、壇上に立
ておき歸らんとするに、後より兜の、鍔を掴んで引き止めなければ、すはや鬼神と太刀
抜き持つて、切らんとするに、取りたる兜の緒を引きちぎつて、おほえず壇より飛び降

衛門一冠木門

わきつぢ一脇の門の樓かと云ふ

りたり、かくて鬼神は怒をなして、かくて鬼神は怒をなして、持ちたる兜をかつぱと投げ捨て、その長衛門の軒にひとしく、兩眼月日の如くにて、綱を睨んで立つたりけり。
 (舞働) ワキ謡 綱は騒がす太刀さしかざし、地謡 綱は騒がす太刀さしかざし、汝知らずや王地を侵す、その天罰はのがるまじとてかよりければ、鐵杖を振りあげ、えいやと打つを、飛び違ひちやうと切る。切られて組みつくを、拂ふ劍に腕打ち落され、ひるむと見えしがわきつぢにのほり、虚空をさして上りけるを、慕ひゆけども黒雲おほひ、時節を待ちて又取るべしと、呼ばはる聲もかすかに聞ゆる、鬼神よりも恐しかりし、綱は名をこそ揚げにけれ。

鐵輪

梗 概

夫に捨てられし女の嫉妬の一念より、貴船の神に祈りて、鬼女となり恨を晴らさんとせしに、晴明に調伏せられて立去る事を作る。太平記劍之卷に、嵯峨天皇の御宇に或公卿の息女のこととしてかゝる物語見えたるを以て脚色せるなり。(五番目)

シテ 女(後は鬼女) ワキ 安倍晴明
 ツレ 男 狂言 貴船社人

狂言詞「かやうに候者は、貴船の宮に仕へ申す者にて候。さても今夜不思議なる靈夢を蒙りて候。その謂は、都より女の丑の時参りをせられ候に、申せと仰せらるゝ子細、あらたに御靈夢を蒙りて候程に、今夜参られ候はゞ、御夢想の様を申さばやと存じ候。

シテ次第謡 日も數そひて戀衣、日も數そひて戀衣、貴船の宮に参らん、サシ實にや蜘蛛のいに暴れたる駒は繋ぐとも、二道かくるあだ人を、頼まじとこそ思ひしに、人の偽末

貴船の宮一鞍馬山の北
 丑の時参り一午
 前二時頃人を呪ふ爲に参詣する
 こと
 蜘蛛のいーいは
 絲なり巢なり今は
 蜘蛛のいへと
 謡ふ
 あだ人一薄情の男

糺下賀茂の社
御泥池上賀茂
社の東にあり

知らで、契りそめにし悔しさも、只我からの心なり。餘り思ふも苦しさに、貴船の宮に詣でつゝ、住むかひもなき同じ世の、内に報いを見せ給へと、下歌頼みを懸けて貴船川、早く歩みを運ばん。上歌通ひなれたる道の末、通ひなれたる道の末、夜も糺のかはらぬは思ひに沈む御泥池、生けるかひなき憂き身の、消えん程とや草深き、市原野邊の露分け、月遅き夜の鞍馬川、橋を過ぐれば程もなく、貴船の宮に著きにけり。貴船の宮に著きにけり。

シテ詞「急ぎ候程に、貴船の宮に著きて候。心靜に參詣申さうするにて候。狂言詞「如何に申すべき事の候、御身は都より丑の時參り召さるゝ御方にて渡り候か。今夜御身の上を御夢想に蒙りて候。御申し有る事ははや叶ひて候。鬼になりたきとの御願にて候程に、我が屋へ御歸りあつて、身には赤き衣を著、顔には丹を塗り頭には鐵輪を戴き、三つの足に火を燈し、怒る心を持つならば、忽ち鬼神と御なりあらうするとの御告にて候。急ぎ御歸りあつて告の如く召され候へ。なんほう奇特なる御告にて御座候ぞ。シテ詞「是は思

ひもよらぬ仰せにて候。わらはが事にては有るまじく候。定めて入違にて候べし。狂言詞「いやいやしかとあらたなる御夢想にて候程に、御身の上にて候ぞ。かやうに申す内に何とやらん恐しく見え給ひて候、急ぎ御歸り候へ。シテ詞「是は不思議の御告かな。先々我が屋に歸りつゝ、諸夢想の如くなるべしと、地謡「いふより早く色變はり、いふより早く色變はり、氣色變じて今までは、美女の形と見えつる、緑の髪は空さまに、立つや黒雲の、雨降り風と鳴神も、思ふ中をば避けられし、恨の鬼となつて、人に思ひ知らせん、憂き人に思ひ知らせん。

清明一條天皇
の時の陰陽師

ツレ詞「かやうに候者は、下京邊に住まひする者にて候。我此間打續き夢見惡しく候程に、晴明の許へ立ち越え、夢の様をも占はせ申さばやと存じ候。如何に案内申し候。ワヤ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「さん候下京邊の者にて候が、此程打續き夢見惡しく候程に、尋ね申さん爲に參りて候。ワヤ詞「あら不思議や。勘へ申すに及ばず、是は女の恨みを深く被りたる人にて候。殊に今夜の内に、御命も危く見え給ひて候。若し左様の事にて候

茅の人形―ちか
やにて人間の形
を作る
人尺―當人の寸
尺
謹上再拜―以下
祝詞の文
みとのまきはひ
―結婚のこと
魁魁―鬼類
九曜―日月火木
土金水羅喉計都
の九星或は北斗
七星に金輪妙見
の二星をも加へ
て云ふ

か。ッレ調「さん 候 何をか隠し申すべき、我本妻を離別し、新しき妻を語らひて候が、もし左様の事にてもや候らん。ワヤ調「實にさやうに見えて候。彼の者佛神に祈る數積つて、御命も今夜に窮つて候程に、某が調法には叶ひがたく候。ッレ調「是まで参り御目に懸り候事こそ幸にて候へ、平に然るべき様に御祈念有つて給はり候へ。ワヤ調「此上は何ともして、御命を轉じかへて参らせうするにて候。急いで供物を御調へ候へ。ッレ調「畏つて候。ワヤ調「いでく轉じかへんとて、茅の人形を人尺に作り、夫婦の名字を内に籠め、三重の高棚五色の幣、おのく供物を調へて、肝膽を碎き祈りけり。謹上再拜、夫れ天開け地固まつしより此方、伊弉諾伊弉册尊、天の磐座にして、みとのまきはひ有りしより、男女夫婦のかたらひをなし、陰陽の道長く傳はる。それに何ぞ魁魁鬼神妨げをなし、非業の命を取らんとや。地謡「大小の神祇、諸佛菩薩、明王部天童部、九曜七星二十八宿を驚かし奉り、祈れば不思議や雨降り風落ち、神鳴り稻妻頻りに満ちく、御幣もざよめき鳴動して、身の毛よだちて恐しや。丁、同じく暮春の風は散り、月は東山より出でて早

二十八宿―四方
に各七星あり

我は貴船の云々
―和泉式部が貴
船に参りての歌
に「物思へば深
の螢も我身より
あくがれ出づる
玉かとぞみる」

あしかれと―和
泉式部の歌下句
生ふなるものを
人のなげき―嘆
きを木の字によ
りて生ふと詠む
うはなり―後妻

後シテ謡「夫れ花は斜脚の暖風に開けて、同じく暮春の風に散り、月は東山より出でて早く西嶺に隠れぬ。世上の無常かくの如し。因果は車輪の廻るが如く、我に憂かりし人々に、忽ち報いを見すべきなり。戀の身の浮む事なき鴨川に、地謡「沈みしは水の青き鬼シテ謡「我は貴船の河瀬の螢火、地謡「頭に戴く鐵輪の足の、シテ謡「焔の赤き鬼となつて、地謡「臥したる男の枕に寄り添ひ、如何に殿御よ珍しや。シテ謡「恨めしや御身と契りし其時は、玉椿の八千代二葉の松の末かけて、變はらじとこそ思ひしに、などしも捨ては果て給ふらん。あら恨めしや、捨てられて、地謡「捨てられて、思ふ思ひの涙に沈み、人を恨み、シテ謡「夫をかこち、地謡「ある時は戀しく、シテ謡「又は恨めしく、地謡「起きても寝ても忘れぬ思ひの、因果は今ぞと白雪の、消えなん命は今宵ぞ、痛はしや。悪しかれと、思はぬ山の峰にだに、思はぬ山の峰にだに、人のなげきは生ふなるに、いはんや年月、思ひに沈む恨みの數、積つて執心の鬼となるも理や。シテ謡「いでく命を取らん、地謡「いで命を取らんと、しもとを振り上げうはなりの、髪を手にかまいて、打つや宇津の

三十番神一月を一日宛受持ちて守護する神々

山の、夢現とも分かざるうき世に、因果は廻り合ひたり、今更さこそ悔しかるらめ、さて懲りや思ひ知れ。シテ、殊更恨めしき、地誦、殊更恨めしき、あだし男を取つて行かんと、臥したる枕に立ち寄り見れば、恐しや幣帛に、三十番神ましくて、魍魎鬼神は穢らはしや、出でよくと責め給ふぞや、腹立や思ふ夫をば、取らであまさへ神々の、責めを蒙る悪鬼の神通、通力自在の勢、絶えて、力もたよくと足弱車の廻り逢ふべき、時節を待つべしや、先此度は歸るべしと、いふ聲ばかりは定かに聞えて、いふ聲ばかり聞えて姿は、目に見えぬ鬼とぞなりにける。目に見えぬ鬼となりにけり。

藍染川

藍染川

梗 概

太宰府の神主中務頼澄在京の砌契を結びて、一子梅千代を生める京女の、その後かれふになりしが、母子諸共にはるばる宰府に下り行きしが、本妻のはからひにて、もとの夫に會ひえず。思ひのあまりに女は藍染川に投身す。神主たまたま他より歸り來て、この凶變に會し、祝詞を奉りて、天神を下し、女を蘇生せしむる事を作る。末段天満宮の神威あらたかなる意を寓す。(四番目)

前シテ女 後シテ 天満天神 子方 梅千代
ワ キ 太宰府神主 ツ レ 左近尉 トモ 從者
狂言 神主本妻

袖觸れ初めし契り交すこと

シテ、子方次第誦「忘れは草の名にあれど、忘れは草の名にあれど、忍ぶは人の面影。シテ誦「是は一條今出川に住む女にて候。實にやあだなる契とて、心をさへに筑紫人の、袖觸れ初めし憂き中の、疎くなりぬる身の果は、兎にも角にもあらばあれ、この子が爲に父を尋ね

菅の根の長し
にかゝる枕詞

て、シテ下歌謡「馴れもなれぬに遠旅の、心は子にや迷ふらん。上歌筑紫とは、西ぞとばかり聞きしより、西ぞとばかり聞きしより、月の入るさをしるべにて、ゆくへも知らぬ旅衣、野山幾重か重ぬらん。かよる思を菅の根の、長門の關路程もなく、香椎博多を打過ぎて宰府に早く著きにけり。宰府に早く著きにけり。
シテ詞「あら嬉しや急ぎ候程に、宰府とやらんに著きて候。まづこの所にて宿を借らうするにて候。此方へ來り候へ。如何にこの屋の内へ案内申し候。ツレ詞「誰にて渡り候ぞ。シテ詞「是は都方の者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ詞「心得申し候。是は女性旅人にて候程に、奥の間に置き申さうするにて候。此方へ御入り候へ。シテ詞「いかに申し候。この所に宰府の神主殿と申す人の渡り候か。ツレ詞「中々の事此在所の主にて御座候。我等もその御内の者にて候。シテ詞「都より文をことづかりて候。神主殿へ参らせられて給はり候へかし。ツレ詞「易き御事にて候。やがて届けて参らせうするにて候。シテ詞「あら嬉や候。さらばこの文を参らせ候。御返事を取りてたまはり候へ。ツレ詞「心得申し候。誰か渡り候。狂言シカ

御下り珍しく云
云一文の文言な
り本妻が神主の
返事と偽りて書
けるなり

シカ ツレ詞「さん候。神主殿へ申し上げべき子細あつて参り候。狂言シカ。 ツレ詞「それは恐れがましく候。狂言シカ。 ツレ詞「都より女性旅人の我等が宿に御泊り候が、此文を神主殿へ参らせよと申され候。狂言シカ。 ツレ詞「畏つて候。狂言シカ。 ツレ詞「さん候。幼き人を連れ申されて候。狂言シカ。 ツレ詞「未だ某が屋に御座候。狂言シカ。 ツレ詞「言語道断。さやうの御事をば存せず候程に留め置きて候。さらばやがて追ひ出だし申さうするにて候。狂言シカ。 ツレ詞「いかに旅人へ申し候。只今の文を神主殿へ御目にかけて候へば、やがて御返事を給はりて候。急いで御覽候へ。シテ詞「あら嬉しと早く御届け候ものかな。さらばやがて御返事を見うするにて候。御下り珍しく候へども、男の身なりとも、遙々の遠國に一人は下り難し。いかさま珍しき人に誘はれて御下りかと思ひ候へば、對面申す事はあるまじく候。是は梅千代が方へ申し候。本よりこの身は不肖なれば、親ありとも思ふべからず。はやく都に歸り給へ。謠あらつれなやつれなと書かれたり。是は夢かやあらあさまし

て、母に追ひ付き申さんと、藍染川に歩み行く。藍染川に歩み行く。

ツレ詞「暫く。是は勿體なき御働きにて候。おこと身を投げ給ひては、さて母御の御跡を誰か弔ひ申すべき。只思召し止まり給ひ候へ。是は母御の遊ばされたる文にて候。御形見によく御持ち候へ。かよる痛はしき事こそ候はね。

ワキ詞「是は宰府の神主にて候。我此間是他所に候ひて、只今罷り歸り候。あら不思議や、あの藍染川に人の多く集まりて候は何事にて候らん。や、推量申して候。某他所に候間に網を引かすると存じ候。如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「あの藍染川に人の多く集まりて有るは、網をばし引くか。殺生禁断の所にてあるに、急いで皆々上れと申し付け候へ。トモ詞「畏つて候。やあく、神主殿の御出にてあるぞ。網をばし引くか。殺生禁断の所にてあるぞ、急いで皆々上り候へ。何と人の身を投げたると申すか。や、左近の尉にて渡り候か、これへ神主殿の御出にて候、急ぎ御参りあつて、この謂を御申し候へ。ツレ詞「心得申し候。トモ詞「いかに申し上げ候。網にてはなく候。人の身を投げたる由

是は云々遺言
状の文言

申し候。あれに左近の尉が候ひて、謂れを申し上げうすると是へ参りて候。ワキ詞「いかに左近の尉、身を投げたると申すはいかやうなる者ぞ。ツレ詞「さん候都より女性の、人を尋ねて下り候が、逢はぬを恨みて身を投げたる由申し候。ワキ詞「言語道断。都よりはるばる下りたるに、逢はぬは不得心なる者にてあるよな。あれなる幼き者はいかやうなる者にてあるぞ。ツレ詞「あれは彼の者の子にて候。ワキ詞「手に持ちたるは文にてあるか。ツレ詞「さん候文にて候。ワキ詞「そ見たき由申して取りて來り候へ。ツレ詞「畏つて候。なうその文をそと人の御覽せられたき由仰せ候。給はり候へ。子詞「いや是は母御の御形見にて候程に、参らせ候まじ。ツレ詞「そと御覽じてやがて返し申されうするにて候。此方へ給はり候へ。文を取りて参りて候。ワキ詞「是は梅千代が方へ書き置き候。憂き身はもとより捨妻の、きぬぐなれば恨みもなし。いかに情知らずとも、子に知れぬ親の候べきか。いひかひなくは出家になし、扶持し給はど草の蔭にて、守りの神となるべきなり。大内にありし時は梅壺の侍従、一條今出川の御留主、當所の御名は知らねども、御在京

一跡一家督の意
筑紫人、虚言する
と一かゝる謬
ありしならん

人目さすがに
しかながに恥し
き意
様變へばや法
體となりたし

や候。

子詞「いかに母上いたくな御嘆き候ひそ。梅千代斯くて候へば、御心安く思召せ。シテ詞「實に子ながらも恥しや。父が心の變る事を、身の上に嘆くと思ふかや。諸御身を父に見せ、一跡をも嗣がせばやと思ひてこそ、遙々伴なひ下りたるに、孤となすべき事の悲しさよ。子誦「よしなうそれも力なし、今さら何と嘆くべき。上歌地謡「筑紫人、虚言すると聞きつるに、筑紫人、虚言すると聞きつるに、頼みけるこそ中々に、はかなかりける心かな。かきくらす、心の闇のひたすらに、夢現なき道のべの、便と頼む木蔭さへ、今は亡き身となるべしと、思ふに付けて獨子を、残し置くべき悲しさよ。残し置くべき悲しさよ。ツレ詞「如何に申し候。御痛はしう候へども、神主殿より此所には置き申すなどの御事にて候間、急いでこの屋を出でて何方へも御出であらうするにて候。シテ詞「いかに梅千代。子詞「何事にて候ぞ。シテ詞「このまよ都に上らん事も人目さすがに候へば、あれなる庵室に立越え、様變へばやと思ふなり。御事は是に待ち給へ。子詞「いや

夕顔の空目して
源氏物語の歌
に「光ありと見
し夕顔の白露は
黄昏時の空目な
りけり」を引く

末の露一暹昭の
「末の露本の平
や世の中の後れ
先立つ例なるら
ん」を引く

いや母の御けしき心もとなく候程に、離れ申す事は候まじ。シテ詞「うたてやな父こそ變り給ふとも、母が心の變はるべきか。只々おことはこの所にて、諸母が歸さを待ち給へ。子誦「母の仰せを眞と思ひ、さらば疾く歸り給へ。シテ誦「母は今こそ限なれと、下安からぬ思の色、行きも遣られぬ袖の別れ、子誦「引止められて、シテ誦「親心の、地誦「思ひ煩ふ母が身の、思ひ煩ふ母が身の。亡き跡いかごと、別れ得ぬ今の憂き身かな。とにかくに、歸らん迄は待ち給へと、夕顔の空目して、藍染川に身を投ぐる。藍染川に身を投ぐる。ツレ詞「何と申すぞ、藍染川に人の身を投けたると申すか。如何やうなる者ぞ立越え見ばやと存じ候。や、言語道斷、いかなる者ぞと存じて候へば、某が所に泊たる女性にて候は如何に。なう梅千代殿母御の身を投げ給ひて候ぞ。急いで御覽候へ。子詞「なう母上。諸恨めしの御有様やな。母御のかくてましませばこそ、頼もしく思ひ候ひつるに、是は夢かやあさましや。悲しやな知らぬ筑紫の果に来て、父母さへに捨子となる、自らは誰を頼むべき。下歌地謡「末の露、本の雫もよしやよし、我とても、ながら果てじ身を捨て

て、母に追ひ付き申さんと、藍染川に歩み行く。藍染川に歩み行く。

ツレ詞「暫く、是は勿體なき御働きにて候。おこと身を投げ給ひては、さて母御の御跡を誰か弔ひ申すべき。只思召し止まり給ひ候へ。是は母御の遊ばされたる文にて候。御形見によく御持ち候へ。かよる痛はしき事こそ候はね。

ワキ詞「是は宰府の神主にて候。我此間は他所に候ひて、只今罷り歸り候。あら不思議や、あの藍染川に人の多く集まりて候は何事にて候らん。や、推量申して候。某他所に候間に網を引かすると存じ候。如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「あの藍染川に人の多く集まりて有るは、網をばし引くか。殺生禁斷の所にてあるに、急いで皆々上れと申し付け候へ。トモ詞「畏つて候。やあく、神主殿の御出でにてあるぞ。網をばし引くか。殺生禁斷の所にてあるぞ、急いで皆々上り候へ。何と人の身を投げたると申すか。や、左近の尉にて渡り候か、これへ神主殿の御出でにて候、急ぎ御参りあつて、この謂を御申し候へ。ツレ詞「心得申し候。トモ詞「いかに申し上げ候。網にてはなく候。人の身を投げたる由

是は云々遺言
状の文言

申し候。あれに左近の尉が候ひて、謂れを申し上げうずると是へ参りて候。ワキ詞「いかに左近の尉、身を投げたると申すはいかやうなる者ぞ。ツレ詞「さん候都より女性の、人を尋ねて下り候が、逢はぬを恨みて身を投げたる由申し候。ワキ詞「言語道斷。都よりはるばる下りたるに、逢はぬは不得心なる者にてあるよな。あれなる幼き者はいかやうなる者にてあるぞ。ツレ詞「あれは彼の者の子にて候。ワキ詞「手に持ちたるは文にてあるか。ツレ詞「さん候文にて候。ワキ詞「そと見たき由申して取りて来り候へ。ツレ詞「畏つて候。なうその文をそと人の御覽せられたき由仰せ候。給はり候へ。子詞「いや是は母御の御形見にて候程に、参らせ候まじ。ツレ詞「そと御覽じてやがて返し申されうずるにて候。此方へ給はり候へ。文を取りて参りて候。ワキ詞「是は梅千代が方へ書き置き候。憂き身はもとより捨妻の、きぬぐなれば恨みもなし。いかに情知らずとも、子に知れぬ親の候べきか。いひかひなくは出家になし、扶持し給はど草の蔭にて、守りの神となるべきなり。大内にありし時は梅壺の侍従、一條今出川の御留主、當所の御名は知らねども、御在京

御姿にては—清淨なる神官の身に死人に近づくは懼りありとの意

の御時は、中務頼澄宰府の神主や、言語道斷の次第にて候ものかな、今まではよその事とこそ存じて候に、かよる不思議なる事こそ候はね。あの幼き者を此方へ連れて來り候へ。ツレ詞「畏つて候。如何に申し候。神主殿の物仰せられうすると仰せ候。此方へ御出で候へ。ワキ詞「あら不便の者や。さて眞の父に逢ひたくはなきか、子詞かほどに情ましまさば、諸父に逢はせてたび給へ。ワキ詞「實にくは是は理なりと、名乗らんとすれば涙に咽び、子詞「目もくれ心、ワキ詞「月影に、地詞「それと見えねど梅千代が、顔も姿も馴れし母に、違はぬ面影の、是こそ父よ無慙やな、さこそ便も嘆きの力を添へて木綿附の、取り付き髪搔撫で、よそめ思はぬ氣色かな。

ワキ詞「いかに左近の尉、あまりに彼のもの不便に候程に、そと見うずると思ふはいかに。ツレ詞「御意尤にて候さりながら、御姿にてはいかどにて御座候。ワキ詞「實にくは汝が申す如く、總じて死人を見る事はなけれども、彼者の心中餘りに不便にある間、苦しからぬ事そと一目見うずるにて有るぞ。死骸のあたりなる人をのけ候へ。ツレ詞「畏つて候。や

あやあ神主殿御出で有るぞ、皆々のき候へ。

ワキ詞「如何に申し候。さても御下り夢にも知らず候。梅千代が事は、某一跡を譲り世に立つうづるにて候。又御跡をも懇に弔うて参らせ候べし。かまへて我を恨み給ふなど、いへどもく、クセ地詞「いへども平生の顔色は、草葉の色に異ならず。芳態あらたに眠りて、眼蓋を開く事なし。嬋娟の黒髪は、亂れて草根にまとはり、婉轉たる黛は、消えて失せて面影の、亡き身の果ぞ悲しき。ワキ詞「紅顔空に消えて、地詞「華麗を失へり。飛揚の魂何處にか獨赴く、有様あはれむべし。累々たる古墳の邊、顔色終に消え失せて、郊原に朽ち果てよ、思ひや跡に残るらん。ワキ詞「いかに左近の尉、彼の者の心中餘りに不便にある間、臨時の幣帛を捧げ肝膽を碎き、彼の者の命を二度蘇生させばやと思ふは如何に。ツレ詞「實にくは是は尤にて候。ワキ詞「さらば祝詞を参らせうするにて候。ツレ詞「然るべう候。

平生の顔色は云云—以下京女の死體を形容す

ワキ詞「神主御幣おつ取つて、神前に参り跪き、既に祝詞を申しけり。イロ謹上再拜、我此

道場如帝珠、十寶三寶影現中、我身敬禮三寶前、頭面接足歸命禮、南無天滿天神、廣く
 舊里を去つて、遍く幕下を兼ねたり。明才衆に越え、明智世に勝れ、西海の西都に、安
 樂寺の地を點じて、春秋を招く。地誦や本地覺王如來、寂光の都を出でて、この太宰
 府に住み給ふ。

只頼め云々一清
 水觀音の歌宰府
 にも寺あり
 北關一朝廷

宿因一京女の前
 世の善因

後シテ誦「只頼めしめちが原のさしも草、我世の中に在らん限は。地誦「御殿頼に鳴動して、
 顯れ給ふぞ忝き。上歌昨日は北關に、昨日は北關に、悲みを蒙る身なれども、今日は西
 都に蘇さんと、生きて恨み死して歡ぶ、有難の誓や。シテ誦「抑當社と申すは、地誦「そ
 もそも當社と申すは、法性の都を出でて、分段同居の境に入つしより此方、冥々と有る
 苦海に沈み、菩提涅槃に至らず。こよに宿因内に通じて、受けがたき人身を受け、智識
 外に助け、逢ひ難き誓の春に又逢ふ事も、只是當社の神恩ぞと、悦びの祝詞を奉り、
 よろこびの祝詞を奉れば、神は上らせ給ひけり。

雲雀山

梗 概

横佩右大臣豊成の女中將姫繼母の讒言にかゝりて、雲雀山
 に捨て失はれんとせしを、乳母の侍従いたはりかしてきて
 之をばぐくみ、木草の花を里に持ち行きて賣代して暮す。
 豊成一日遊獵に出でて侍従に廻り會ひ、つひに姫を求めて、
 めでたく館に歸り入る。(四番目)

シテ 侍従(乳母) 子方 中將姫 ツレ 男
 ワキ 横佩右大臣 トモ 従者

ツレ「詞」かやうに候者は、奈良の都横佩の右大臣豊成公に仕へ申す者にて候。さても姫君を
 一人御持ち候を、さる人の讒奏により、大和紀の國の境なる、雲雀山にて失ひ申せとの
 仰せにて候程に、是まで御供申して候へども、如何にして失ひ申すべきと存じ、柴の庵
 を結びとかくいたはり申し候。さる程に侍従と申す乳母、春は木々の花を手折り、秋は
 草花を取りて里に出で、往來の人に是を代なし、彼姫君を過し申し候。今日も侍従を呼

讒奏一讒言とい
 ふべき所なり
 雲雀山一鶴山と
 も日張山とも書
 く

び出し、里へ下さばやと存じ候。如何に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ツレ詞」今日も又里へ御出で候へ。シテ詞「さらば姫君に御暇を申し候べし。ツレ詞」やがて御暇を申し里へ御出で候へ。シテ詞「如何に申すべきことの候。今日も里へ出でてやがて歸り候べし。子、サシ謡」實にや閑窓に煙絶えて、春の日いと暮し難う、シテ謡「弊室に燈消えて、秋の夜猶長し。家貧にしては親知少く、賤き身には故人疎し。親きだにも疎くなれば、下歌地謡」よそ人はいかで訪ふべき。上歌さなきだに狭き世に、さなきだに狭き世に、隠れ住む身の山深み、さらば心の有りもせで、たゞ道せばき埋れ草、露いつまでの身ならまし。露いつまでの身ならまし。かくて煙も絶えぐくの、かくて煙も絶えぐくの、光の陰も惜き間に、よその情を頼まんと、草の樞を引きたてと、又里へこそ出でにけれ。又里へこそ出でにけれ。

大臣豊成とは我がことなり。次第 謡「それ狩場は四季の遊びにて、時折節の興を増す、

櫻狩云々、後拾遺集の歌
交野―河内

天の川―同國

五月待つ云々―古今集の歌

故ある木の實を集めつゝ―垂仁天皇の朝道間守が常世の國にて橘を得來りしこと

羽束師の森―山城恥かしの意を掛く

上歌 梓の眞弓春くれば、梓の眞弓春くれば、霞む外山の櫻狩、雨は降り來ぬ同じくは、濡るとも花の木蔭に宿らん。さて又月は夜を残す、雪には明くる交野の御野、禁野につづく天の川、空にぞ雁の聲は居る、空にぞ雁の聲は居る。

シテ一聲謡 五月待つ花橘の香をかけば、昔の人の袖の香ぞする。詞實にや昔も君のため、故ある木の實を集めつゝ、常世の國まで行きしぞかし。謡 我も主君の御爲に、色ある花を手折りつゝ、葉末に結ぶ露の御身を、残しやすと思ひ草、いろくの、頃を得て、咲く卯の花の杜若、地謡 紫染むる山草の、シテ謡「色香にめでて花召れ候へ。上歌地謡」月は見ん、月には見えながらへて、月には見えながらへて、憂き世を廻る影も羽束師の、森の下草咲きにけり。花ながら刈りて賣らうよ。日頃經て、待つ日は聞かず時鳥、匂ひもとめて尋ねくる、花橘や召さるよ。花橘や召さるよ。

トモ詞「如何に尋ね申すべき事の候。その花をば何の爲に持ち給ひて候ぞ。シテ詞」さん 候是は故ある人に參らせん爲に持ちて候。いづれにても候へ色香にめでて召され候へ。謡 花

深見草、牡丹の
異名

春霞云々古今
集の歌
歎冬 賦 詠 集 春
風 一 朗 詠 集 的
又 陽 躑 躅 一 朗 詠
集 に 陽 躑 躅 的 題 に
て 夜 遊 人 欲 尋
來 把 と ある を
引 く

檻前に笑んで聲いまだ聞かず、鳥林下に鳴いて涙盡き難し。實にも盡きぬは花の種、色色なれや紅は、いづれ深百合深見草、御心寄せに召され候へとよ。トモ詞實に面白き賣物かな、さてその花を賣る事は、分きて謂れのあるやらん。シテ詞あらむつかしと御尋ねあるや。詠召されまじくは御心ぞとよ。地謡色々の、色々の、人の心は白露の、枝に霜は置くとよ、猶常磐なれや橘の、目覺草の戯れ、其方の身には何事も、包む事はなくとも、こし方なれや、古をも、忍草を召されよや、忍草を召されよや。シテ詞あさもよい、地謡あさもよい、紀の關守が手束弓、いるさか歸るさか、何れにてもまませ。などや、花は召されぬ。あら花好かずの人々や。花好かぬ人ぞをかしき。
トモ詞「さらばこの花を買ひ取り候べし。又御身の來しかたを懇に御物語り候へ。シテ詞春霞、立つを見捨てて行く雁は、地謡花なき里に住みや習へると、心そらなる疑ひかな。シテ、サシ詠歎冬あやまつて暮春の風に綻び、地謡又躑躅は夜遊の人の折を得て、驚く春の夢の内、胡蝶の遊び色香にめでしも、皆是心の花ならずや。シテ詠實に面白き遊花の友、

櫻色に云々拾
遺集の歌

鴟の草ぐき草
くまりの意
遠近の古今集
の歌末句呼子鳥
かな

地謡「春の心や惜しむらん。さ思へ櫻色に、染めし袂の惜しければ、衣更へ憂き、今日にぞ有りける。そのみかいつしかに、春を隔つる杜若、いつ唐衣遙々の、面影残るかほよ鳥の、鳴きうつる聲まで、身の上に聞くあはれさよ。斯くてぞ花にめで、鳥を羨む人心、思ひの露も深見草の茂みの花衣、野を分け山に出で入れども、さらに人は白玉の、思は内にあれど、色になどや顯はれぬ。シテ詠さるにても、馴れしまよにていつしかに、地謡今は昔に奈良坂や、兒の手柏の二面、ともかくにも故郷の、よそめになりて葛城や、高間の山の嶺續き、ことに紀の路の境なる、雲雀山に隠れ居て、霞の網にかより、目路もなき谷蔭の、鴟の草ぐきならぬ身の、露に置かれ雨に打たれ、斯くても消えやらぬ、御身の果ぞ痛はしき。遠近の、(中ノ舞)シテ詠遠近のたづきも知らぬ山中に、覺束なくも呼子鳥の、雲雀山にや待ち給ふらん。いざや歸らん。いざや歸らん。
ワキ詞「やあ如何におことは乳母の侍従にてはなきか。豊成をば見忘れてあるか。さてもわが姫よしなき者の讒奏により失ひしかども、科なき由を聞き後悔すれども叶はず、まこ

人のかごと一謡
誣のこと

とやおことが計ひとして、この雲雀山の谷蔭に、柴の庵を結び隠し置きたるとは聞きしかども眞しからぬ所に、今御事を見てこそさてはと思へ、姫は何くにあるぞ包ます申し候へ。シテ詞「是は仰せとも覺えぬものかな。謠人のかごとを御用ひありて、失ひ給ひし中將姫の、何しに此世にましますべき、如何に御尋ねありとて、地謡「今は御身も夏草の、茂みに交る姫百合の、知られぬ御身なり。何をか尋ね給ふらん。

諸天一夫は佛神

ワキ詞「實にく夫はさる事なれども、先非を悔ゆる父が心、涙の色にも見ゆらんものを、はや在所を申すべし。シテ詞「まことさやうに思召すか。ワキ「なかく諸天氏の神も、正に照覽あるべきなり。シテ謡「さらば此方へ御出であれと、其處とも知らぬ雲雀山の、草木を分けて谷蔭の、栞を道に足引の、地謡「山懐の空木に、草を結び草を敷きて、四鳥の罫に親と子の、思はず歸り逢ひながら、互に見忘れて、只泣くのみ心かな。實にや世の中は、定なきこそ定なれ、夢ならば覺めぬ間に、早疾くくと有りしかば、乳母御手を引き立てよ、御輿に乗せ參らせて、御悦びの歸るさに、奈良の都の八重櫻、咲きかへる

道ぞめでたき、咲きかへる道ぞめでたき。

外六

住吉詣

梗 概

光源氏住吉神社へ参詣あり。折から又明石上播磨より舟にて上り、こゝに詣で、思はざるに再び對面あり。頗る美しき能がらなり。明石上は明石入道の女にて、源氏が須磨へ留りし頃、契りしことは明石の巻にあり。その腹に姫君生るゝこと、滯標の巻に見え、後母の尼姫君共に都に移り住む事は松風の巻に載せたり。(三番目)

シテ 明石上 ツレ女 侍女 ツレ男 源氏の君
ツレ男 惟光 子 方 童隨身 ワ キ 住吉神主

さる宿願の子細
一須磨へ左遷の
折歸洛を祈りし
御禮参り

ワキ詞「是は攝州住吉の神主、菊園の何某にて候。さてもこの頃都に於て譽並びなき光源氏、さる宿願の子細あつて、當社御参詣と仰せ出だされ候程に、社人どもを召し出だ

し社内をも清め、その心得をなすべき由申し付けばやと存じ候。

立衆一聲誦小車の、轆も續く都路の、直に治まる時世かな。惟光誦そもく、是は譽世に越え威光曇らぬ光源氏にておはします。さてもこの君頼みをかけし、住吉の神に所願を満てんと、立衆誦今日思ひ立つ旅衣、薄き日影も白鳥の、鳥羽の戀塚秋の山、過ぐればいとど都の月の、面影隔つる山崎や、關戸の宿も移り來ぬ。下歌拂はぬ塵の芥川、猪名の笹原分け過ぎて、上歌見渡せば、薄霧まがふそなたより、薄霧まがふそなたより、ほの見えそむるむら紅葉、之や交野に狩り暮れて、春見し花のそれならん。猶行く先は渡邊や、大江の岸に寄る波も、音立かへて住吉の、浦わになるも程ぞなき、浦わになるも程ぞなき。源氏、サシ誦聞きしに超えていよく有難き、神の誓も潔き、浦わの波の瑞籬の、久しき御代を守り給へ、地誦日の本の、神の誓はおしなめて、神の誓はおしなめて、和光同塵は、結縁の御始、八相成道は利物の、果しなきまで國富み、民を憐む御心を、誰かは仰がざるべき。誰かは仰がざるべき。

和光同塵云々
天台止觀の語を
引く

河原の大臣―左大臣源融

我見ても云々―伊勢物語の歌

ワキ詞「只今の御参詣めでたう候。惟光詞「さあらば祝詞を参らせられ候へ。ツキ謡「いでく祝詞を申さんと、神主御幣を捧げつと、既に祝詞を申しけり。謹上再拜、敬つて白す神慮すどしめの神樂、八人の八少女五人の神樂男、颯々の鈴の音、ていとうの鼓の聲々に、うたふ榊葉の神歌、幾久方の天地開闢、泰平諸人快樂、福壽圓滿に守らしめ給へや。そもそも立つる所の、諸願成就皆令満足有難や。地謡「來方の、御願に猶も打添へて、御願に猶も打添へて、さも有難き神慮の、納受もかくやと、感涙肝に銘じけり。いよく、歡びの御盃、神主に給ひければ、折節御供に、河原の大臣の御例とて、内より賜はれる。童隨身その時に、御酌に立ちて慰めの、今様朗詠す。

子方謡「一樹の陰や一河の水、地謡「皆是他生の縁といふ、白拍子をぞかなでける。(中ノ舞) 子方謡「我見ても、久しくなりぬ住吉の、地謡「岸の姫松幾世へぬらん。千代萬代の舞の袂、千代萬代の舞の袂、いよく廻る盃の、有明になる沖つ舟の、ほのく明くる住吉の、浦より遠の淡路島、あはれ果なき詠めかな。あはれ果なき詠めかな。

關―須磨の關をさす 津守の浦―住吉の岸

玉禪―掛けにづく枕詞

二人一壁謡「明石瀉、月まつ方に行く舟の、波靜なる浦傳ひ、上歌地謡「舟出せし、後の山の山風、後の山の山風、關吹き越えて行く程に、須磨の浦わもいつしかに、跡の名残もおしてるや、難波入江に寄するなる、波はさながら白雪の、津守の浦に著きにけり。津守の浦に著きにけり。

ツレ女謡「松原の深緑なる木陰より、花紅葉を散らせる如くなる、色の衣々數々に、のよしりて詣づる人影は、いかなる人にて有るやらん。惟光謡「是は都に光君、過ぎにし須磨の御願はたしに、詣で給ふといさ知らぬ、人もありける不思議さよ。シテ謡「あら恥しや光君と、聞くより胸打騒ぎつと、いとど心も上の空の、惟光謡「月日こそあれ今日この頃、詣で來んとは、シテ謡「白露の、地謡「玉禪、掛けも離れぬ宿世とは、掛けも離れぬ宿世とは、思ひながらもなかくに、この有様を、よその見る目も恥しや。さりとは浦波の、歸らば中空に、ならんも憂しやよしさらば、難波の瀉に舟とめて、祓たに白波の、入江に舟をさし寄する。

よそに調の中の緒の源氏の歌に「あふまてのかたみに契る中の緒の調はことにかはらざるな」源氏が明石上と別るるとき形見に琴をせしをいふ
忘れ草一昔より住吉の浦につけて詠む
身をづくし云々一源氏の歌
數ならで云々一明石上の返歌
牛の車一名残も憂しと續く
はのく」と一人磨の歌を引く

ロンギ地謡「不思議やな、有りし明石の浦波の、立ちも歸らぬ面影の、それかあらぬか舟影の、忍ぶもぢずり誰やらん。シテ謡「誰ぞとは、よそに調の中の緒の、其音違はず逢ひ見んの、頼めを早く住吉の、岸に生ふてふ草ならん。源氏謡「忘れ草、忘れ草、生ふとだに聞く物ならば、そのかね言もあらじかし。地謡「實になほざりに頼め置く、その一言も今は早や、源氏謡「有りし契の縁あらば、地謡「やがての逢ふ瀬も程あらじの、心は互に、變らぬ影も盃の、度重なれば惟光も、惟光謡「傳御酌をとりぐの、地謡「醉に引かるゝ戯れの舞、おもはゆながらも移り舞。(中ノ舞)シテ謡「身をづくし、戀ふるしるしにこよまでも、地謡「廻り逢ひける縁は深しな。シテ謡「數ならで、なにはの事もかひなきに、何身をつくし思ひそめけん。互の心を夕汐満ち来て、地謡「入江の田鶴も聲惜しまぬ程、あはれなる折から、人目も包まず、逢ひ見まほしくは思へども、早漕ぎ離れて、行く袖の露けさも、昔に似たる旅衣、田蓑の島も遠ざかるまよに、名残も牛の車にめされて、上れば下るや稻舟の、舟影もほのくと明石の浦わの、舟をし思ひの別れかな。

谷行

梗 概

帥阿闍梨の弟子松若、病める母の祈のために師に同行して峯人をなし、途中病を得、山伏の大法谷行に行はれて、山谷に捨てられしが、師も之を悲しみ嘆きしに、一同途に行者の功力にて蘇生せしむ。一つには松若の孝行、鬼神を感じしめしなりとの筋。(五番目)

前シテ 母 後シテ 鬼神
子方 松若 ワキ 帥阿闍梨 ツレ 同行山伏

今熊野一京都にあり
峯入一深山に入りて修行することにて葛城に登ることを大峯入といふ

ワキ「是は今熊野柳の木坊に、帥の阿闍梨と申す山伏にて候。さても某弟子を一人持ちて候が、彼の者の父空くなり、母ばかりに添ひて候。また某は近き間に峯入を仕り候程に、暇乞の爲に只今出京、仕り候。いかに案内申し候、子方「誰にて御入り候ぞ、や、師匠の御出でて候よ。ワキ「如何に松若、何とて久く寺へは上りたまひ候はぬぞ。子方「さん候、母御の風の心地にて候程に参らず候。ワキ「言語道断、ゆめくさやうの事

難行捨身―身を捨て難行苦行すること

をも存ぜず候。まづ、某が参りたる由御申し候へ。子詞「如何に申し候。師匠の御出でて候。シテ詞「此方へと申し候へ。子詞「こなたへ御入り候へ。ワキ詞「久く参らず候。又松若申され候は、風の心地の由承り候。如何様に御座候ぞ。シテ詞「風の心地ははや苦しからず候。御心安く思召され候へ。ワキ詞「さてはめでたう候。又近き間に峯入を仕り候程に、御暇乞の爲に参りて候。シテ詞「實にく、峯入とやらんは、大事の行とこそ承りて候へ。さて松若も御供にて候か。ワキ詞「幼き者の供すべき道にてはなく候。シテ詞「さてはめでたうやがて御歸り候へ。ワキ詞「さらばやがて参らうするにて候。子詞「いかに申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。子詞「松若も峯入の御供申さうするにて候。ワキ詞「いや、只今も母御に申し候如く、此道は難行捨身の行體にて、思ひもよらぬ事にてあるぞ。その上母の風の心地を見捨つべきにあらず。かたぐ、思ひもよらぬ事、只止り候へ。子詞「いや母の風の心地にて候へば、御祈りの爲に参らうするにて候。ワキ詞「さあらばこの由を母御に申さうするにて候。又参りて候。松若峯入の供せうする由申され候間、母御の風の御心地

父にあくれ―父に死別れたること

足引の―山にかかると枕詞を大和につとくよそに見る―新古今集の歌末句峯の白雲

と云ひ、難行捨身の道と申し、かたぐ、叶ふまじき由申して候へば、御祈りの爲に供すべき由申され候。如何か候べき。シテ詞「仰せ承り候。まづは松若申す如く、峯入の御供申さん事こそ、最も望む所なれども、諸御身の父に後れし日より、只獨子のひたすらに、身に添ふ時だに見ぬ隙は、露程だにも忘れず、思ふ心を思へかし、只思ひ止り候へ。子詞「仰せはさる事にて候へども、諸身は難行の道に出でて、母の現世を祈らんと、思ひ立ちたるばかりなりと、地謡「かきくどきたるその氣色、師匠も母も諸共に、あはれ孝行の、深きや涙なるらん。ロンギ、シテ詞「この上なれば力なし。さらば師匠の御供して、疾く、歸り給へや。子詞「歸るさの、心をとめて出づる日も、やがて急ぐや足引の、大和路遠き思ひかな。シテ詞「思ひを盡す手向には、子詞「つどりの袖も切るべきに、地謡「別れはさまぐの、行末知ればよそにのみ、見てや止みなん葛城や、高間の山の峯の雲、晴れぬは親の思ひ子の、名残惜しさをいかにせん、名残惜しさをいかにせん。(中入)

こは誰が木幡を掛け拾遺集の山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ来る君を思へばの歌を引く
都出て云々古今集に「都出て今日みかの原泉川河風集し衣かせ山」

ワヤ、サシ謡かくて小童思ひの外、峯入の姿山伏の、兜巾篠懸苔の衣、上歌山伏謡今日思ひ立つ道のへの、今日思ひ立つ道のへの、たよりぞ深き志、只孝行の神力に、馬はあれども徒歩に行く、こは誰が爲ぞ宇治の里、都出で、今日みかの原泉川、河風さむみ千鳥鳴く、聲こそ今日の夕なれ。聲こそ今日の夕なれ。ふりさけ見れば春日なる、ふりさけ見れば春日なる、三笠の山をさし過ぎて、布留の神杉過ぎがてに、三輪の山本よそに見て、たれ我庵と定めけん、峯の巖の苔衣、かたしきそむる葛城の、露こそ宿りなりけれ。露こそ宿りなりけれ。

ワヤ詞「急ぎ候程に、是は早一の室に著きて候。暫く是にあらうするにて候。小先達詞「承り候。子詞「いかに申すべき事の候。ワヤ詞「何事にて候ぞ。子詞「道より風の心地にて候。ワヤ詞「暫く、此道に出でてさやうの事をば申さぬ事にて候。それは習はぬ旅の疲にて有るべし、よくく休み候へ。

小先達詞「松若殿道より風の心地の由承り候。先達に尋ね申さうするにて候。山伏詞「尤

谷行一同行者に病人あれば谷に陥るること

違例一病氣

にて候。小先達詞「松若殿風の心地と承り候は、何と御座候ぞ御心もとなく候。ワヤ詞「さん候。是はならはぬ旅の疲れにてありけに候。苦しからず候。小先達詞「さては御心安く候。ツレ詞「いかにかたぐへ申し候。松若殿旅の疲れの由仰せられ候が、以ての外に見え給ひて候。何とて大法の如く谷行に行ひ給ひ候はぬぞ。小先達詞「實にくは是は尤にて候。さらば先達へ其由申さうするにて候。如何に申し候。先に松若殿の御事を尋ね申して候へば、旅の疲れと承り候が、今ははや以ての外に見えさせ給ひて候。憚り多き申し事にて候へども、昔よりの大法にて候へば、谷行に行ひ申さうするよし皆々申され候。ワヤ詞「何と松若を谷行に行はれうすると候や。小先達詞「さん候。ワヤ詞「大法の事にて候程に、是非をば申さず候さりながら、彼の者の心中あまりに不便に候へば、大法の由を懇に申し聞かせうするにて候。小先達詞「尤にて候。ワヤ詞「如何に松若たしかに聞け。この道に出でてかやうに違例する者をば、谷行とて忽ち命を失ふ事、是れ昔よりの大法なり。謠御身にかはるものならば、何か命の惜しから

ん、進退谷りて候。子詞「仰せ承り候。この道に出でて命を捨てん事こそ、最も望む所なれども、謠母の御歎きの色、それこそ深き悲しみなれ。又かりそめも他生の縁、皆人々に御名残こそ惜しう候へ。地謠「何といひやる方もなく、皆聲をあけ涙に咽ぶ心ぞ哀なる。」

冥見「神明の見給ふこと

山伏「サシ謠」かくて面々一同に、あはれ悲しき世の習ひ、ことさら是は大法の、冥見私なきまよに、谷行にこそ行ひけれ。ワキ謠「先達も師弟の契の中なれば、何といひやる方もなく、只くれくと目もあやなく、上歌地謠「泣く涙、せかれぬ道なれば、身も諸共にともかくも、ならばやと思ふさへ、叶はぬ事ぞ悲き。悲しみの、至りて悲しきは、生別離の心なり。なかく死別ならば、かほどの歎きよもあらじ。クセ一切有爲の世の習ひ、如夢幻泡影如露亦如電、應作如是觀の心をも、思ひ知らずやさしもこの、行者の道には出でながら、火宅の門を去りやらで、猶安からぬ三界の、親子恩愛の、歎きに等しかりけり。小先達謠「かくて時刻も移るとて、地謠「皆面々に思ひ切り、邪見の劍身を砕く、心をなして

如夢幻云々一金剛般若經の文

彼の人を、嶮しき谷に陥れ、上に被ふや石瓦、雨壞を動かせる、心を痛め聲を上げ、皆面々に泣き居たり。皆面々に泣き居たり。

小先達詞「早日のたけて候。急ぎ御立あらうするにて候。ワキ詞「愚僧は罷り立つまじく候。

小先達詞「先達の御立ちなく候ひては、我々はなにと仕り候べき、只急いで御立ち候へ。ワキ詞「まづ案じても御覽候へ、我等都に上り、彼の者の母には何と申すべきぞ。所詮病氣

も歎も同じ事にて候へば、我等をも谷行に行ひて給はり候へ。小先達詞「御歎き尤にて候。

如何にかたぐへ申し候。先達の仰せ候は、病氣も歎きも同じ事なれば、先達も谷行に行ひ申せと仰せ候、さて何と仕り候べき。ツレ詞「實にく御歎き尤にて候。我々存じ候

は、この年月の行徳もかやうの時にてこそ候へ。開山役の優婆塞、並びに大聖不動明王の索にかけ、松若殿の御命を再び蘇生させ申さうするにて候。小先達詞「是は尤もにて候。

如何に申し候。皆々申され候は、此年月の行徳もかやうの時にてこそ候へ、開山役の優婆塞、殊には大聖不動明王の索にかけ、松若殿の御命を蘇生させ申さうする由皆々申さ

開山一葛城山を開きしは役小角なり

伎樂一吳の音楽
その男神女神を
小角の部下に従
ふ

岩橋一小角鬼神
を使ひて岩橋を
かけしこと上巻
葛城を見よ

れ候。ワキ詞「さやうの事こそ聞かまほしう候へ。我等も是にて祈念申さうするにて候。
ツレ山伏譚「さても師匠のその歎、理過ぐる有様を、見聞くも同じ心かな。ワキ譚「さりととも
年月頼みをかくる、大聖不動明王の威力、ツレ譚「又は山神護王善神、ワキ譚「殊には開山役の
優婆塞、ツレ譚「哀感納受垂れ給ひ、地譚「使者の鬼神の伎樂伎女を、遣し助けおはしませ。
地譚「伎樂鬼神は飛び來り、伎樂鬼神は飛び來つて、行者の御前に跪いて、頭を傾け仰
せを受けて、谷行に飛び翔つて、上に蓋へる土木磐石、押倒し取拂つて、上なる土をば
やはらくと、静かにかへして彼小童を、つよがもなく抱きあげ、行者の御前に參らす
れば、行者は喜悅の色をなし、慈悲の御手に髪を撫で、善哉々々孝行切なる、心感す
るぞとて、歸らせたまへば伎樂も共に、御先を拂つてさかしき路を、分けつくどりつ上
るや高間の、雲霧つたふや葛城の、人の目にこそかよらざれども、まことは渡せる岩橋
を、大峯かけて遙々と、虚空を渡つて失せにけり。

半部

梗概

源氏物語夕顔の巻に、夕顔上といふ女の光源氏に契りし物
語あり之を本據として作りたるは、上巻所收の夕顔なり。
夕顔にてはその幽霊をして昔語をなさしめたるが、此曲は
僧が立花供養をなす事よりして、花の精を出し、以て夕顔上
の物語に及ぼしめたる也。(鬘物)

シテ、夕顔の精(前は女) ワキ僧

ワキ詞「是は都紫野雲林院に住まひする僧にて候。扱も我一夏の間花を立て候。早安居
も過ぎ方になり候へば、色よき花を集め、花の供養を取り行はばやと存じ候。敬つて白
す、立花供養の事、右非情草木たりといへども、此花廣林に開けたり、豈心無しとい
はんや、就中泥を出でし蓮、一乗妙典の題目たり。この結縁に引かれ、草木國土悉皆成
佛道。

安居一夏季九十
日間禁足修行す
ること

手に取れば云々
後撰集遍照の
歌
白き花の云々
源氏物語夕顔の
巻の語
名は人めきて
夕顔の巻に花の
名は人めきてか
うあやしき垣根
になん咲き侍り
ける云々の語に
據る

空目せし間
光ありと見し
夕顔の上は黄
昏時の空目なり
けりといふ夕
顔上の歌による
瓢箪 虚空草 深
顔淵 卷 藜 深

手に取ればたぶさに穢る立てながら、三世の佛に花奉る。ワキ詞「不思議やな今ま
では、草花りよようとして見えつる中に、白き花のおのれ獨り笑の眉を開けたるは、如
何なる花を立てけるぞ。シテ誦 愚の御僧の仰せやな。黄昏時の折なるに、などかはそれと
御覽ぜざる。さりながら名は人めきて賤しき垣ほにかよりたれば、知ろしめさぬは理
なり。是は夕顔の花にて候。ワキ誦 實にくさごと夕顔の、花の主は如何なる人ぞ。
シテ詞「名のらずと終には知ろし召さるべし、我は此花の蔭より参りたり。ワキ誦さてはこ
の世に無き人の、花の供養に逢はんためか、それに付けても名のり給へ。シテ詞「名は有り
ながら亡き跡に、なりし昔の物語、ワキ誦 何某の院にも、シテ誦 常はさむらふ眞には、
上歌地誦 五條あたりと夕顔の、五條あたりと夕顔の、空目せし間に夢となり、面影ばかり
亡き跡の、立花の蔭に隠れけり。立花の蔭に隠れけり。(中入)
ワキ誦 有りし教に随つて、五條あたりに来て見れば、實にも昔の居まし所、さながら宿り
も夕顔の、瓢箪しばく空し、草顔淵が巻に滋し。

備雨原憲之
句

山の端の夕顔
上の歌末句影や
たえなん
山賤の云々夕
顔上が頭中將に
むくりし歌

後シテ一聲誦「藜藿深く鎖せり、夕陽の残晴新に窓を穿つて去る。地誦「愁嘆の泉の聲、
シテ誦 雨原憲が樞を濕す。下歌地誦「さらでも袖を濕すは、廬山の雪の曙。上歌 窓頭に向ふ朗
月は、窓頭に向ふ朗月は、琴瑟に當り、愁傷の秋の山、物すこの氣色や。
ロンギ地誦 實に物凄き風の音、實戸の竹垣有りし世の、夢の姿を見せ給へ、菩提を深く弔
はん。シテ誦 山の端の、心も知らで行く月は、上の空にて絶えし跡の、又いつか逢ふべき。
地誦「山賤の、垣穂荒るとも折々は、シテ誦 哀をかけよ撫子の、地誦 花の姿をまみえなば、
シテ誦 跡訪ふべきか、地誦「なかくくに、シテ誦「さらばと思ひ夕顔の、地誦「草の半部押上げ
て、立ち出づる御姿、見るに涙の止まらず。
クセ地誦「その頃源氏の中將と聞えしは、この夕顔の草枕、たゞ假臥の夜もすがら、隣を聞
けばみよし野や、御嶽精進の御聲にて、南無當來導師、彌勒佛とぞ稱へける。今も尊き
御供養に、その時の思ひ出でられて、そとろに濡ると袂かな。猶それよりも忘れぬは、
源氏この宿を、見そめ給ひし夕つ方、惟光を招き寄せ、あの花折れと宣へば、白き扇

打渡す古今集
旋頭歌に「打渡す
遠方人に物申す
我そのそこに
白く咲けるは何
の花ぞも」

の、つまいたうこがしたりしに、この花を折りて参らす。シテ源氏つくぐと御覽じ
て、地鷲打渡す、遠方人に問ふとても、それその花と答へずは、終に知らでもあるべき
に、逢ひに扇を手に觸ると、契の程のうれしさ、折々尋ね寄るならば、定めぬ海士のこ
の宿の、主を誰と白波の、よるべの末を頼まんと、一首を詠じおはします。折りてこそ、
(序ノ舞) シテ鷲折りてこそ、それかとも見め黄昏に、地鷲ほのく見えし、花の夕顔、花
の夕顔、花の夕顔、シテ鷲終の宿りは知らせ申しつ、地鷲常にはとむらひ、シテ鷲おはしま
せと、地鷲木綿附の鳥の音、シテ鷲鐘もしきりに、地鷲告げ渡る東雲、あさまにもなりぬ
べし、明けぬ先にと夕顔の宿り、明けぬ先にと夕顔の宿りの、又半部の内に入りて、そ
のまよ夢とぞなりにける。

禪師曾我

梗 概

鬼王團三郎の兄弟祐成時致二人の形見を、母の許に持歸る
事を前段とす。夜討曾我と併せ見るべし。後段には二人
の弟に九上の禪師とて伊藤祐宗の養子にて出家せるがあ
り、それを鎌倉殿の命にて討取らんとて、助宗、禪師の許に押寄
せ、遂に生捕にして鎌倉へ上すことを作れり。(四番目)

シテ 九上禪師 ツレ 團三郎 ツレ 鬼王
ツレ 曾我兄弟の母 ワキ 伊藤祐宗 ワキツレ 同従兵

散りにし花一會
我兄弟の討たれ
しことを譬ふ
井手の館一工藤
祐經の陣屋

ツレ次第語散りにし花の名残には、散りにし花の名残には、香ばかり送る嵐かな。團三郎「是
は曾我兄弟の人々に仕へ申す鬼王團三郎にて候。さても兄弟の人々は、過ぎにし二十八
日の夜、井手の館に忍び入り、やすくと敵を討ち、その身も即座に討たれ給ひて候。
我等兄弟も御供申し候へども、形見の品々を持ちて、故郷へ下れとの御事にて候程に、
かひなき命助かり、御形見を持ち、只今故郷へ下り候。道行語使の泣きて歸りしは、使の

泣きて歸りしは、花を見捨つるかりがね。それは越路に歸る山、是は名高き富士の嶺の、
煙見えたる東屋に、歸りかねたる心かな、歸りかねたる心かな。

團三郎「急ぎ候程に、是は早會我の里に著きて候。先々案内を申さうするにて候。如何に
案内申し候。鬼王團三郎が参りたる由それく御申し候へ。母「何鬼王團三郎と申す

か、人までも有るまじ此方へ來り候へ。さて只今は何の爲に來りたるぞ。團三郎「さん候
面目もなき御使に参りて候。母「面目もなき使とは、如何なる事にて有るやらん。

團三郎「過ぎにし二十八日の夜、井手の館へ忍び入り、やすくと敵を討ち、御身も即座
に討たれ給ひて候。又御形見の物を持ちて参りて候。是々御覽候へ。母「祐經を討つ程

なれば、何とて落ち延びざりけるぞ。敵を討つは父がため、母をば思はぬ子供形見恨
めしや。鬼王「實にく御歎き尤もにて候。まづ箱根へ人を御登せ候へ。母「箱根へと聞け

ば思ひ出だしたり。まづく九上の寺へ参り候へ。團三郎「實にく禪師の御事よなう。
たとひ御身は捨人なりとも、母「如何なる目をも、團三郎「水莖の、地謡「筆の立てども覺

水莖の筆跡の
事、見るを掛く

百座の護摩護
摩の祈禱を百度
すること

えねば、涙ながらにかきくれて、九上の寺に送りけり。九上の寺に送りけり。(申入)

シテ「是は九上の禪師にて候。我此間別行の子細の候間、百座の護摩を焼かばやと存
じ候。

立衆一聲「藤波の、かよれる木々の梢をば、嵐や寄せて散らすらん。ワキ「是は伊藤の九郎
祐宗なり。さても過ぎにし二十八日の夜、會我兄弟の者、井手の館に忍び入り、親の敵

を討ち、その身も即座に討たれて候。その弟に九上の禪師と申して候を、幼少の時よ
り某養子として出家させ申し候を、如何なる者の申し候やらん、君聞召し及ばせ給ひ、

急ぎ搦め捕つて参らせよとの御事にて候程に、只今九上の寺に押寄せ候。是は早九上の
寺にて候。まづく案内を請はうするにて候。如何に案内申し候。伊藤の九郎祐宗が参

りたり、急いで門を開き候へ。シテ「祐宗は何のために御出でにて候ぞ。ワキ「鎌倉殿より
搦め捕つて参れとの御事なり。疾うく出で候へ。シテ「や、祐宗は某が討手のためな。

よし、尋常に討死し、御名を揚げて参らせん。諸抑「是は河津の三郎が末の子に、九上

の禪師、地誦「墨染の下に忍辱の鏡、惡魔降伏の劍、三尺の長刀指しかざしたり。討つべき様こそなかりけれ。

地誦「心得給へ祐宗と、木戸を開いて切つて出づれば、手許に近づき過ぎぬ、射取れや射取れ梓弓、疋田の小三郎が進んでかよるを、長刀取り延べ、法師のきるとして袈裟がけなり。南無佛無慙やな。シテ誦「たとへば沙門の體とて、地誦「思ひゆるすも事にこそよれ、只一命の勝負をせんと、狩野の源六其外若武者、我もくとかよりけれども、禪師は騒がず打物合はせ、こよやかしこに切り立てられ、門前の外まで引退けば、是までなりと長刀投げ捨て、護摩の壇上に走り上り、御本尊に向ひて、阿毘羅吽欠につなぬかれ、禮盤の上より落ちけるを、生捕にせんとて利劍を奪ひ、鎌倉へこそ上せけれ。鎌倉へこそは上せけれ。

袈裟がけ一肩先より斜に斬る事を法師の著る袈裟と洒落て書けり
つなぬかれ一貫かれ
禮盤一祈禱の折の高産

車僧

梗 天狗來りて、車僧を覺道に引入れんとし、互に行力を比べ合ひしか、善知識なる僧にはかなはず、天狗はあら貴や恐しやと合掌して飛び去れりといふ事を作る。上卷の山姥と共に禪味有る曲なり。(五番目)

シテ 太郎坊 ワキ 車僧

ワキ次第誦「後の世かけて車僧、後の世かけて車僧、常寢の眠いつまで。上敷降り曇る、空は小倉の嶺の雪、空は小倉の嶺の雪、散るや嵯峨野の嵐山、瀧の響も聲添へて、かさなる雲の大井川、筏の床の浮枕、片敷く袖も白妙の、空も程なく廻る日の、西山本に著きにけり。西山本に著きにけり。詞「暫く此所に車を立て、四方の景色を詠めうするにて候。シテ詞「如何に車僧。ワキ詞「何事ぞ。シテ誦「浮世をば、ワキ誦「浮世をば、シテ誦「浮世をば、何とか廻る車僧、まだ輪の内に在りとこそ見れ。ワキ誦「浮世をば廻らぬ物を車僧、詞「乗りも得る

小倉一嵐山の北空は小隠しと掛く
西山一嵐山のこ

輪の内在り煩惱去りやち

して六道輪廻の中
にありとなり

べき我があらばこそ。シテ調「乗りも得るべきわがあらばこそと云ふは誰ぞ。ワキ誦「空堂風涼し。シテ調「我が名のみ高雄の山に言ひ立つる。ワキ調「人は愛宕の嶺に住むな。シテ調「さて御僧のすみかは。ワキ調「一所不住。シテ調「車は如何に。ワキ調「火宅の出車。シテ調「廻れど、ワキ調「廻らず。シテ調「押せど、ワキ調「押されず。シテ調「引くも、ワキ調「引かれぬ。シテ誦「車僧の、地誦「三界無安猶如火宅をば、出でたる三つの車僧かな。廻るも直なる道なりけり。あう、乗り得たり乗り得たり、上敷見聞く人、心空なる雲水の、心空なる雲水の、深立つ空も冷ましく、嵐も聲々に愛宕山、嶺どよむまで響き合ひて、車路は無けれども、我が住む方は愛宕山、太郎坊が庵室に、御入りあれや車僧と、呼ばはりて夕山の、黒雲に乗りて上りけり。黒雲に乗りて上りけり。(中入)

愛宕山云々一會
兩好思の歌

後シテ一聲誦「愛宕山、樞が原に雪積り、花摘む人の跡だにもなし。調「實に雪中に山路無し。さて車輪は如何に車僧、我程貴き者あらじと、慢心の心路跡無からんや。然らば無著法欲心に、引くか移るか車僧。誦「魔道にも心を寄せよ車僧。地誦「善惡二つは兩輪の如し。

行比べ一行力を
比べ合ふこと

シテ誦「佛法あれば世法あり、地誦「煩惱あれば菩提あり。シテ誦「佛あれば衆生もあり。地誦「車僧あれば、シテ誦「太郎坊の行者も有り。地誦「祈らば祈るべし、行せば行徳も、劣るまじとよ劣るまじとよ。いざ車僧行比べせん。

ワキ調「如何に汝妨ぐるとも、それには寄らじ争はじ。我はもとより不増不減。誦「あらおもしろの時節やな。シテ調「實に面白き時節ならば、雪中に車を廻らし、嵯峨野の原にいざ遊ばん。ワキ調「遊ばば遊べ糸遊の、我が心をば引かれめや。シテ調「などかは引かて有るべきと、答を振り上げ車を打つ。ワキ調「おう車を打たば行くべきか、牛を打たば行くべしや。シテ調「實にく、車は心無し。さて牛を打たんも、有らばこそ。ワキ調「愚や汝人牛の道見えたる牛をばなど打たぬ。シテ調「見えたる牛とはさて如何に、そも人牛は、ワキ調「打つとも行かじ。シテ調「さて御僧の打たば行くべきか。ワキ調「なかくの事。いでくさらば露地の白牛を打つて見せんと、誦「拂子を上げて虚空を打てば、地誦「不思議やなこの車の、不思議やなこの車の、ゆるぎ廻りて今までは、足弱車と見えつるが、牛も無く人も引かぬに、や

雪山一釋迦の修
行せし所

すやすと遣りかけて、飛ぶ車とぞなりたりける。
ロンギ地謡「小車の、山の陰野の道すがら、法の道の邊遊行して、貴賤の利益なすとかや。
シテ謡「所から、こよは浮世の嵯峨なれや、雪の古道跡深き、車の轍に足引の、大雪には
よも行かじ。地謡「實に雪山の道なりと、法の車路平かに、シテ謡「行くか行かぬかこの原の、
地謡「草の小車雨添へて、シテ謡「打てども行かず、地謡「止むれば進む、シテ謡「この車の、
地謡「法の力とて、嵯峨小倉大井嵐の、山河を飛び翔つて、眩惑すれども騒がばこそ、誠
に奇特の車僧かな、あら貴や恐しやと、魔性を和らけ大天狗は、合掌してこそ失せに
けれ。

外七

吉野天人

梗 都の人吉野の花見に行きしに、天つ少女現れて、舞樂を奏せ
概 し事を作る。優麗なる能なり。(三番目)

シテ 天人(前は里女) ワキ 都人

三人次第 花の雲路をしるべにて、花の雲路をしるべにて、吉野の奥を尋ねん。ワキ「これ
は都方に住居するものにて候。さても我春になり候へば、こよかしこの花を二見仕り候。
中にも千本の櫻を年々に詠め候。この千本の櫻は、みよし野の種取し花と承り及び候
間、若き人々をも伴なひ、此度は和州に下向仕り候。道行謡「この春は、殊に櫻の花心殊に
櫻の花心、色香に染むや深緑、糸よりかけて青柳の、露も亂るよ春雨の、夜ふりけるか

糸よりかけて一
古今集道昭の歌

外七 吉野天人

に「青柳の絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」

花色の、朝じめりして氣色立つ、吉野の山に著きにけり。吉野の山に著きにけり。シテ詞「急ぎ候程に、是ははや吉野の山に著きて候。御覽候へ峯も尾上も花にて候。猶々奥深く分け入らばやと思ひ候。

シテ詞「なうくあれなる人々は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候。是は都の者にて候が、このみよし野の花を承り及び、始めてこの山に分け入りて候。又見申せばやごとなき御姿なるが、この山中に入らせ給ふは、如何なる人にてわたり候ぞ。シテ詞「是はこのあたりに住む者なるが、春立つ山に日を送り、さながら花を友として、山野に暮らすばかりなり。ワキ詞「實にく花の友人は、他生の縁と言ひながら、我等も同じその心、シテ詞「所も山路の、ワキ詞「友なれや。上歌地謡「見もせぬ人や花の友、見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花の陰に、相宿りして諸人の、いつしか馴れて花衣の、袖觸れて木の本に、立ちよりいざや眺めん。實にや花の下に、歸らん事を忘るゝは、美景によりて花心、馴れく初めて眺めん。いざく馴れて眺めん。

花下白氏文集の句

五節の舞十一月に行はるる公事、舞姫は五人なり、此起りは昔天武天皇吉野の宮にまししくし時琴をひき給ひしに天女降り羽衣の袖を五たび返して舞ひ奏てし故事なり

ワキ詞「如何に申すべき事の候。かやうに家路を忘れ花を眺め給ふ事、いよく不審にこそ候へ。シテ詞「實に御不審は御理。今は何をか包むべき、眞は我は天人なるが、花に引かれて來りたり。今宵はこゝに旅居して、信心を致し給ふならば、そのいにしへの五節の舞、小忌の衣の羽袖を返し、月の夜遊を見せ申さん。諸暫くこゝに待ち給へと、地謡「夕映匂ふ花の陰、夕映匂ふ花の陰、月の夜遊を待ち給へ。少女の姿現して、必ずこゝに來らんと、迦陵頻伽の聲ばかり、雲に残りて失せにけり、雲に残りて失せにけり。

ワキ詞「不思議や虚空に音楽聞え、異香薫じて花降り。地謡「是治まれる御代とかや。いひもあへねば雲の上、いひもあへねば雲の上、琵琶琴和琴笙箏、鉦鼓羯鼓や糸竹の聲澄み渡る春風の、天つ少女の羽袖を返し、花に戯れ舞ふとかや。(天女ノ舞) 地謡「少女は幾度君が代を、少女は幾度君が代を、撫でし巖も盡きせぬや、春の花の梢に舞ひ遊び、飛び上り飛び下る、實にも上なき君の恵、治まる國の、天つ風、雲の通ひ路吹きとづるや、少女の姿とどまる春の、霞も柵引くみよし野の、吉野の山櫻、うつろふと見えしが、

又咲く花の、雲に乗り、又咲く花の、雲に乗りて、行くへも知らずなりにける。

大佛供養

梗 平家西海へ没落の後、悪七兵衛景清は都に忍びてありしが、南都大佛供養の折から母を尋ねて春日の里に到り、對面す。母は景清の志を噂に聞き居りて、よくよく身を慎みて重ねて訪へかしてとて立別るゝを前段とす。後段には、大佛供養の場に、景清いよく頼朝を狙ひ撃たんとて現れしか、隠謀發覺して、立ち退き身を隠すといふ筋なり。(四番目)

概

シテ 悪七兵衛景清 ツレ 同母 ツレ 源頼朝
 ツレ 從者 ワキ 從者

シテ次第論 忘れは草の名に聞きて、忘れは草の名に聞きて、忍ぶや我が身なるらん。詞是は平家の侍、悪七兵衛景清にて候。我この間は西國の方に候ひしが、宿願の子細あるに、より、この程罷り上り清水に二七日參籠申して候。又承り候へば、南都大佛供養の由申し候。某も若草邊に母を一人持ちて候程に、かやうの折節貴賤に紛れ、向顔のため只今

大佛供養—東大寺の大佛は治承四年平重衡のため焼かれたる

を源頼朝後白河
法皇の院宣にて
建久六年三月十
二日再建す
向顔一面會

帶木一母を掛く

南都へと急ぎ候。サシ誦あはれや實に古へは、さしも榮えし花紅葉の、壽永の秋の如何なれば、思はぬ風に誘はれて、さしも馴れにし都の空、引きかへ鄙の憂き住まひ、下歌繫がぬ船のかひもなく、弓矢の家に生まれ来て、上歌三笠の森の陰頼む、三笠の森の陰頼む、その帶木のながらへて、いまだこの世の御住居、神も教の牡鹿鳴く、春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。詞急ぎ候程に、南都若草邊に著きて候。このあたりにて御行方を尋ねばやと存じ候。

母「さても我が子の景清は、この程何處に在るやらん。誦南無や三世の諸佛、我が子の景清に、ふたよび逢はせてたび給へ。」

シテ詞「如何に案内申し候。母「我が子の聲と聞くよりも、覺えず樞に立出でて、景清なるかと悦べば、シテ詞「暫く。あたりに人もや候らん。某が名をば仰せられまじいにて候。」

母「まづ此方へ渡り候へ。さてこの程は何處に候ひつるぞ。シテ詞「さん候。西國の方に候ひしが、宿願の子細有るにより、都に上り清水に參籠申し候處に、大佛供養の由承り

今めかしき一今
更めきたる意

起きもせず一古
今集に「起きも
せず寝もせて夜
半を明しては春
のものとしてなが
め暮しつ」
御座船一安徳天
皇ましますをい
ふ

候程に、かやうの折節貴賤に紛れ、御音信の爲に参りて候。母「さては嬉しくも來り給ひて候。又尋ね申すべき事の候。包ます申すべきか。シテ詞「是は今めかしき仰せかな。何事にも候へ申し上げうするにて候。母「まことや人の申すは、頼朝をねらひ申すと聞き及びて候が眞にて候か。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せにて候さりながら、西海にて亡び給ひし御一門の、御弔ひにもなるべきかと、思へばねらひ申すなり。母「申す處はさる事なれども、明日をも知らぬ老の身の、果をも見届け給へかし。シテ詞「風にたどよふ浮舟の、教經の御供申さずして、母「誦物を思へば、シテ詞「起きもせず、地誦寝もせて夜半を明かしかね、この身を隠すかひもなく。景清が心の内、母もあはれと思召せ。上歌一門の船の内、一門の船の内に、肩を並べ膝を組み、所狭く澄む月の、景清は誰よりも、御座船になくて叶ふまじ、一類その以下、武略さまふくに多けれど、名を取楫の船に乗せ、主從隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば、驚馬に劣るが如くな

この君一後白河
法皇をさす

白張淨衣云々
假に神主の扮装
をなす

シテ詞「早夜の明けて候程に御暇申し候。母詞「かまへて御身をよくく慎みて、重ねて來り給ふべし。シテ謡「實に有難き母の慈悲、御言葉の末も頼もしき。地謡「柞の森の雨露の、柞の森の雨露の、梢も濡らす我が袖を、しほりかねたる涙かな。いつしか親心、悲しむ母の門送、景清も後を見返りて、涙と共に別れけり。涙と共に別れけり。(申入)
立衆一聲謡「世に隠れなき大伽藍、佛の供養急ぐなり。頼朝謡「そもく是は源家の官軍、右大將頼朝とは我が事なり。立衆謡「忝くもこの御寺は、聖武皇帝の御建立、大佛殿にておはします。ワキ謡「又この君の御威光、今この御寺にあひにあふ、立衆謡「大伽藍の御供養、大伽藍の御供養、光りかやく春の日の、三笠の山に影高き、法の御聲のさまづくに、供養をなすぞ有難き。供養をなすぞ有難き。

シテ一聲謡「面白や奈良の都の時めきて、色々飾る物詣で、詞「我はそれには引きかへて、敵をうたん謀を、思ふ心はおのが名の、謡「悪七兵衛景清と、詞よそにもそれと人やもし、白張淨衣に立烏帽子、實に我ながら思はざる。謡「姿に今は楯の葉の、時雨降り置く天が

下に、身を隠すべき便なき、憂き身の果ぞあはれなる。宮人の、姿を暫し狩衣、地謡「今日ばかりこそ翁さび、シテ謡「人などがめそ神だにも、地謡「塵に交はる宮寺の、供養の場に立ち出づる。

今日ばかりこそ
云々一伊勢物語
の歌に「翁さび
人などがめそ狩
衣けふばかりと
ぞたづもなきけ
る

ワキ詞「こは何者なれば御前真近く参るぞそこ退き候へ。シテ詞「是は春日の宮つこなるが、今日の日佛の御供養、場を清めの役人なるを、何しにとがめ給ふらん。ワキ謡「春日祭にあらばこそ、詞「是は佛の御供養、シテ謡「なう水波の隔てと聞く時は、佛も神も同一體、その上貴賤の事なるに、何とて選み給ふべき。ワキ謡「包むとすれど神はなほ、君を守の御威光、シテ詞「あらはれけるか白張の、ワキ謡「脇より見ゆる具足の金物、シテ謡「光りを放つ、ワキ謡「打物の、地謡「鞘つまりたる言葉の末、名のれくと責めければ、顯れたりと思ひつと、さらぬやうにて立歸り、又人かけに隠れけり。

ワキ詞「言語道斷の事、只今の者を如何なる者ぞと存じて候へば、平家の侍、悪七兵衛景清にて候。正しく我が君をねらひ申すと存じ候程に、警固の者に申し付け討ち取らせば

やと存じ候。如何にや如何に警固の兵たしかに聞け。只今見えし痴者を、早打つ取
つて参らせよと、さも高聲に下知すれば、地誦「畏つて候とて、かねて用意の警固の兵
皆一同に立騒ぐ。

悪九一太刀の名

「その時景清又立出でて思ふやう、こよ立ち退きては弓矢の恥辱となるべきなれば、
今一太刀は打ちあひて、重ねて時節を待つべしと、大音上げて呼ばはりけり。誰そもそ
も是は平家の侍悪七兵衛景清と、地誦「名のりもあへず瘧丸を、名のりもあへず瘧丸を。
するりと抜き持ち立向ひ、大勢に割つて入れば、さしも固めし警固なれども、四方へば
つとぞ遁げにける。中に若武者進み出でて、走りかよつてちやうと切ればひらりと飛ん
で手もとにより、忽ち勝負を見せにけり。今は景清是までなりと、少し祈念を致しつよ、
彼の瘧丸をさしかざせば、霧立ち隠すや春日山、茂みに飛び入り落ちけるが、又こそ時
節を待つべけれど、虚空に聲して失せにけり。

少し祈念を致し
つよ一隱形の秘
術を行ふこと

忠信

九郎判官義経吉野の僧徒を頼みて忍びしに、彼等心變りし
て討ち向ふに至りければ、義経山を下らんとす。従者の中
に佐藤忠信たゞ一人命を受けて踏みとどまり、防矢射て戦
ひやがて腹掻切りて失すよと見せかけ、遁れ出でて義経の
跡を追ふ事を。 (四番目)

シテ 佐藤忠信 ツレ 源義経
ツレ 従者 ワキ 伊勢三郎

衆徒一吉野の僧
兵

「是は判官殿の御内に、伊勢の三郎義盛にて候。さて我が君判官殿は、この吉野を
頼み御座候處に、衆徒の詮議變り、今夜夜討すべき事一定のやうに申し候間、この事申
し上げばやと存じ候。如何に申し上げ候、義盛が参りて候。判官「此方へ來り候へ。
ワキ「畏つて候。判官「さて只今は何のために來りて有るぞ。ワキ「さん候。只今参る事餘
の義にあらず。當山の者ども心變りし、今夜夜討を仕るべき事一定のやうに申し候間、